

下層では地山に近似する淡黄灰褐色土でややにごりのあるものが主体となっている。図示できる土器は出土していない。

43号土坑（図版 22、第 76 図）

Ⅲ区南東部に位置し、38号土坑の北東側に隣接する土坑である。平面形は径 140 cm 程度の円形で、深さ 138 cm である。壁の立ち上がりは急な傾斜で、深さ 55 cm 程度の深さで全体的にオーバーハングする。埋土はレンズ状に堆積し、深さ 25 cm 程度までの最上層は暗灰褐色土で、その下位では深さ 60 cm 程度まで粘性の強い黒灰褐色土層で、更に下位では厚さ 15 cm 程度で地山主体の暗黄灰褐色土層、軟弱な泥質の暗灰褐色土層と続く。深さ 100 cm 程度より下位は、内部が狭小なため土層の観察を行うことができなかった。

出土土器（図版 48、第 77 図 1～5）

1 は、強く外反して開く広口壺の口縁部で、口唇部にはキザミが施される。2 は、口縁部が外反して開く広口壺で、口唇部にはキザミが施される。肩部はなで肩となる器形である。3 は壺の肩部より下位である。丸底で、胴部下位の粗いハケが上位のハケを切る調整の先後関係が認められる。4 は壺の下位部で、胴部の立ち上がりはやや緩やかである。底部は、狭く不安定な平底である。5 はやや小型の直口壺で、頸基部は太く、口縁部がほぼ直上へ延びる。胴部は偏球形に近い。

44号土坑（図版 22、第 76 図）

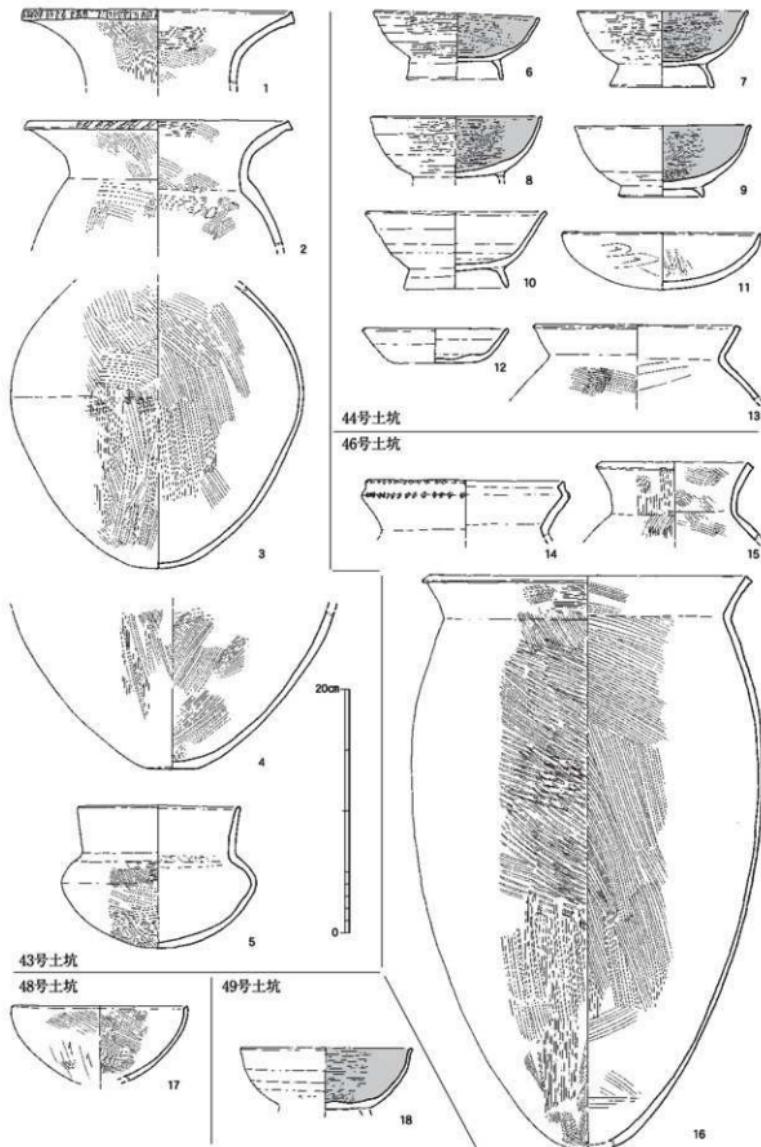
Ⅲ区南東部に位置し、西側を 32 号土坑に切られる先後関係で接する土坑である。平面形は径 103 cm 程度の円形で、深さ 164 cm である。壁の立ち上がりは急な傾斜で、100 cm 程度の深さの広い範囲でオーバーハングする。埋土はレンズ状に堆積し、深さ 35 cm 程度までの最上層は暗灰茶褐色土、黒灰褐色土、暗灰褐色土で、その下位の厚さ 30 cm 程度の暗黒茶褐色土と更に下位の黒褐色土はしまりのよい層である。深さ 80 cm 程度より下位は、内部が狭小なため土層の観察を行うことができなかった。中位程度の位置から完形に近い土器が複数出土した。

出土土器（図版 48・49、第 77 図 6～13）

6～9 は、内黒の黒色土器杯である。体部は内湾しながら立ち上がり、6～8 は内外面、9 は内面に密にミガキが施される。また体部外面下位に回転ケズリの痕跡が認められるものが多い。いずれも高台を有するが、8 は欠損しており、9 のものは低い。10 は土師器杯で、高い高台を有す。11 は丸底の土師器杯である。調整は、外面でケズリ、内面でミガキが残存する。12 は土師器杯である。口径 12.0 cm、器高 2.8 cm である。外底部は、回転ヘラ切りの後にナデ調整を行ったと見られ、板状圧痕が認められる。13 は混入品と考えられる。庄内系壺の口縁部から肩部にかけてで、外面には密にタタキが残存し、内面にはケズリが施される。

45号土坑（図版 22、第 76 図）

Ⅲ区南東部に位置し、32 号土坑の西側に隣接する土坑である。平面形は長軸 69 cm × 短軸 60 cm の不整橿円形で、深さ 103 cm である。壁の立ち上がりは全体的に急な傾斜の部分が多いが、東側の上位は緩やかである。また、深さ 70 cm 程度の位置で傾斜はやや緩やかとなる。埋土は黒灰褐色土主体で、下層は粘性が強い。図示できる土器は出土していない。



第77図 III区 43・44・46・48・49号土坑出土土器実測図(1/4)

46号土坑（図版23、第78図）

Ⅲ区南東部に位置し、28号土坑の北側に隣接する土坑である。平面形は長軸220cm×短軸185cmと大型で不整隅丸方形に近く、深さ152cmである。南側で9号掘立柱建物跡に帰属する柱穴に切られる。壁の立ち上がりは南側でやや緩やかな傾斜であるが、他は急な傾斜で下位はややオーバーハンプする。しかし、本造構は明確な検出ができず、埋土も極めて地山に近似する部分が多く、掘削段階でわずかに確認できる明瞭な埋土と、にごると思われる部分を基準として掘り広げていった結果、上記のような形状となった。よって、平面形、壁面、床面とともに非常に不明瞭な中で判断したもので、その確実性には非常に不安がある。

出土土器（第77図14～16）

14は複合口縁壺の口頭部で、口唇部と屈曲部にはキザミが廻る。15は壺の口縁部から肩部にかけてで、口縁部はやや外側の上方へ延びる。16は完形の長胴の壺である。調整は、内面でハケが見られ、外面では上位でタタキが密に残存し、下位では更に粗いハケが施される。

47号土坑

Ⅲ区南東部に位置し、Ⅲb区の南側拡張前は単独の土坑として検出したが、掘削の結果礎盤が伴い、また調査区拡張後に検出された他の柱穴とともに組み合って9号掘立柱建物跡を構成することが認められたため欠番とする。

48号土坑（図版23、第78図）

Ⅲ区南側中央部付近に位置し、52号土坑の東側に隣接する土坑である。平面形は長軸140cm×短軸127cmの隅丸長方形で、深さ30cmである。壁の立ち上がりはやや緩やかな傾斜である。埋土は淡灰茶褐色の1層で、地山との明瞭な区分は困難である。

出土土器（第78図17）

17は素口縁の鉢で、口縁端部はわずかに面をなし、内傾する。外面下半には、ケズリの痕跡がわずかに残る。

49号土坑（図版23、第78図）

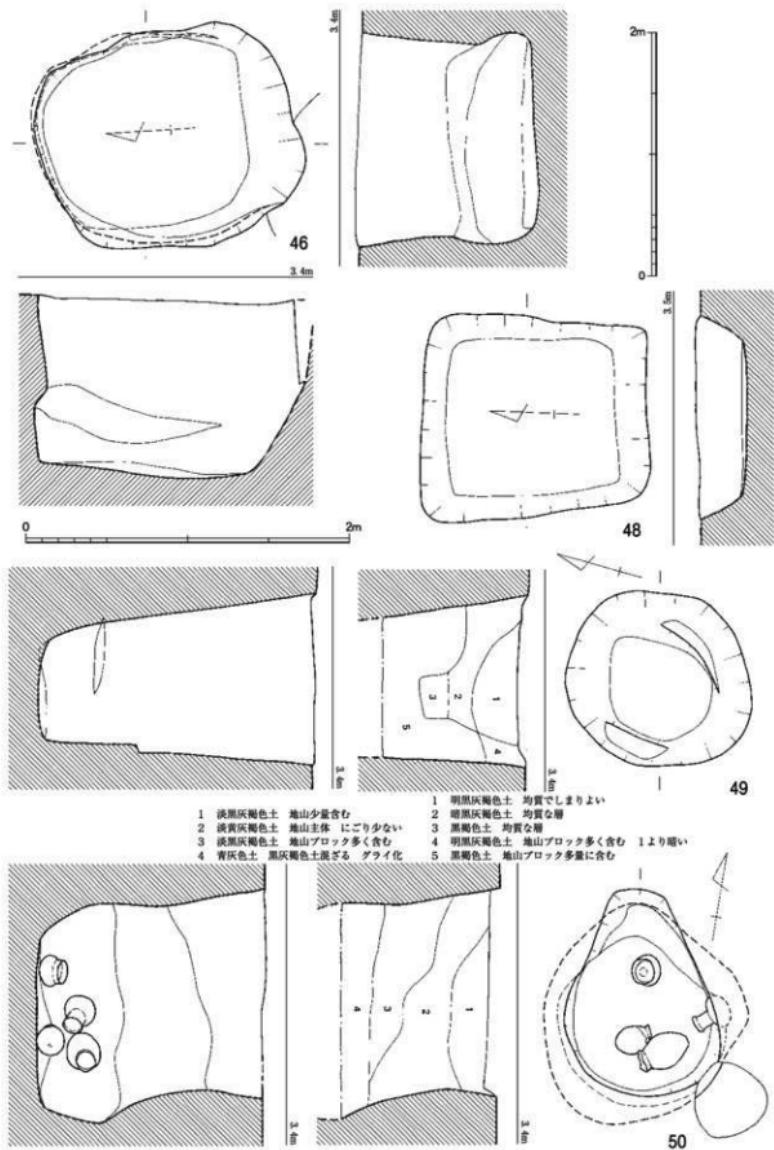
Ⅲ区南東部の中央付近に位置し、54・59号土坑の南東側に隣接する土坑である。平面形は径110cm程度の梢円形で、深さ169cmである。壁の立ち上がりは急な傾斜で、下位でテラス状となる部分がある。埋土は黒灰褐色土、黒褐色土からなり、土層の堆積状況から掘り返しが行われた可能性がある。深さ80cm程度より下位は、内部が狭小なため土層の観察を行うことができなかった。

出土土器（図版49、第77図18）

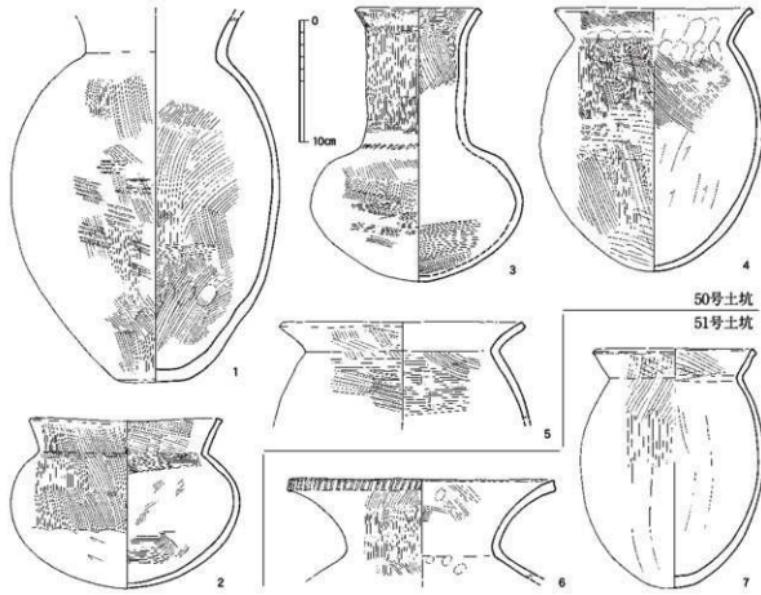
18は内黒の黒色土器杯である。体部は内湾しながら立ち上がり、内面にはミガキが残存する。高台が貼り付けられていたと見られるが、剥落している。外面下半には回転ケズリが施される。

50号土坑（図版24、第78図）

Ⅲ区南東部の中央付近に位置し、55号土坑の南側に隣接する土坑である。平面形は長軸127cm×短軸95cmのやや変形した梢円形で、深さ140cmである。壁の立ち上がりは急な傾斜で、下位で



第78図 III区 46～50号土坑実測図 (46のみ1/40、他は1/30)



第79図 III区50・51号土坑出土土器実測図(1/4)

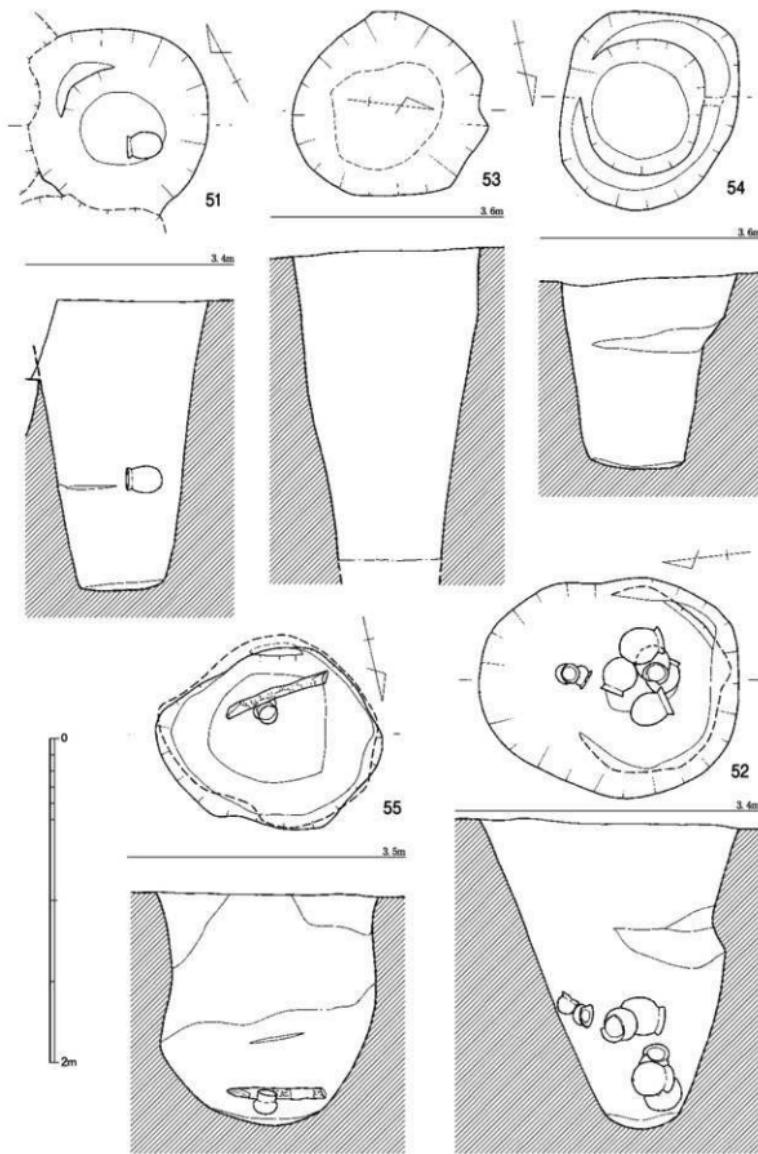
は全体的にオーバーハングする。埋土は淡黒灰褐色土と黒褐色土からなり、土層の堆積状況から北側からの埋没が認められる。深さ80cm程度より下位は、グラメ化して青灰色となり、分層は困難となる。底面付近で完形に近い土器が複数出土した。

出土土器（図版49、第79図1～5）

1は、頸基部がくびれ、口縁部が外反して開く広口壺と見られるが、口縁部は中途から欠失する。底部は不安定な平底である。2は、短い口縁部がやや外側の上方へのびる短頸壺である。頸基部はあまりくびれず太く、胴部は偏球形に近い器形である。3は、長頸壺で、口縁部は屈曲して外側へ開く。頸基部は締まって細く、刺突文が廻り、胴部は偏球形に近い器形である。4は在地系壺で、口縁部はわずかに外反気味に開く。内面下半にはケズリが施される。5は壺の口縁部から胴部にかけて、口縁部はわずかに外反気味に開く。調整は胴部外面でタタキ、内面でハケが施され、五様式系の可能性がある。

51号土坑（図版24、第80図）

III区南東部に位置し、西側を35号土坑や6号掘立柱建物跡に属する36号土坑に切られる先後関係で接する土坑である。平面形は径115cm程度の円形で、深さ176cmである。壁の立ち上がりは全体的に急な傾斜である。深さ110cm程度の位置でテラス状となる部分があるが、壁面を掘り過



第80図 III区 51～55号土坑実測図 (1/30)

ぎたためと考えられる。また、同様の深さから完形の土器が1点出土した。埋土は上層から明黒灰褐色土、地山に近似する淡黄灰褐色土と堆積し、東側から埋没したと窺われる堆積状況である。中位から下方はグライ化して青灰色となる。

出土土器（図版49、第79図6・7）

6は、口縁部が外反しながら開く広口壺で、口唇部にはキザミが施される。7は完形の在地系壺である。胴部外面の調整は、ハケの後に下半には板状工具によるナデが施され、内面も板状工具によるナデが認められる。

52号土坑（図版24、第80図）

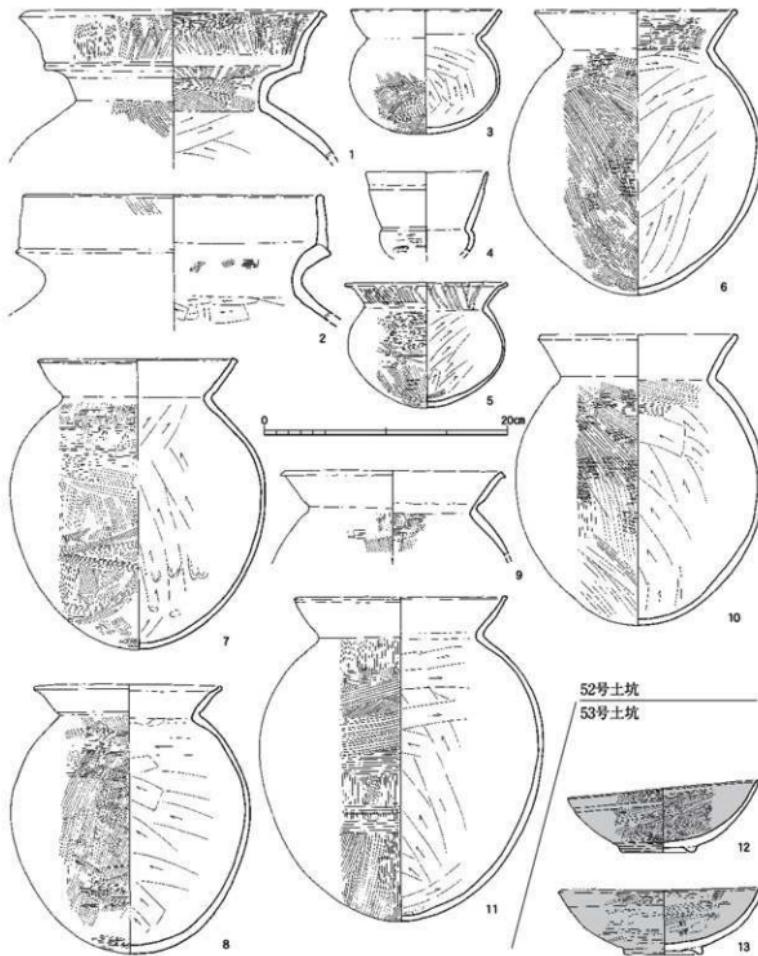
III区南側中央部付近に位置し、48号土坑の西側に隣接する土坑である。平面形は長軸157cm×短軸130cmの楕円形で、深さ190cmである。壁の立ち上がりは、北側でやや緩やかな一方で、南側は急な傾斜となっており、中位でオーバーハングする。下位では、ほぼ完形の土器が多数出土した。埋土はレンズ状に堆積し、黒褐色土、黒灰褐色土主体で、地山に近似する淡黄灰褐色土層もわずかに認められる。深さ120cm程度より下位は、内部が狭小なため土層の観察を行うことができなかった。

出土土器（図版50、第81図1～11）

1は山陰系二重口縁壺で、上部の口縁部はやや外反気味に開く。口縁部の内外面に密に暗文が施される。胴部内面にはケズリが施される。2は山陰系二重口縁壺で、上部の口縁部はほぼ直立て立ち上がる。胴部内面にはケズリが施される。3は小型の広口壺で、胴部は偏球形に近く、内面にはケズリが施される。4は小型丸底壺で、偏球形の小さな胴部の外面にはわずかにミガキが残存する。内外面には煤付着し、内面には炭化物のような付着物が認められる。5は小型の広口壺で、外反して開く口縁部の内外面に暗文が施される。偏球形の胴部で、外面上半にはミガキが密に施され、内面はケズリが施される。6は布留系の影響を受けた在地系壺と考えられる。胴部外面にはタタキがわずかに残存する。外面には全体的に煤が付着する。7は布留系壺で、口縁部はわずかに内湾気味に立ち上がる。肩部には横位のハケが廻り、内面の底部付近には押し出し技法の痕跡が認められる。外面には煤が付着する。8は布留系の影響を受けた在地系壺と考えられ、口縁部は外反気味に開く。肩部には横位のハケが施され、外面下位には細い工具による粗い調整が施される。9は壺の口縁部から胴部にかけて、口縁部はほぼ直線的に開く。胴部内面にはハケ調整が見られ、五様式系と考えられる。10は布留系の影響を受けた在地系壺と考えられる。外面下位に施される粗いハケは、上位のハケを切る調整の先後関係が認められる。肩部内面にはハケが残存する。外面には煤が付着する。11は布留系壺で、口縁部は内湾気味に立ち上がり、底部内面にはわずかに押し出し技法が見られる。外面には煤が付着する。

53号土坑（図版25、第80図）

III区南側中央部付近に位置する土坑である。平面形は径110～115cmの不整円形で、深さ190cm程度まで掘削したが、内部が狭小であり底面が不明瞭であったため、そこで掘削を停止した。埋土は上層で黒灰褐色土層、淡青灰色土層、粘性の強い黒褐色土層の順に上位から見られ、西側から埋没したと窺われる堆積状況である。なお、埋土には油質成分が多量に含まれ、臭気を放って



第81図 III区 52・53号土坑出土土器実測図 (1/4)

いたが、現代のものが調査前の地表面から浸透していった可能性もある。

出土土器 (図版50、第81図12・13)

12・13はともに、両黒の黒色土器杯である。体部は内湾しながら立ち上がり、やや浅い。内外面ともにミガキが施され、貼り付けられる高台は非常に低い。

54号土坑（図版26、第80図）

Ⅲ区南側中央部付近よりやや西寄りに位置し、59号土坑の北東側に隣接する土坑である。平面形は長軸122cm×短軸109cmの楕円形で、深さ115cmである。壁の立ち上がりは、全体的に急な傾斜の部分が多いが、深さ30~40cm程度の位置で広くテラス状の部分が広がる。なお、このテラス部分の南側は北側に比して段状に低くなっているが、これは北半が掘り過ぎたことによるものである。埋土はレンズ状に堆積し、深さ30cmまでの上層では、上位から淡灰茶褐色土層、淡黄茶褐色土層からなる。その下位では深さ80cm程度まで地山に近似し、淡黄灰褐色土がややにごる層からなり、よりにごりの強い上層と下層に分かれる。更に下位はグライ化して青灰色となる。図示できる土器は出土していない。

55号土坑（図版26、第80図）

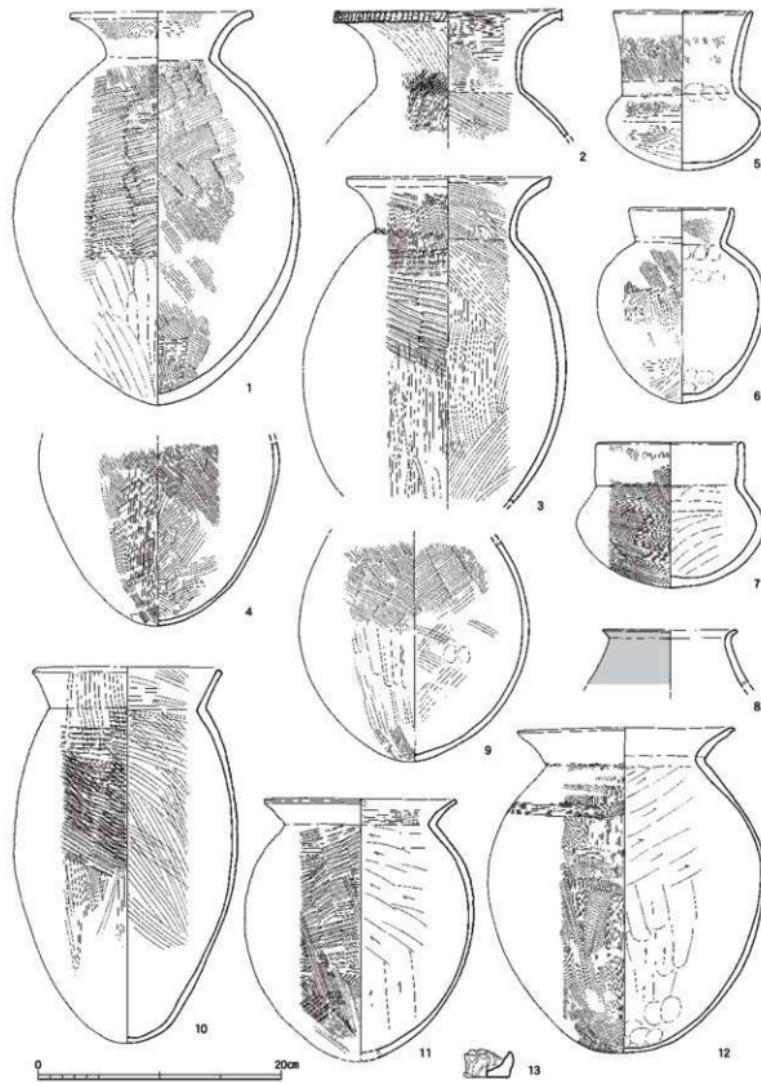
Ⅲ区南東部の中央付近に位置し、50号土坑の北側に隣接する土坑である。平面形は長軸138cm×短軸110cmの楕円形で、深さ142cmである。壁の立ち上がりは急な傾斜の部分が多く、下位では全体的にオーバーハングし、一部テラス状の部分も認められる。埋土は上層で、上位から地山に近似する淡黄灰褐色土層、淡黒灰褐色土層、暗黒灰褐色土層の順で、東側から埋没したと窺われる堆積状況である。土器は完形に近いものを含めて、上・中・下層それぞれから出土した。

出土土器（図版51、第82図1~13）

1は、頸基部が強くくびれ、口縁部が外反しながら開く広口壺である。胴部外面上位には密にタタキが残存するが、下位ではナデ調整により消えている。底部は尖底気味である。2は、頸基部がくびれ、口縁部が外反して強く開く広口壺である。口唇部にはキザミが施される。3は、口縁部が外反しながら開く広口壺で、外面胴部上位には密にタタキが残存する。頸基部には刺突文が廻る。4は壺の胴下部から底部にかけて、丸底で外面にはわずかにタタキが残存する。5はやや小型の直口壺で、太い頸基部から上方へ口縁部が延びる。胴部は扁球形に近い。6はやや小型の壺で、頸基部が強く締まり肩部が張る。短い口縁部がやや外側の上方へ延びる。7はやや小型の直口壺で、太い頸基部から口縁部が上方へ延びる。胴部は偏球形である。8は小型の短頸壺で、非常に短い口縁部が開く。外面は黒塗りされる。9は壺の胴部から底部にかけて、丸みのある器形である。外面には煤が付着する。内面にハケ調整が見られ、五様式系と考えられる。10は長胴の壺である。外面には煤が付着し、胴部上位にはタタキが密に残存し、下位では粗いハケ調整が見られる。11は壺で、外面には密にタタキが残存し、内面にはケズリが施される。口縁部は外反気味に開き、五様式系と考えられる。12は布留系壺で、肩部には平行文が廻る。内面底部には押し出し技法が見られる。13は非常に小型の手づくねによる土器で、口縁部は起伏が大きく、全体的に歪な形状である。底部は平底である。

56号土坑（図版27、第83図）

Ⅲ区南側中央部付近よりやや西寄りに位置し、58号土坑の南側、59号土坑の西側に隣接する土坑である。平面形は長軸92cm×短軸85cmの楕円形で、深さ132cmである。壁の立ち上がりは急な傾斜である。深さ80cm程度までは、地山主体で淡黒灰褐色土がわずかに混ざる淡黄灰褐色土の1層からなり、急速に埋没したことが窺える。図示できる土器は出土していない。



第 82 図 III区 55号土坑出土土器実測図 (1/4)

57号土坑（図版27、第83図）

Ⅲ区南東部の中央付近に位置する土坑である。平面形は一部ピットに切られるが、長軸134cm×短軸118cmの楕円形で、深さ132cmである。壁の立ち上がりはやや緩やかで、底面は狭くなる。埋土はレンズ状に堆積し、深さ50cm程度まで淡黒灰褐色土層で、その下位で厚さ20cm程度の地山主体の淡黄茶褐色土層で、更に下位では灰茶褐色土層となる。下層では内部が狭小なため土層の観察を行うことができなかった。底面付近で、破損した土器や木質物が出土した。

出土土器（図版52、第84図1～5）

1は畿内系の小型の広口壺で、頸基部は強くくびれ、口縁部は外側の上方へ直線的に延びる。胴部は球形に近い器形で、下半に焼成後小さな穿孔が外面より施される。外面にはわずかにミガキが残存する。2は小型丸底壺で、胎土は精良である。外面の下位には、ケズリの痕跡が残存する。3は二重口縁小型丸底壺で、器表は摩滅が目立つ。4は完形の五様式系の壺である。口縁部は外反気味に開き、内面にはケズリが施される。底部は、狭く不安定な平底である。5は壺の底部付近で、丸底で内面にはケズリが施される。

58号土坑（図版27、第83図）

Ⅲ区南側中央部付近よりやや西寄りに位置し、56号土坑の北側に隣接する土坑である。平面形は長軸121cm×短軸112cmの楕円形で、深さ150cmである。壁の立ち上がりは急な傾斜の部分が多く、北側は120～130cm程度の深さで広いテラス状の部分があり、そこから下位の傾斜はやや緩やかとなり、底面は狭くなる。埋土は深さ100cm程度まで地山ブロックを含む淡黒灰褐色土や黒灰褐色土で、明暗や地山ブロックの含有率の差で4層に分割される。そこから下位はグライ化した青灰色で、深さ130cm程度より下位は、内部が狭小なため土層の観察はできなかった。

出土土器（第84図6・7）

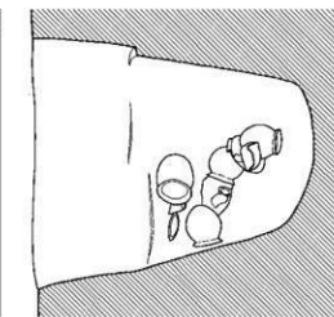
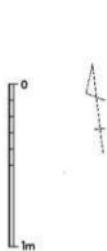
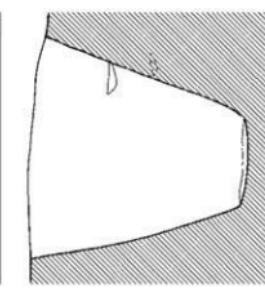
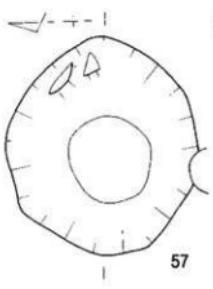
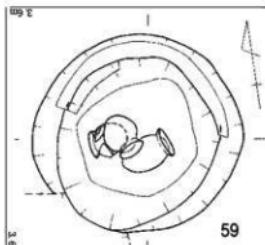
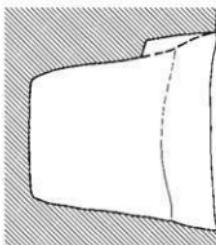
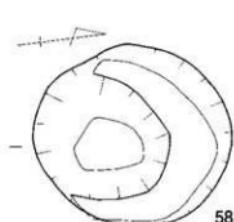
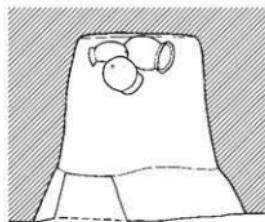
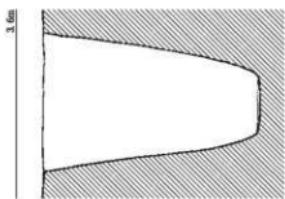
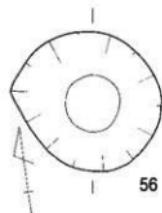
6は小型の直口壺で、頸基部のくびれはわずかである。やや粗雑な作りで、内面には起伏が目立つ。7は壺の口縁部にかけてで、外面にはタタキが残存し、内面にはハケが施される。五様式系と考えられる。

59号土坑（図版28、第83図）

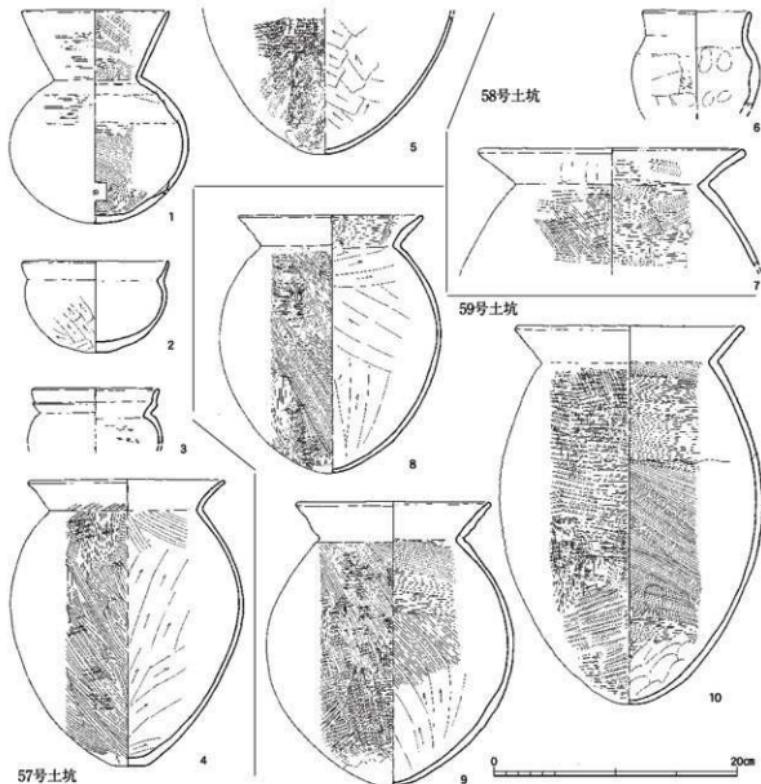
Ⅲ区南側中央部付近よりやや西寄りに位置し、54号土坑の南西側に隣接する土坑である。南西部が搅乱により一部欠失するが、平面形は径120～130cmの円形で、深さ115cmである。壁の立ち上がりは深さ30cm程度までやや緩やかで、そこから下位は急な傾斜となる。北側にテラス状の部分が見られるが、掘り過ぎによるものである。埋土は深さ40cm程度までの最上層が淡灰褐色土で、その下位で厚さ30cm程度の地山に近似するがにごりの強い黄灰褐色土層、更に下位は非常に地山に近似する淡黄灰褐色土層である。底面付近からは、ほぼ完形の土器が複数出土した。

出土土器（図版52、第84図8～10）

8は庄内系壺で、外面にはわずかにタタキが残存し、内面にはケズリが施される。口縁部は外反気味に開く。9は五様式系の壺で、内面下半にはケズリが施される。胴部の中位より上部に煤の付着が目立つ。10は長胴の在地系壺で、外面には密にタタキが残存し、内面にはハケが施される。外面には煤が付着する。



第83図 III区 56~60号土坑実測図 (1/30)



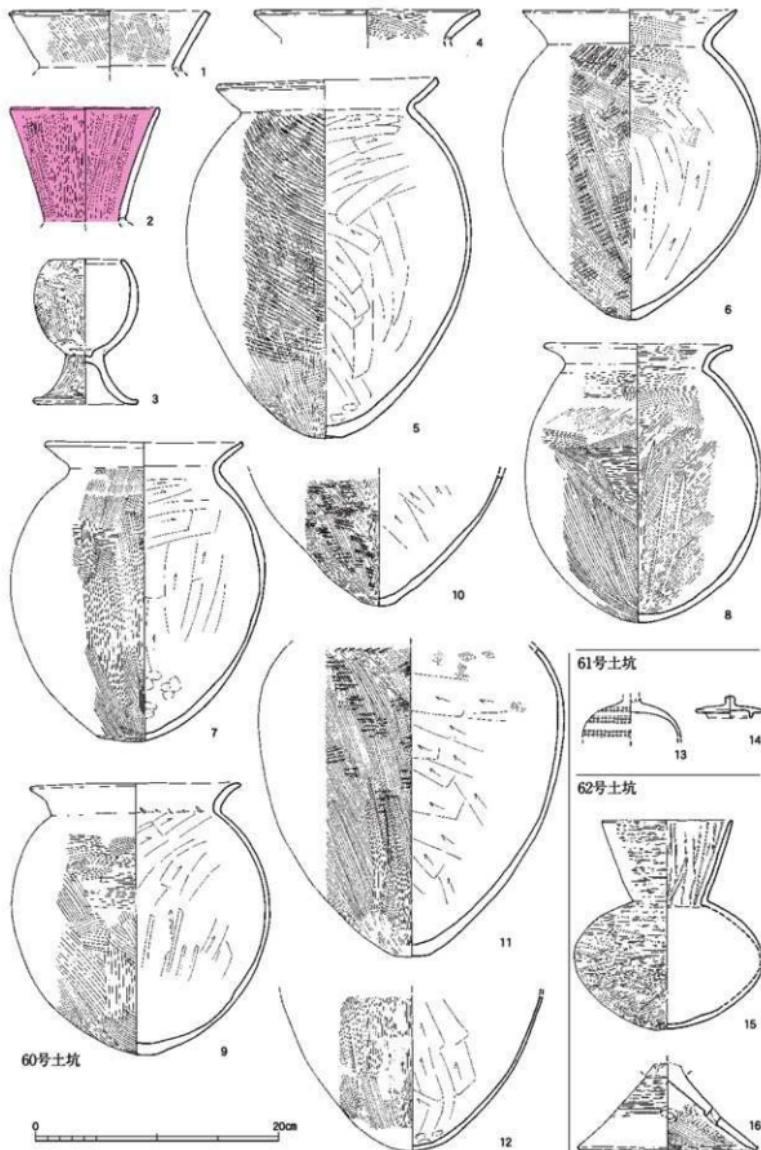
第84図 III区 57~59号土坑出土土器実測図 (1/4)

60号土坑 (図版28、第83図)

III区南側中央部から西寄りの位置の土坑である。平面形は長軸 155 cm × 短軸 127 cm の不整椭円形で、深さ 172 cm である。壁の立ち上がりは全体的に急な傾斜で、幅の狭いテラス状の部分が多数認められるが、掘り過ぎによって生じたものも含まれると考えられる。埋土は深さ 50 cm 程度までは淡灰褐色土層、その下位は暗灰褐色土層で、東側から埋没したと窺われる堆積状況である。下層では内部が狭小なため土層の観察を行うことができなかった。中位から底面よりやや上位にかけて完形に近いものを含め多数の土器が出土した。

出土土器 (図版52、第85図1~12)

1は壺の口縁部で、頸基部から外側上方へ直線的に延びる。2は長頸壺の口縁部で、やや外反気味に外側上方へ延びる。内外面ともに密に縦位のミガキが施され、外面には赤色顔料が塗布され



第85図 III区 60～62号土坑出土土器実測図(1/4)

る。3は脚部を有する小型の無頸壺で、外面には密にミガキが施される。4は壺の口縁部で、わずかに外反気味である。外面には煤が付着する。5は完形の五様式系壺で、外面にはタタキが密に残存し、内面はケズリが施される。非常に狭い底部は、わずかに上底状である。6は五様式系壺で、内面にはケズリが施されるが、上位にはハケが残存する。底部はわずかに突出気味である。外面には煤が付着する。7は布留系壺で、底部はわずかにレンズ状で、内面には押し出し技法が認められる。8は在地系壺で、内外面ともにハケ調整だが、内面には縦位の幅の狭いケズリが施される。外面には煤が付着する。9は五様式系壺で、口縁部が外反して開く。調整は外面ハケ、内面ケズリであるが、内面下位には細い単位の別調整が見られる。底部はわずかに突出気味で、外面には煤が付着する。10はわずかに突出気味の壺の底部で、外面には煤が付着する。11は壺の胴部から底部にかけてで、外面はハケ調整でわずかにタタキが残存し、内面はケズリが施される。底部はわずかにレンズ状で、外面には煤が付着する。五様式系と見られる。12は壺の胴部下位から底部にかけてで、内面には押し出し技法が見られ、布留系と考えられる。外面には煤が付着する。

61号土坑（図版28、第86図）

III区のやや南側西端部に位置する土坑である。平面形は長軸312cm×短軸208cmと大型の不整橢円形で、深さ70cmである。壁の立ち上がりは全体的にやや緩やかであり、南側のテラス状の部分は実態を表している。しかし、北側と東側のテラス部分や、底面の東半が南側へ広がる点は、掘り過ぎによるものである。埋土はレンズ状に堆積し、上層が地山に近似する黄灰褐色土、下層は灰褐色土で、その間に灰褐色土と黒褐色土が混ざり、多量の木質粒が含まれる薄い層が挟まれる。

出土土器（第85図13・14）

13は染付で、壺等の蓋と考えられ、文様は平行に廻る。14は鉄釉の施される陶器蓋である。

62号土坑（図版29、第86図）

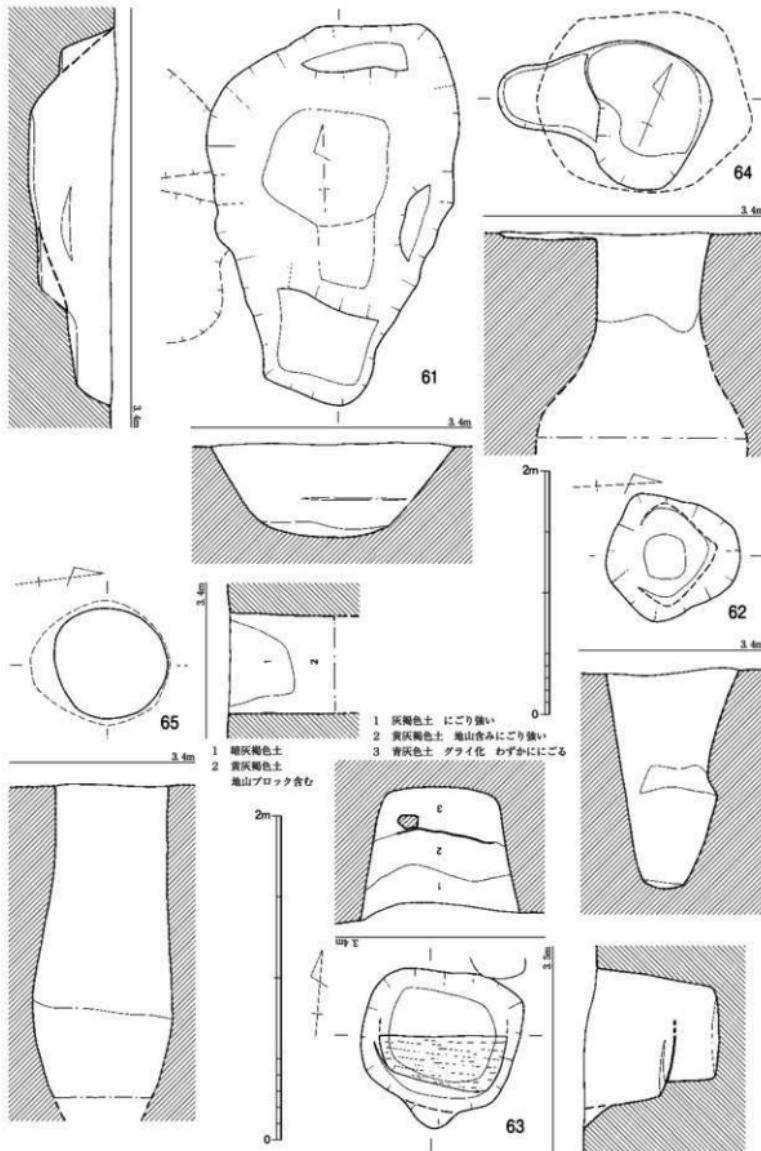
III区の中央よりやや南側の西端部に位置する土坑である。平面形は長軸82cm×短軸77cmで、深さ135cmである。壁の立ち上がりは急な傾斜で、北側は深さ60～70cm程度の位置でオーバーハングする。埋土は黒灰褐色土主体である。

出土土器（図版53、第85図15・16）

15は畿内系の長頸壺で、頸基部が強く縮まり、胴部は偏球形となる。口縁部は外側上方へ直線的に延びる。外面には密に横位のミガキが施され、口縁部内面には縦位の暗文が施される。16は小型器台の脚部で、外面には横位のミガキが施される。上端には、上部との接合部のためのキザミが見られる。穿孔は4箇所に施される。

63号土坑（図版29、第86図）

III区南側の中央部付近に位置する土坑で、2号溝を切る先後関係である。平面形は長軸128cm×短軸120cmで、深さ82cmである。南側が掘り過ぎでやや広がっており、壁の立ち上がりは急な傾斜である。埋土は最上層で灰褐色土である。その下位は黄灰褐色土で、更に深さ50cm程度より下位ではグライ化して青灰色となり、両者の境界には樹皮が敷設される。また、樹皮と同様の高さでわずかにテラス状の部分が認められる。図示できる土器は出土していない。



第 86 図 III 区 61 ~ 65 号土坑実測図 (61・64 は 1/40、他は 1/30)

64号土坑（図版29、第86図）

Ⅲ区中央部よりやや南側に位置する土坑で、21号掘立柱建物跡を切る。平面形は長軸176cm×短軸120cmの不整椭円形である。西側は深さ5cm程度の浅いテラス状の部分となっており、東側は急激に落ち込む。その壁の立ち上がりは全体的に急な傾斜で、深さ80cm程度より下位は大幅にオーバーハングするようになる。深さ170cm程度まで掘削したが、オーバーハングする中で滞水し、壁が大幅に崩落したため、安全性の考慮からも掘削の続行を断念した。埋土については、内部が狭小であったため、深さ80cm程度までしか確認できていないが、黒褐色土で分層できない1層からなり、急速に埋没した可能性がある。土器はほぼ完形のものを含め複数出土し、一部はオーバーハングして地表下に入り込む壁面付近の位置からも出土した。

出土土器（図版53、第87図1～9）

1・2はともに土師器の長頸壺で、外面には密にミガキが施される。1の胴部には、平行するわずかな窪みが見られ、タタキの痕跡の可能性がある。1は光沢の強い黒色で、漆が塗布されていると考えられ、2は赤色顔料が塗布される。3は非常に小型の土師器壺で、平底である。4は小型の土師器壺で、不安定な平底である。5は土師器壺の口縁部から肩部にかけてで、被熱していると見られる。6は把手付の土師器で、底部に穿孔が見られないことから壺と考えられる。外面下位には煤が付着する。7は須恵器壺で、口縁部はやや歪み、端部の外側が肥厚する。胴部にはカキメが廻る。底部付近には、ケズリが施され直線一条のみのヘラ記号が見られる。8は須恵器提瓶で、口縁部はほぼ直口である。胴部には全体的にカキメが廻り、裏表両面に同様の綾杉文状のヘラ記号が施される。9は須恵器高杯の脚部である。裾端部は下方へ突出する。内面には残存部で2箇所に「×」のヘラ記号が見られる。

65号土坑（図版30、第86図）

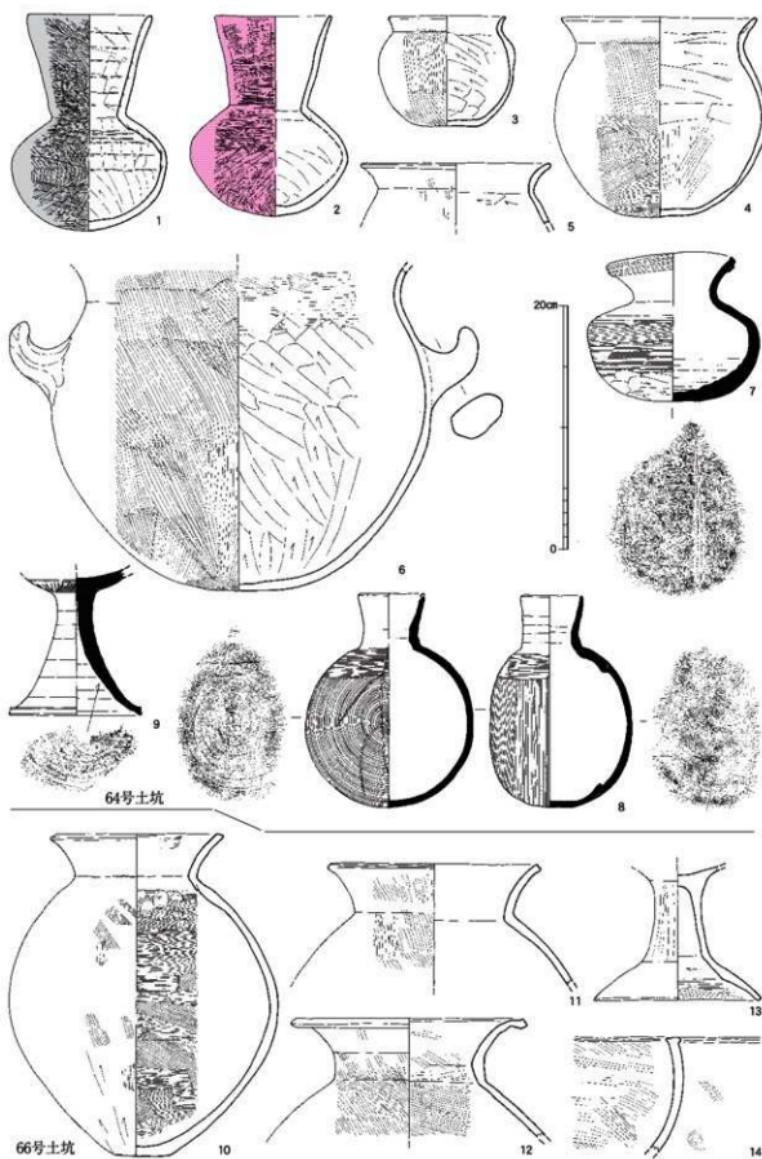
Ⅲ区の北半を中心に広がる包含層の南限よりもやや南寄りで、Ⅲ区中央部付近より南東寄りにあたる位置に所在する土坑である。平面形は径42cm程度の円形で、深さ190cm程度まで掘削し、それより下位にも埋土が認められたが、内部が狭小なため掘削を続けることができなかった。壁の立ち上がりは、非常に急な傾斜で、下位ではややオーバーハング気味となっている。埋土は深さ90cm程度までしか確認できなかったが、最上層が暗灰褐色土で、その下位は地山ブロックを含む黄灰褐色土層である。その堆積状況から掘り返しの行われた可能性もある。図示できる土器は出土していない。

66号土坑（図版30、第88図）

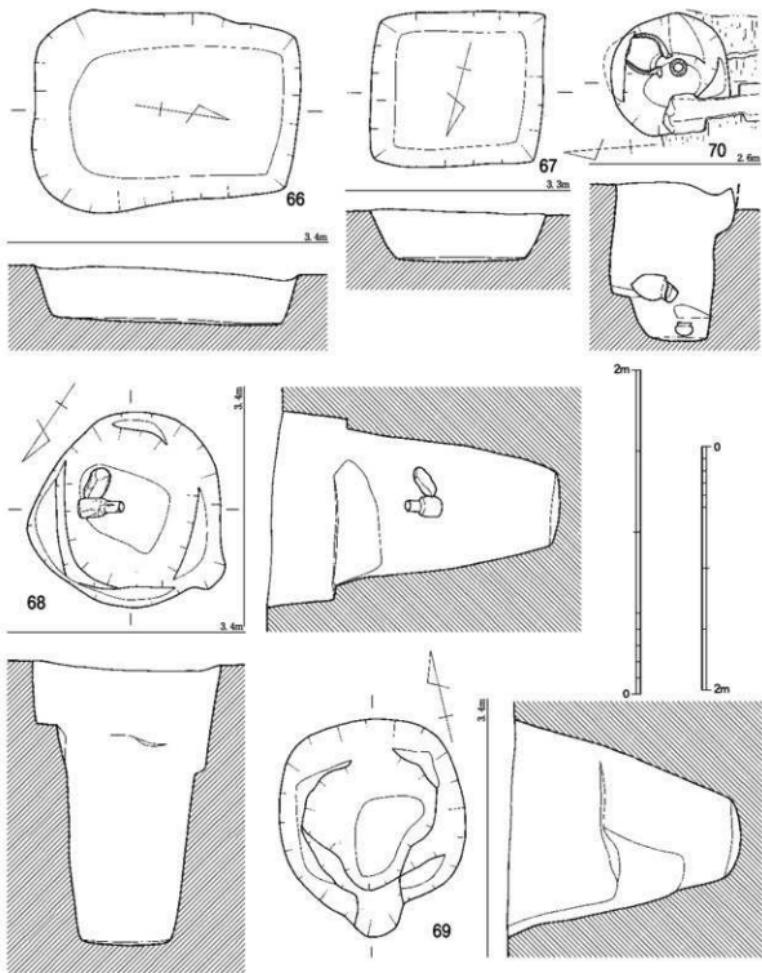
Ⅲ区南側の中央部付近に位置し、67号土坑の南側に隣接する土坑である。平面形は長軸162cm×短軸120cmの不整隅丸長方形で、深さ33cmである。壁の立ち上がりはやや急な傾斜である。埋土はやや砂質混じりの淡灰褐色土の1層のみである。

出土土器（図版54、第87図10～14）

10は、頸基部がやや強くくびれ、口縁部は外反して開く広口壺である。底部はレンズ状に近い不安定な平底である。11・12は、口縁部が外反して開く広口壺である。12の口縁部は特に強く開く。13は高杯の脚部で、内面に一部ケズリが見られる。14は素口縁の鉢である。



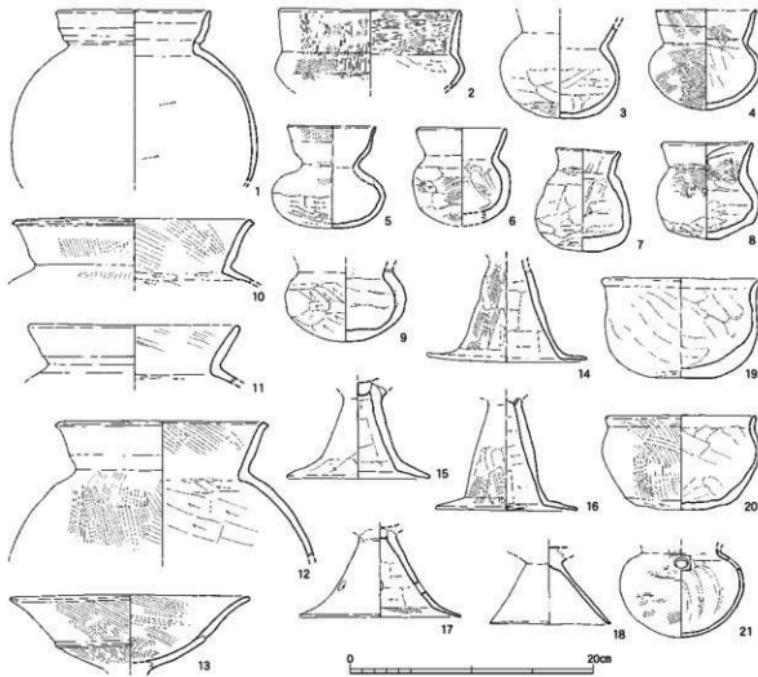
第87図 III区 64・66号土坑出土土器実測図(1/4)



第88図 III区 66～70号土坑実測図 (69のみ1/40、他は1/30)

67号土坑 (図版31、第88図)

III区南側の中央部付近に位置し、66号土坑の北側に隣接する土坑である。平面形は長軸 110 cm × 短軸 96 cm の長方形で、深さ 30 cm である。壁の立ち上がりはやや緩やかな傾斜である。埋土はやや砂質混じりの淡灰褐色土の 1 層のみである。図示できる土器は出土していない。



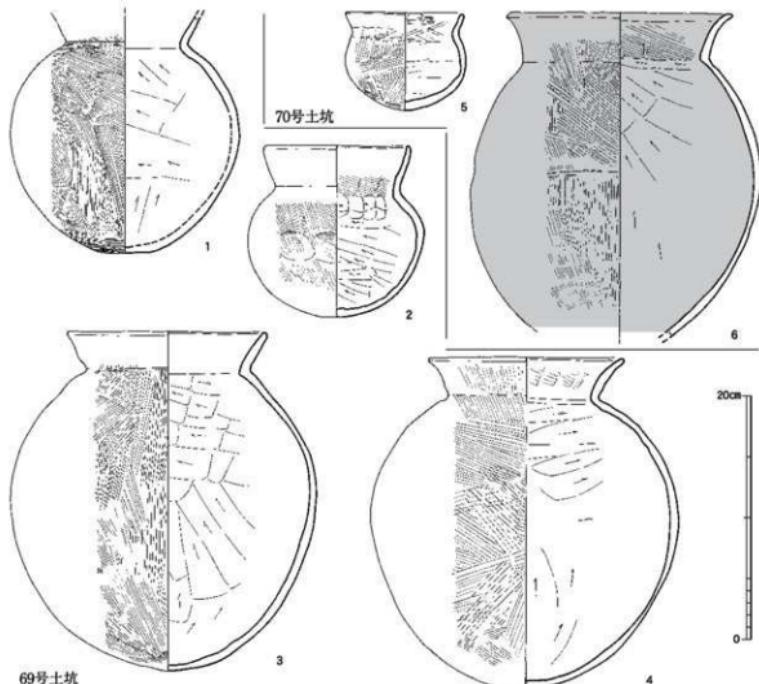
第89図 III区68号土坑出土土器実測図(1/4)

68号土坑(図版31、第88図)

III区中央部よりやや南寄りに位置し、北半を中心広がる包含層を切る状態で検出された土坑である。平面形は径120cm程度の不整円形で、深さ173cmである。壁の立ち上がりは全体的に非常に急な傾斜である。上位でテラス状の部分が複数見られるが、掘り過ぎによって生じた部分もあると見られる。埋土はレンズ状に堆積し、最上層は50cm程度の厚さの暗灰褐色土層でしまりがよい。より下位では暗灰褐色土や黒灰褐色土の明瞭な埋土と地山に近似する黄灰褐色に類する埋土が互層となり、深さ80cm程度より下位ではグラクイ化して青灰色となり、細分は困難となる。中位程度の深さから木器が出土した。

出土土器(図版54・55、第89図1~21)

1は土師器壺で、山陰系二重口縁壺の退化形態のものである。胴部内面にはケズリの痕跡が見られる。2は、胴部があまり張らず、頸基部が太い小型の直行壺で、混入品の可能性がある。3~9は土師器小型丸底壺である。外面には主に下半部にケズリが施される。4は他の小型丸底壺よりも均整のとれた器形で、器表の起伏が少ない。5の頸基部は強くくびれ、口縁部は内湾して立ち上がる。7は下膨れの器形で、口縁部は細く立ち上がる。10~12は土師器甕で、いずれも胴部内面に



第90図 III区 69・70号土坑出土土器実測図 (1/4)

はケズリが施される。10・12は外面に煤が付着する。13は土師器高杯の杯部で、内外面ともにハケ調整が見られる。屈曲部より下位は内清気味、上位で外反気味に立ち上がる。14～16は強い屈曲で裾部が広がる高杯脚部で、いずれも内面にケズリが施される。17は裾部への屈曲がわずかな土師器高杯脚部で、3箇所に穿孔が施され、内面にはケズリが施される。18は低脚の土師器高杯脚部で、杯部との接合部から裾部まで直線的である。19・20は土師器鉢で、非常に短い口縁部がわずかに外傾する。19は内外面ともにナデ調整であるが、20の外面はハケ調整で、底部付近にはケズリが施される。21は土師質で、胴部はやや偏球形気味で、肩部の1箇所に穿孔がある。外面にはハケ調整が残存し、器壁は薄い。須恵器越の模倣品と考えられる。

69号土坑（図版32、第88図）

III区中央部よりやや南東寄りに位置し、III区の北半を中心広がる包含層を切り込む状態で検出された土坑である。平面形は径160cm程度の不整円形で、深さ190cmある。壁の立ち上がりは、やや緩やかな傾斜の部分が多く、底面は狭くなる。南側を中心にテラス状や傾斜の変化する部分

が目立つ。埋土はレンズ状に堆積し、暗灰褐色土や地山に近似する黄灰褐色土が見られる。深さ50cm程度より下位では、グライ化して青灰色となる。これら層は、それぞれにごりの強さで更に細分される。

出土土器（図版55、第90図1～4）

1は、頸基部が強くくびれる壺である。胴部は球形に近く、外面にハケ、内面にケズリの調整が施される。底部は平底に近いレンズ状である。2は小型の広口壺で、内面にはケズリを施す。3・4は、ともに胴部が球形に近い壺で、調整は外面ハケ、内面ケズリで、外面には煤が付着する。4の口縁部は3よりも強く外反し、底部はややレンズ状となる。

70号土坑（図版32、第88図）

Ⅲ区中央部付近に位置する土坑で、26・28号掘立柱建物跡に帰属する礎盤を切る。その樹皮部分は掘り抜かれるが、横木は避けて掘削されたため、土坑の内部に残存する形となっている。Ⅲ区北半を中心広がる包含層の分布範囲中に所在し、ある程度下部へ掘り下がった段階で検出されたが、包含層の堆積との先後関係は把握することはできなかった。平面形は径75cm程度の円形で、深さ97cmである。壁の立ち上がりは急な傾斜で、一部オーバーハング気味の部分もあり、底面付近でテラス状の部分が認められる。埋土は黒灰褐色土主体である。底面付近やそのやや上位から土器が出土した。

出土土器（図版55、第90図5・6）

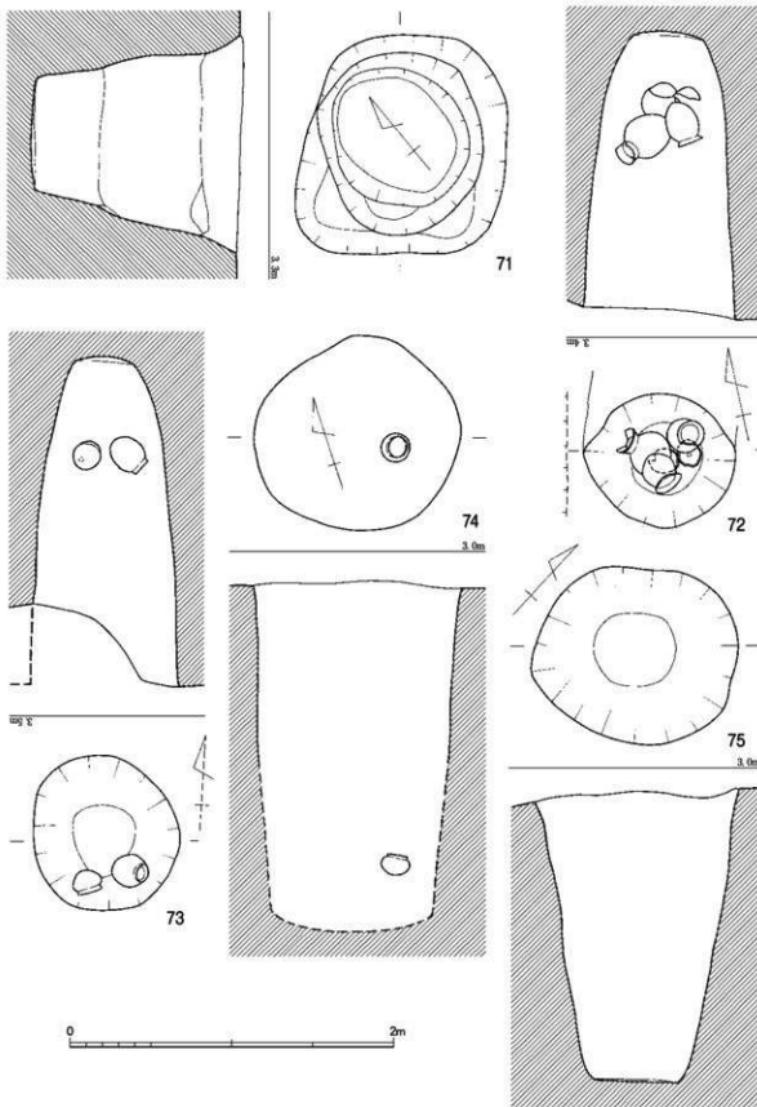
5は小型の短頸壺で、頸基部のくびれはわずかである。6は、頸基部があまりくびれず太く、口縁部が外反して開く広口壺である。胴部内面にはケズリが施される。内外面ともに黒色顔料が塗布される。

71号土坑（図版32、第91図）

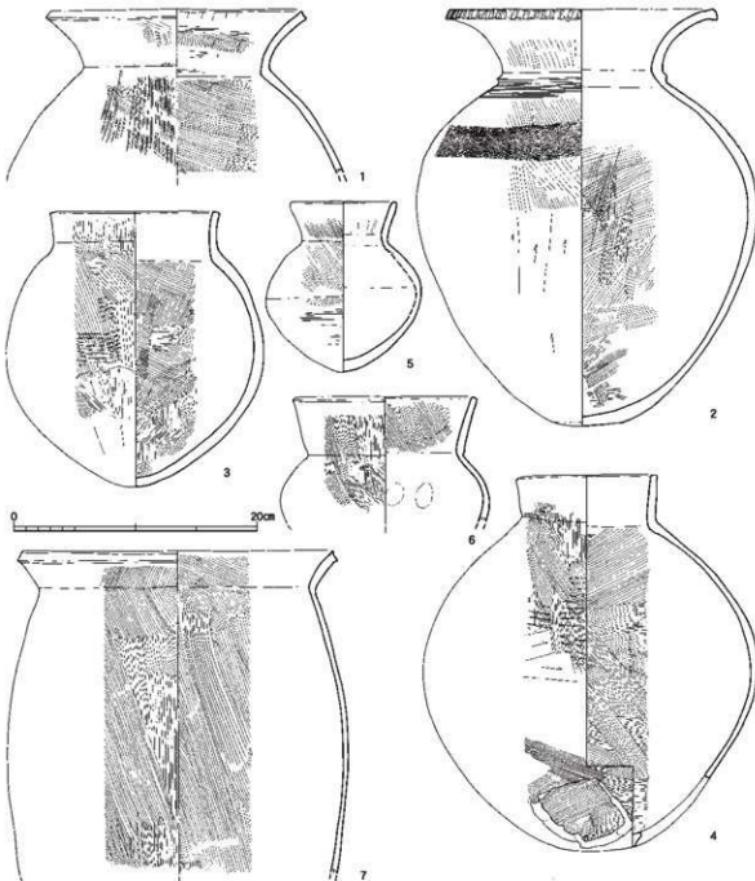
Ⅲ区南西部に位置し、17・26号土坑の北東側に隣接する土坑である。平面形は一辺130cm程度の不整形に近く、深さ130cmである。壁の立ち上がりは、検出面直下ではやや緩やかであるが、それより下位では急な傾斜となり、他にも傾斜の変化する部分やテラス状の部分が認められる。上層の埋土は、暗灰褐色土主体である。中位程度の深さの位置からは、やや大きめの土器片が複数出土した。

出土土器（図版56、第92図1～7）

1は、口縁部が外反しながら開く広口壺である。外面調整では、継位の粗いハケの後に細かいハケが施される。肩部はあまり張らず、なで肩の器形である。2は、頸基部がやや強くくびれ、口縁部が強く外反して開く広口壺である。頸基部には低い断面三角形の突帯が廻り、その直下に粗いハケ状の平行文が廻る。また、胴部上位には粗いハケ状の波状文が廻り、口唇部にはキザミが施される。底部はレンズ状である。3はやや小型の直口壺で、やや尖底気味である。4は、頸基部がやや強く締まって細い直口壺で、胴下部に焼成後の穿孔が内面より施される。5は小型の畿内系広口壺である。やや尖底気味である。6は頸基部の太いや小型の直口壺である。口縁部はやや外側の上方へ直線的に延びる。7は在地系壺の口縁部から胴部にかけてである。内外面ともにハケ調整が見られる。外面には煤が付着する。



第91図 III区 71~75号土坑実測図 (1/30)



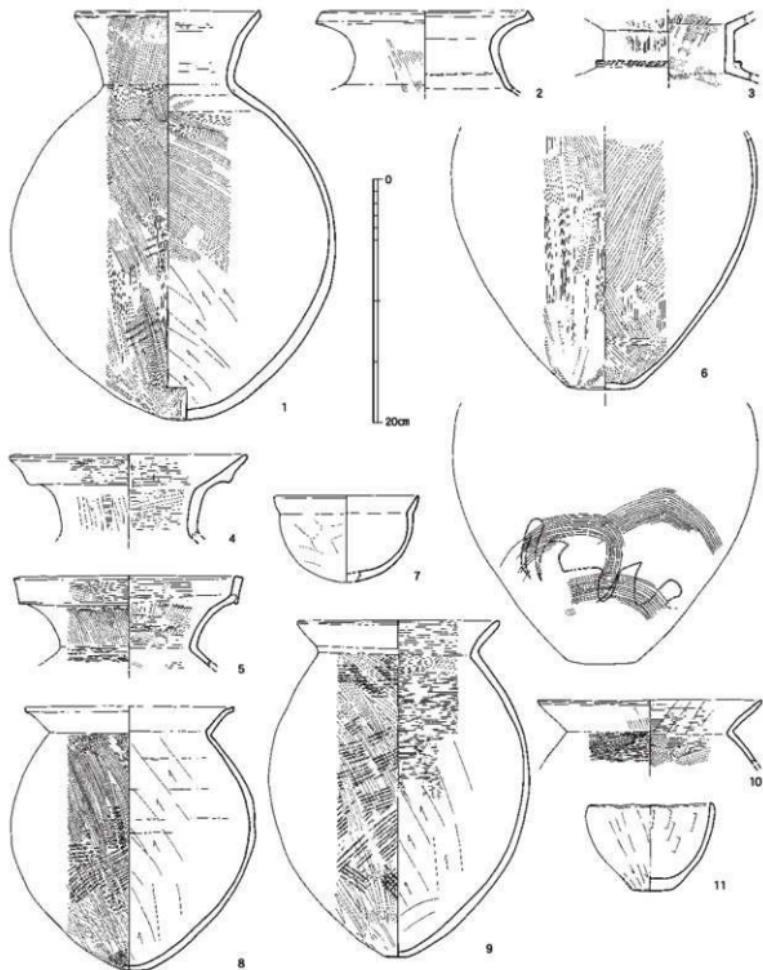
第92図 III区 71号土坑出土土器実測図 (1/4)

72号土坑 (図版33、第91図)

III区中央部より南西寄りに位置する土坑である。他の遺構に北半の上位が切られるが、平面形は径 80 cm 程度の円形で、深さ 176 cm である。壁の立ち上がりは非常に急な傾斜である。底面はある程度上位で、ほぼ完形のものを含め複数の土器が出土した。

出土土器 (図版56、第93図1~11)

1は、頸基部が強くくびれ、口縁部が外反して開く広口壺である。底部はわずかにレンズ状である。2は、頸部は内傾するが、口縁部が強く外反して開く壺である。口唇部はやや広がって面をな



第93図 III区 72号土坑出土土器実測図 (1/4)

す。出土例が少なく、系統等は不明である。上部がきれいに剥落した二重口縁壺の下部口縁の可能性もある。3は畿内系二重口縁壺の頸部である。頸基部には突帯が廻り、キザミが施される。内外面ともに暗文状のミガキが施される。4は畿内系二重口縁壺の口頭部である。頭部外面には縦位の太いミガキが施されるが、口縁外面と内面には横位のミガキが施される。5は在地系複合口縁壺

の口頸部から肩部にかけてである。肩部外面にはタタキが見られるが、他の部位にはハケ調整が施される。6は壺の胴部から底部にかけてで、外面上位、外面下位、内面のそれぞれで残存するハケ調整は異なる。底部はわずかにレンズ状である。下位に、沈線と粗いハケ状のものとの組み合わせによる文様が施される。沈線が先行する切り合いである。7は小型丸底壺で、短い口縁部がやや外側へ開く。8は庄内系壺で、口縁部が外反気味に開き、外面にはタタキが残存する。9は五様式系壺で、底部は、非常に狭い範囲でレンズ状となる。内面調整は、下位でケズリが施され、上位でハケが残存する。10は、五様式系壺で肩部の外面にタタキ、内面にハケが見られる。11は素口縁の鉢である。

73号土坑（図版33、第91図）

Ⅲ区南半部でも南側の中央部付近に位置し、37号土坑の南側、82号土坑の北側に隣接し、1号溝と切り合う土坑である。本遺構は、調査面での検出作業段階では把握できており、1号溝の掘削段階で所在を確認した。そのため、1号溝との先後関係を検出により明瞭に確認できなかったが、1号溝の掘削時で底面に至る前に本遺構の埋土が表れていた可能性があり、1号溝を切る可能性が高いと考える。平面形は長軸95cm×短軸84cmの不整梢円形で、深さ202cmである。壁の立ち上がりは急な傾斜である。上層の埋土は、黒灰褐色土主体である。中位よりやや深い位置から、ほぼ完形の土器が2点出土した。

出土土器（図版57、第94図1～7）

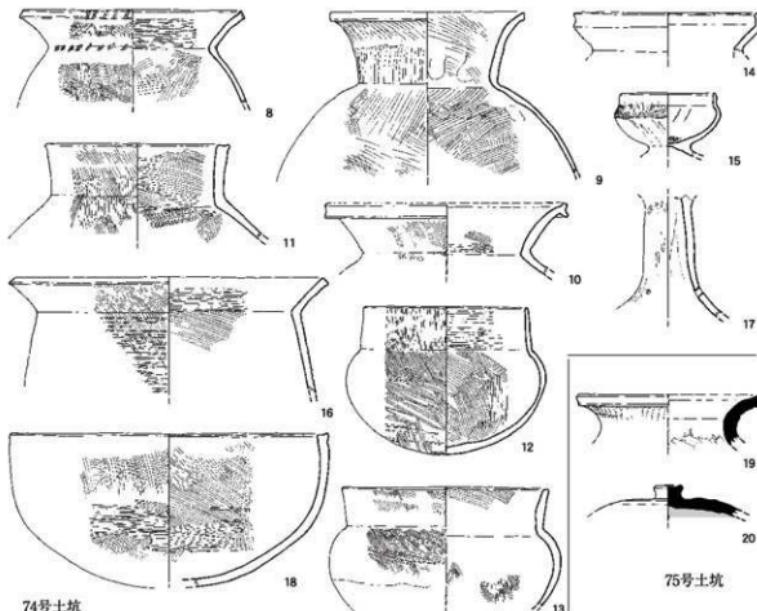
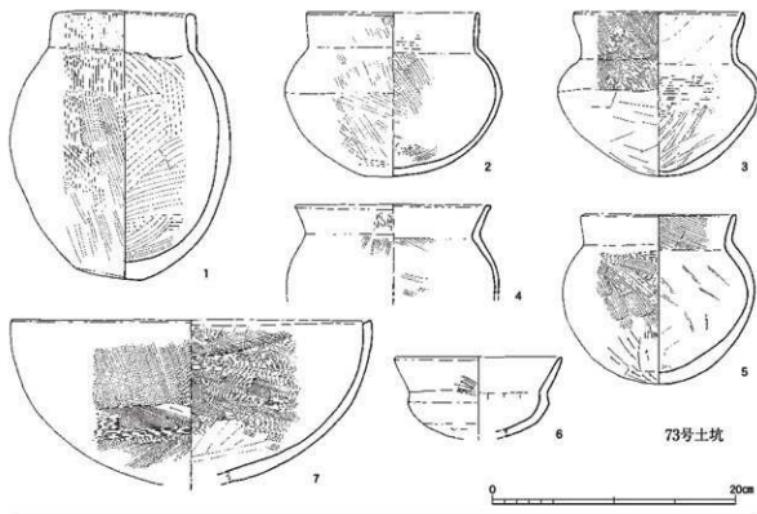
1は、頸基部があまり締まらない直口壺で、内外面ともにハケが施される。2は、頸基部が太い直口壺である。胴部は偏球形に近い。3はやや上位に重心があり、胴部のやや強く張る壺である。口縁部はわずかに開く。4は、短い口縁部がわずかに開く壺。5はやや小型の壺で、頸基部があまり締まらず、口縁部はわずかに開く。6は、口縁部が屈曲して開く鉢。頸基部付近に細かい沈線が数条みられるが、欠損しているため全容は不明である。7は大型の素口縁の鉢である。

74号土坑（図版33、第91図）

Ⅲ区南端の中央部に位置する土坑である。平面形は径120～130cmの不整円形である。深さ212cmまで掘削を行ったが、深さ110cmより下位では、壁面に見られる土壤でごりが少ないと細かい有機質が混ざるなど、壁面および底面はほとんど明瞭に確認できないまま掘削を断念した。上層で壁の立ち上がりは非常に急な傾斜で、埋土は地山主体の淡黄灰褐色土で、深さ50cm程度より下位ではグライ化して青灰色となる。深さ170cm程度の位置から完形の土器が出土した。

出土土器（図版57、第94図8～18）

8は、口縁部が外反して開く広口壺で、なで肩の器形である。口唇部と頸基部にキザミが施される。9は、頸基部がやや強く締まり、口縁部が外反して開く広口壺である。10は、口縁部が外反して開く広口壺で、口縁端部は広がって面をなす。11は直口壺の口縁部から肩部にかけてである。12・13は、頸基部が太い直口壺で、胴部は偏球形に近い。13の口縁部は、わずかに外側に開く。14は在地系複合口縁壺の口頸部である。15は小型で脚付の直口壺である。頸基部は太く、胴部は偏球形に近い。16は在地系壺で、外面にはタタキが見られ煤が付着する。17は高杯の脚部で、外面にわずかにミガキが残存する。3箇所に穿孔が施される。18は大型の素口縁の鉢である。



第94図 III区 73~75号土坑出土土器実測図 (1/4)

75号土坑（図版34、第91図）

III区南端の中央部に位置する土坑である。平面形は長軸126cm×短軸119cmの不整円形で、深さ178cmである。壁の立ち上がりは急な傾斜である。埋土はレンズ状に堆積し、上層から厚さ15cm程度の黒灰褐色土層、厚さ15cm程度の淡灰褐色土層、地山ブロックを多く含む暗褐色土層となっており、その下位では均質な黒灰褐色土層で、この層からは礫がまとまって出土した。深さ90cm程度より下位では内部が狭小であるため土層の詳細な観察はできなかった。

出土土器（図版57、第94図19・20）

19は須恵器壺の口縁部で、外反して開き、端部はやや広がり面を成す。20は須恵器杯蓋で、つまみを有す。内面の黒色の付着物は墨痕と見られ、平滑となる部分もあることから、転用硯として使用された可能性がある。

76号土坑（図版34、第95図）

III区南西隅付近に位置する土坑である。平面形は径170cm程度の不整円形で、深さ160cmである。壁の立ち上がりは急な傾斜の部分が多い。北半の下位西側が掘り過ぎているために、西側に一部認められるテラス状の部分の北側は失われており、併せて底面の北半西側も実際より拡がってしまっている。埋土は上層から順に、厚さ30cm程度の淡灰褐色土層、その下位は厚さ40cm程度の地山に近似する淡黄灰褐色土層で、この層から土器片が多く出土した。更に下位ではグライ化して青灰色となるが、黒灰褐色土の混ざりの少ない上層と多い下層に分けられる。

出土土器（図版57、第96図1～4）

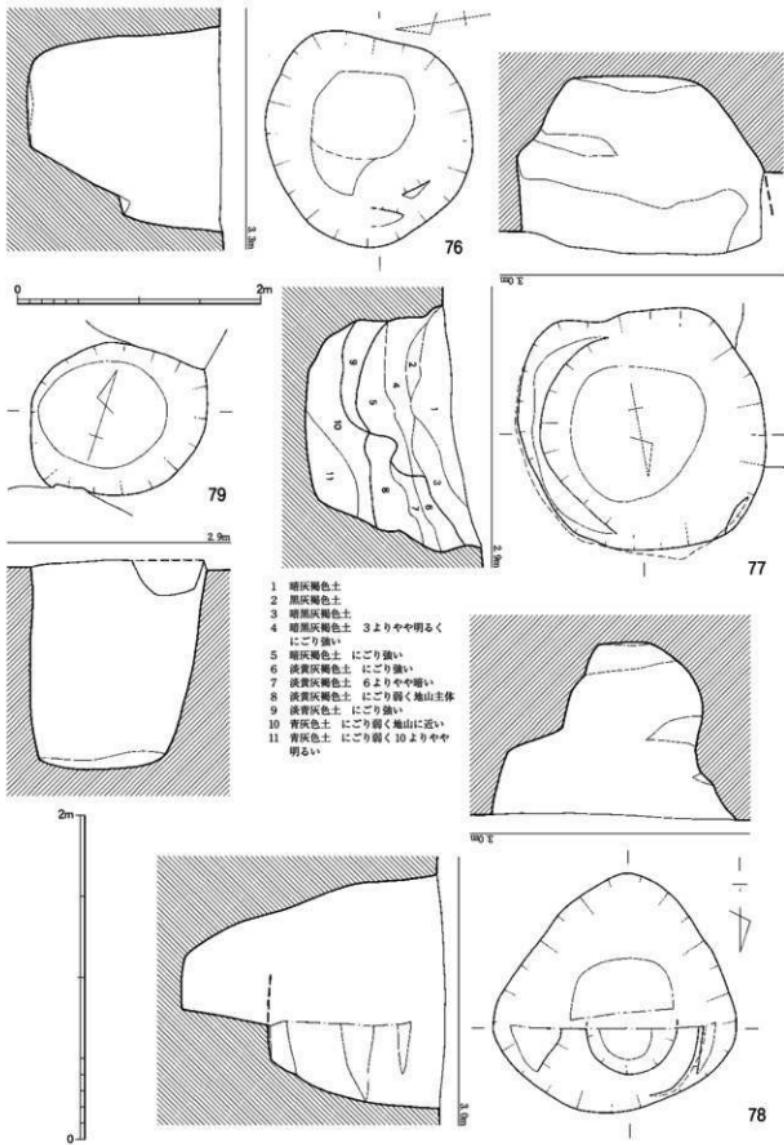
1は在地系複合口縁壺である。調整は内外面ともにハケが見られ、外面にはタタキが残存する。底部はレンズ状となっており、焼成後の穿孔が施される。2は、頸基部が太くほとんど縮まらない直口壺である。胴部は偏球形下半に近い器形である。3はやや小型の在地系壺である。外面上半にはタタキが残存する。また、外面には煤が付着する。4は長胴の在地系壺である。外面上半にはタタキが密に残存する。また、外面には煤が付着する。

77号土坑（図版35、第95図）

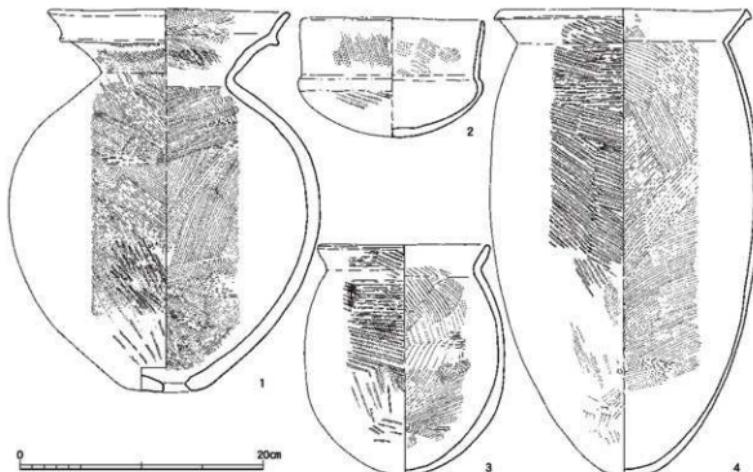
III区南東端付近の斜面上に位置する土坑で、9号掘立柱建物跡に属する柱穴に切られる。平面形は径200cm程度の大型の不整円形で、深さ146cmである。壁の立ち上がりは、上位は急な傾斜で、北側から東側にかけてはオーバーハングする。下位ではやや緩やかな傾斜で、底面はやや狭くなり、東半ではテラス状で特に傾斜の緩くなる部分がある。埋土はレンズ状に堆積し、上層が暗灰褐色土、黒灰褐色土からなり、その下位の北側で地山に近似する淡黄灰褐色土層が認められる。深さ90～100cm程度でグライ化して青灰色となるが、上記の上層と下位層の相違を反映したと考えられる分層が認められる。

出土土器（図版58、第97図1～21）

1は、口縁部がわずかに外反して開く広口壺で、ナデ肩の器形である。2は、口縁部がやや強く外反して開く広口壺で、ナデ肩の器形である。口唇部にはキザミが施され、肩部には2列で刺突文が廻る。3は、口縁部がわずかに外側の上方へ延びる壺である。4は頸基部があまり縮まらず太く、短い口縁部が外反して開く短頸壺である。5は短頸壺で、口縁部がわずかに外側に開く。重心



第95図 III区 76～79号土坑実測図 (79のみ1/30、他は1/40)

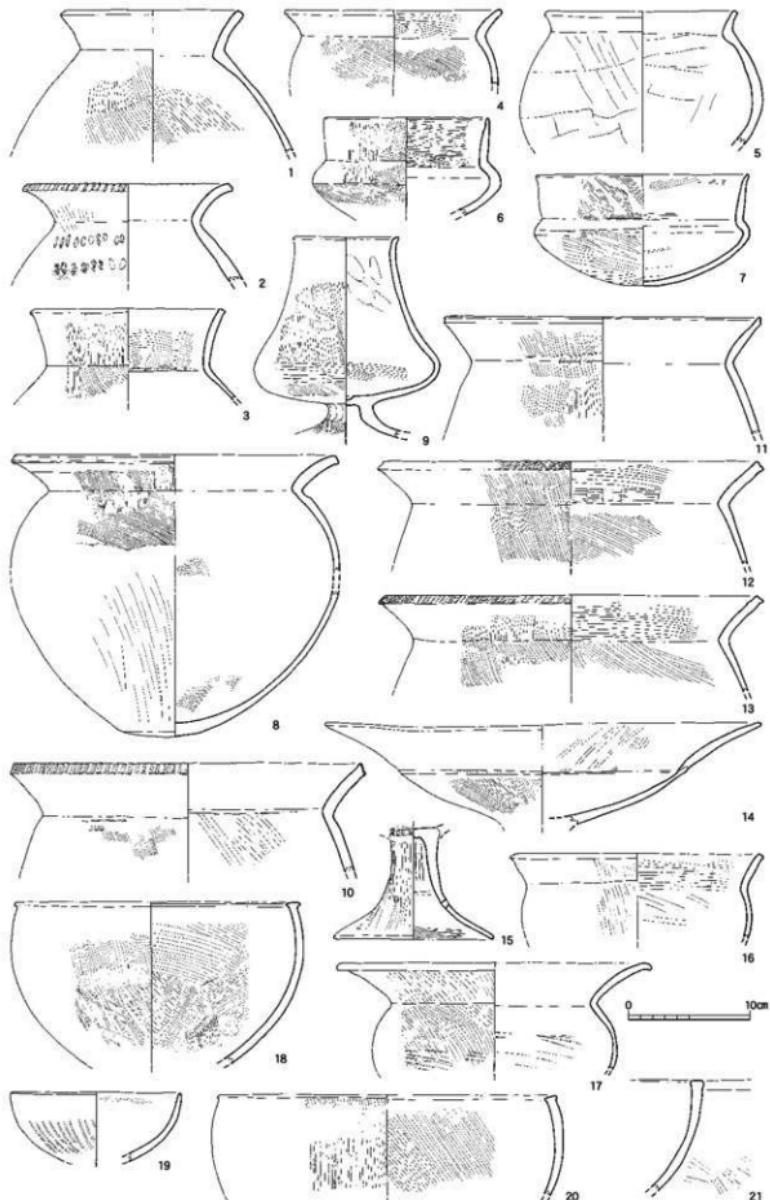


第96図 III区 76号土坑出土土器実測図 (1/4)

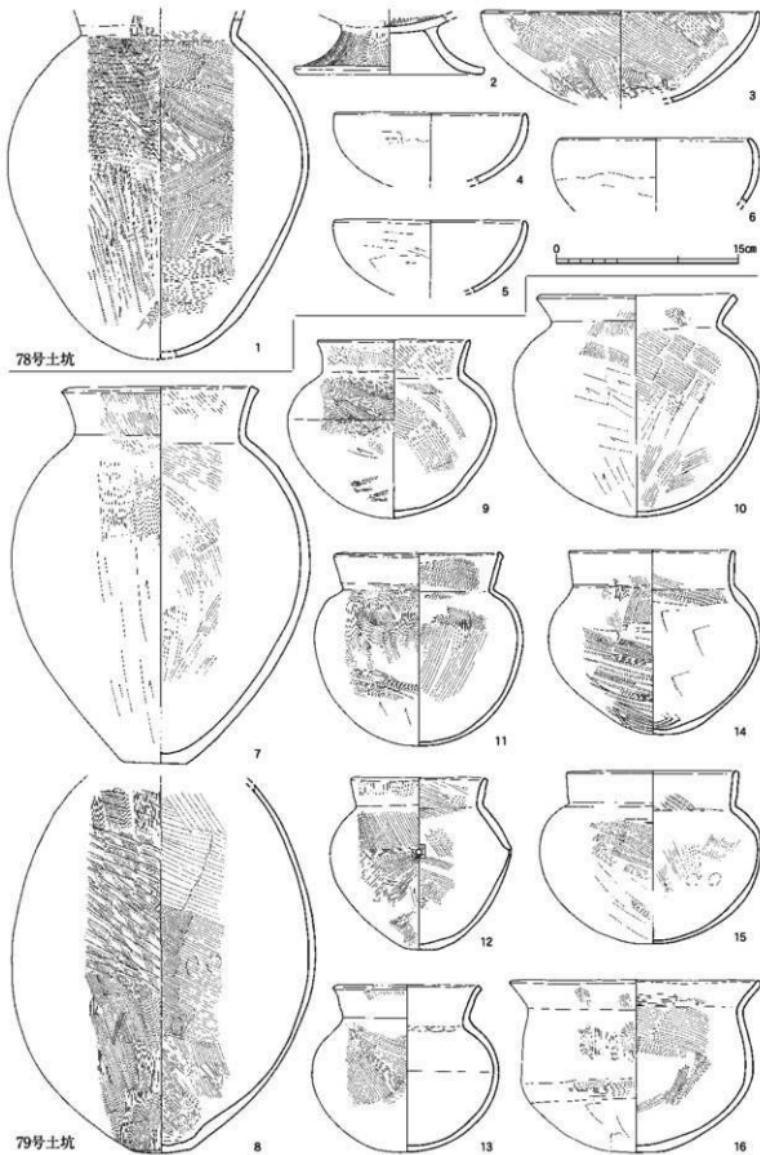
はやや下位にあり、内外面ともに板状工具によるナデの痕跡が見られる。6・7は、頸基部が太くわずかに締まる程度の直口壺で、胴部が扁平で低い器形である。8は、上下半で残存部位が分かれている広口壺である。頸基部はあまり締まらず太く、口縁部は外反して開く。底部はレンズ状である。9は脚部を有する長頸壺である。頸部と胴部の境が明瞭でなく、重心が非常に下位にある下膨れの器形である。外面の最大径の部分にはミガキが施される。10～13はいずれも在地系壺の口縁部から肩部にかけてで、11以外には口唇部にはキザミが施される。14は高杯杯部で、下半は内清気味に立ち上がり、上半は外反気味に開く。15は高杯脚部で、外面には縦位のミガキが施され、穿孔が3箇所に見られる。16は、口縁部がわずかに屈曲して開く鉢である。17は、屈曲する口縁部が外反して大きく開く鉢である。胴部がやや強く張る。18はやや大型の素口縁の鉢である。19は素口縁の鉢で、外面には工具の調整痕と見られる起伏が見られる。20は大型で径の大きい素口縁の鉢で、口縁部付近はわずかに内傾する。21は素口縁の鉢である。

78号土坑（図版35、第95図）

III区南端部の中央より西寄りに位置する土坑である。平面形は径170～200cmの不整円形である。半裁で南半部を先行して掘削した際には、下層中で細かい木質等の含有物が途切れず、壁面および底面の判別が困難なまま深さ218cmまで掘削した。結果的に、埋土としてある程度明瞭に判別できた深さ142cmまでを遺構としての掘形であると判断し、北半はそれに合わせて掘削した。その北半側の壁の立ち上がりは急な部分が多いが、傾斜の変化が大きく、東側で大きなテラス状の部分があり、西側ではオーバーハングする部分がある。埋土は、深さ40cm程度までの最上層は淡黒灰褐色土で、その下位で厚さ20cm程度の地山に近似する淡黄灰褐色土が堆積し、それより下



第97図 III区 77号土坑出土土器実測図 (1/4)



第98図 III区 78・79号土坑出土土器実測図 (1/4)

位ではグライ化して青灰色となる。

出土土器（図版 58、第 98 図 1～6）

1は、頸基部が締まる壺である。外面には、上半でタタキとその後に施すハケが認められ、下半ではそれらを切る粗いハケ状の調整が見られる。2は甕の脚部と考えられる。3～6は素口縁の鉢である。3は口径がやや大きく、内外面にハケが施される。4～6は外面にケズリの痕跡が認められ、6の口縁端部はやや内傾する。

79号土坑（図版 36、第 95 図）

Ⅲ区南東隅付近に位置する土坑で、9号掘立柱建物跡に属する柱穴に切られる。平面形は長軸 107 cm × 短軸 92 cm の楕円形で、深さ 129 cm である。壁の立ち上がりは、全体的に急な傾斜である。内部が狭小で土器がまとめて出土したため、埋土は深さ 75 cm 程度までしか確認できなかったが、地山主体でややにごる淡黄灰褐色土の 1 層である。中位程度の深さからほぼ完形の土器が複数出土した。

出土土器（図版 58、第 98 図 7～16）

7は、口縁部がわずかに開く壺である。底部はやや不安定な平底である。8はやや長胴の壺の肩部より下位である。重心が下位にあり、底部はやや突出気味のレンズ状である。外面上位にはタタキが残存する。9～13は、短い口縁部がわずかに外側に開き、胴部が丸みをもったやや器高の低い壺である。13以外の外下面下位にはケズリの痕跡が見られる。12は、他よりも胴部下位の丸みが少なく、底部は狭く不安定な平底である。胴部の最大径にあたる部位に小さな穿孔が外面より施される。14・15は、太い頸基部から口縁部が直上へのびる直口壺である。14の胴部下位ではケズリの後に粗いハケが施される。16は、重心が低く、屈曲する口縁部が開く鉢である。

80号土坑（図版 36、第 99 図）

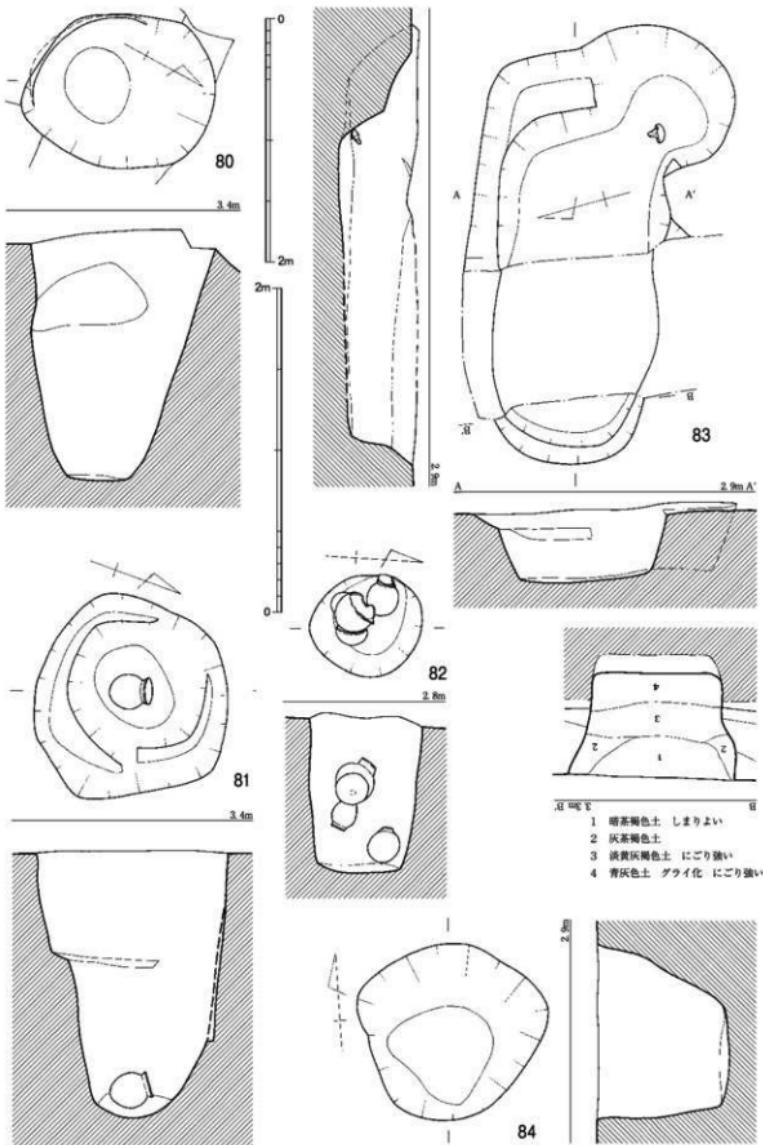
Ⅲ区南西隅付近に位置する土坑である。平面形は長軸 118 cm × 短軸 93 cm の不整楕円形で、深さ 155 cm である。壁の立ち上がりは、東側でやや緩やかな傾斜であるが、西側は急な傾斜でオーバーハングする部分も認められる。埋土は上層で厚さ 25 cm 程度の淡黒灰褐色土層である。その下位で淡黒灰褐色土がまだらに混じる地山の主体の淡黄灰褐色土層となり、深さ 65 cm 程度より下位はグライ化して青灰色となるが基本的に同一の埋土と思われる。

出土土器（第 100 図 1・2）

1は甕の頸基部より下位で、外面にはタタキの後にハケを施し、内面にはハケ調整が残存する。五様式系と考えられる。2は在地系甕の下位部分で、平底である。外面にはタタキの後にハケが施され、内面にはケズリが施される。外面には煤が付着する。

81号土坑（図版 37、第 99 図）

Ⅲ区中央部付近よりやや西寄りに位置し、北半を中心に広がる包含層を切る状態で検出された土坑である。平面形は径 120 cm の不整楕円形で、深さ 164 cm である。壁の立ち上がりは、全体的に急な傾斜であるが、南側で深さ 60～70 cm の位置でテラス状の部分が見られ、一方北側で見られるテラス状の部分は掘り過ぎによって生じたものと考えられる。埋土はレンズ状に堆積し、深



第 99 図 III区 80～84号土坑実測図 (83のみ1/40、他は1/30)

さ25cm程度まで暗茶褐色土層や黒灰褐色土層からなり、その下位で厚さ30cm程度の地山に近似する淡黄灰褐色土層で、更に下位ではグライ化して青灰色となる。ほぼ底面付近よりほぼ完形の土器が1点出土した。

出土土器（図版59、第100図3・4）

3は、頸基部がやや強く縮まり、口縁部がわずかに開く壺である。内面にはケズリが施される。

4は布留系壺で、調整は外面でハケ、内面でケズリが見られる。

82号土坑（図版37、第99図）

Ⅲ区南側中央部付近より南寄りに位置し、1号溝と切り合う形で検出された土坑である。1号溝の掘削後に、その底面から検出されたものであるが、先後関係は土層での確認ができなかったため明瞭ではない。ただ、その付近の掘削時の状況から本遺構は1号溝に切られる可能性が高いと考えられる。埋土は地山に近似する淡黄灰褐色土がややにごるものである。下位から複数の完形に近い土器が出土した。

出土土器（図版59、第100図5～11）

5・7・9については、本遺構と1号溝が切り合う中で、どちらの帰属になるか明瞭ではない出土状況であったため、1号溝に伴う出土土器の可能性もある。

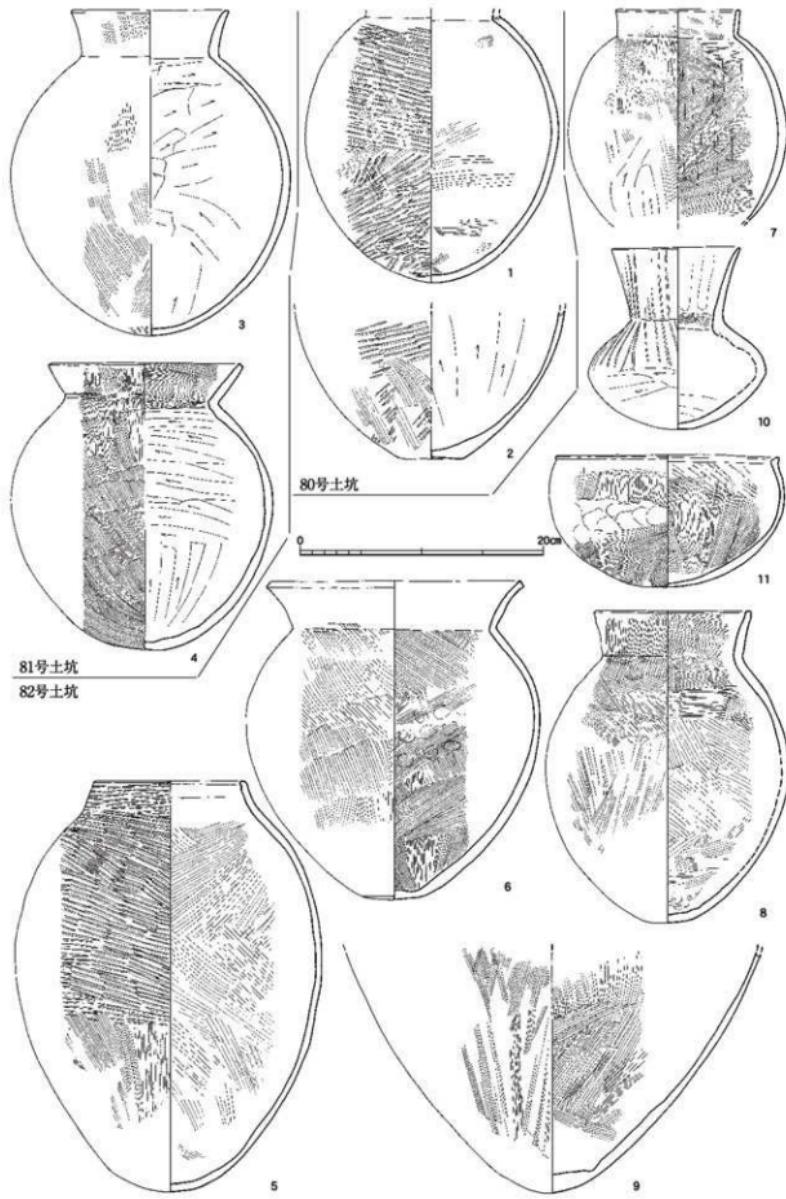
5は長胴の短頸壺で、頸基部の屈曲は緩やかで、口縁部は内傾して立ち上がる。6は、頸基部が太いとともに、口縁部が外反して開く広口壺である。胴部の張りがやや強く、底部はレンズ状である。7は直口壺で、短い口縁部が頸基部から直上に延びる。8は、口縁部がわずかに開く壺である。外面下半の粗いハケが上半のハケを切る調整の先後関係が認められる。9は大型の壺の下位部分である。外面のハケ調整は、内面よりも粗いものである。底部はやや厚くなっている。10は長頸壺で、胴部は偏球形に近く、強く縮まる頸基部から口縁部が外反気味に延びる。口縁部から胴部上半にかけて、暗文が施される。11は素口縁の鉢で、口縁端部はわずかに肥厚するとともに、やや内傾する。

83号土坑（図版38、第99図）

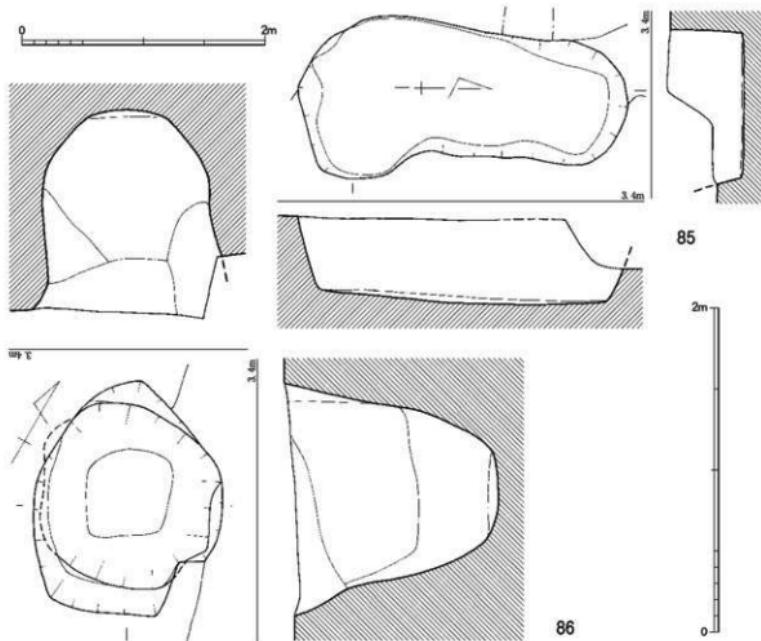
Ⅲ区中央付近よりやや東寄りで、北半を中心広がる包含層中に位置する土坑である。当初調査面で検出できず、包含層の下部を確認するために掘削したトレンチの壁面で遺構の断面が確認された。土層から包含層を切ると判断したが、明瞭に分層ができたわけではないため、その先後関係にはやや不安がある。また、断面の確認後に調査面で再度平面の検出を試みたが、判然としなかったため、包含層をある程度下部へ掘削してから平面形を把握した。平面形は長軸362cm×短軸210cmの南東部が外へ広がる不整形で、深さ66cmである。トレンチ部分は、底面よりも深く掘削しており、完全に欠失する。壁の立ち上がりは、上位で緩やかで、傾斜が変化して下位でやや急となる部分が多い。埋土は深さ30cm程度までの上層は暗茶褐色土、灰茶褐色土からなり、その下位は厚さ25cm程度の地山に近似するがにごりの強い淡黄灰褐色土層で、より下位ではグライ化して青灰色となる。南東部の底面付近で木器が出土した。

出土土器（図版59、第102図1）

1は小型の短頸壺で、頸基部はほとんど縮まらず、口縁部は内傾して立ち上がる。



第100図 III区 80~82号土坑出土土器実測図 (1/4)



第101図 III区 85・86号土坑実測図 (85は1/40、86は1/30)

84号土坑 (図版38、第99図)

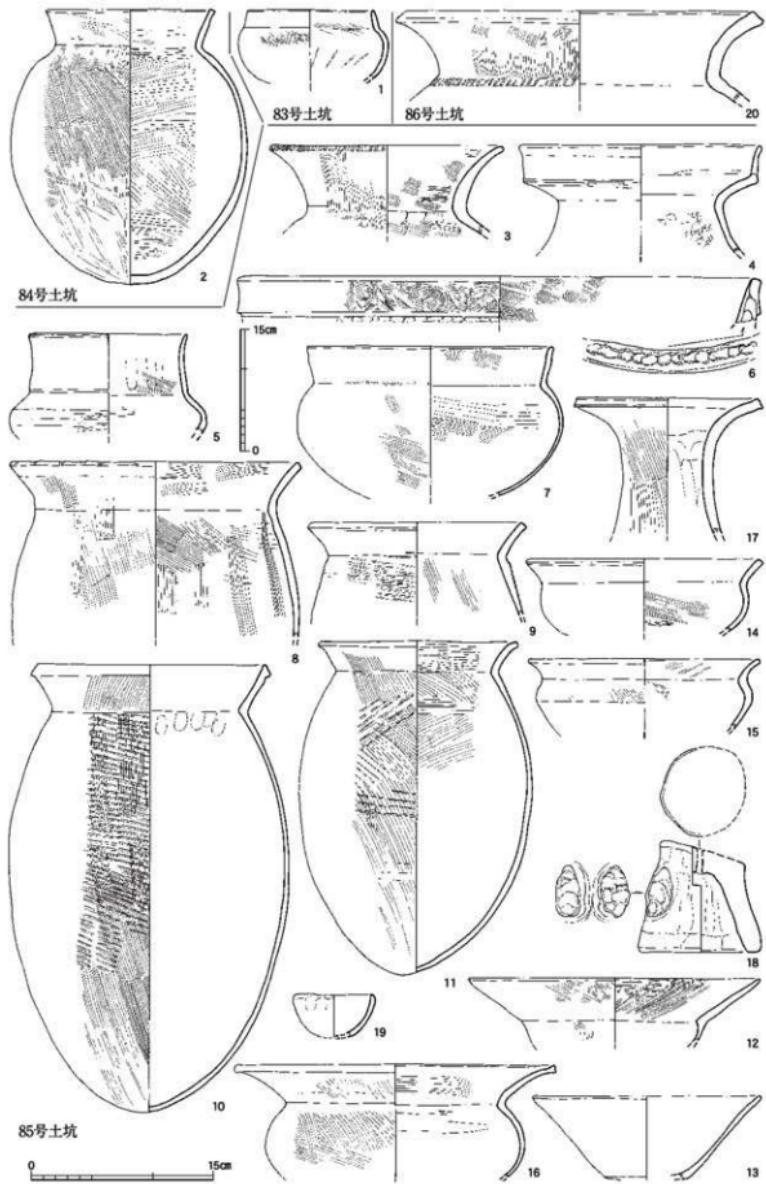
III区中央付近よりやや西寄りに位置し、北半を中心広がる包含層中に位置する土坑である。当初調査面で検出されておらず、掘立柱建物跡の確認を検出するために下部へ掘り下げる際に確認した遺構である。しかし、埋土は、地山に近似する淡黄灰褐色土がにごったもので、周辺の包含層とも差異が小さいため、本遺構と包含層との先後関係は明瞭ではない。平面形は、径110~115cm程度の不整円形で、深さ80cmである。壁の立ち上がりは、北半でやや緩やかで、南半で急な傾斜である。

出土土器 (図版59、第102図2)

2は、口縁部が直線的に延びつつわずかに開く壺である。

85号土坑 (図版39、第101図)

III区中央付近より西寄りで、1号溝と近接した位置の土坑である。1号溝と調査区北半を中心広がる包含層とが接する付近で、検出とその状況判断がややし難い点があり、当初個別の土坑ではなく、1号溝の西側に広がった一部として判断していた。底面付近の掘削の段階で、1号溝自体とは異なる掘り込みがあり、また1号溝は近接するベルト土層の観察から、そこまで西側に広が



第102図 III区 83~86号土坑出土土器実測図 (6のみ1/6、他は1/4)

らない可能性が高いと判断した。更に、その周辺だけに残存状態の良好な土器が集中して出土したため、個別の土坑が存在すると判断した。平面形は長軸 280 cm × 短軸 133 cm で、深さ 70 cm である。上記のような経緯で掘削したため、壁面は多くの部分で失われてしまったが、残存する西側壁の傾斜は急である。ほぼ完形のものを含め複数の土器が出土した。1号溝と切り合っていたと考えられるが、先後関係は不明である。

出土土器（図版 59、第 102 図 3～19）

3 は、頸基部がやや強くくびれ、口縁部が外反して開く広口壺である。口唇部にはキザミが施される。4 は山陰系二重口縁壺の口縁部から肩部にかけてである。5 は直口壺で、頸部があまり縮まらず太く、そこから頸部は内傾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外傾する。胴部の最大系の部分にはミガキが施され、わずかに面をなす。6 は非常に大型の二重口縁壺の口縁上部と考えられる。外面にはハケ原体によると見られる円弧状の文様が連続して施される。下端は接合部で外れた面で、粘土粒の連続した配置が見られ、接合を補強するための方法であると考えられる。7 は頸基部が太い直口壺で、胴部は偏球形に近い。8～11 は在地系壺である。8 の口唇部にはキザミが施され、内外面ともにハケ調整が施される。10・11 は長胴の壺で、外面上位にはタタキが見られる。11 の底部付近は、被熱のため赤変している。12 は高杯部で、口縁部は屈曲して直線的に開く。内面には暗文が施される。13 は畿内系高杯の杯部である。器表は劣化が目立ち、被熱の影響と見られる。14・15 は、口縁部が屈曲して開く鉢である。16 は、胴部が張る鉢で、強く屈曲して開く口縁部は外反する。内面にはケズリが施され、器壁は薄い。17 は器台で、受部が外反して開く。18 は支脚で、受部は傾斜しており、中央部に穿孔が施される。受部の高い側の側部につまみ状の突起が作られる。19 は、手づくねによる鉢状の小型の土器である。

86 号土坑（図版 39、第 101 図）

Ⅲ区中央付近でやや西寄りに位置し、1号溝に切られる土坑である。平面形は長軸 142 cm × 短軸 126 cm の不整椭円形で、深さ 130 cm である。壁の立ち上がりは、全体的に急な傾斜で、オーバーハングする部分も見られる。

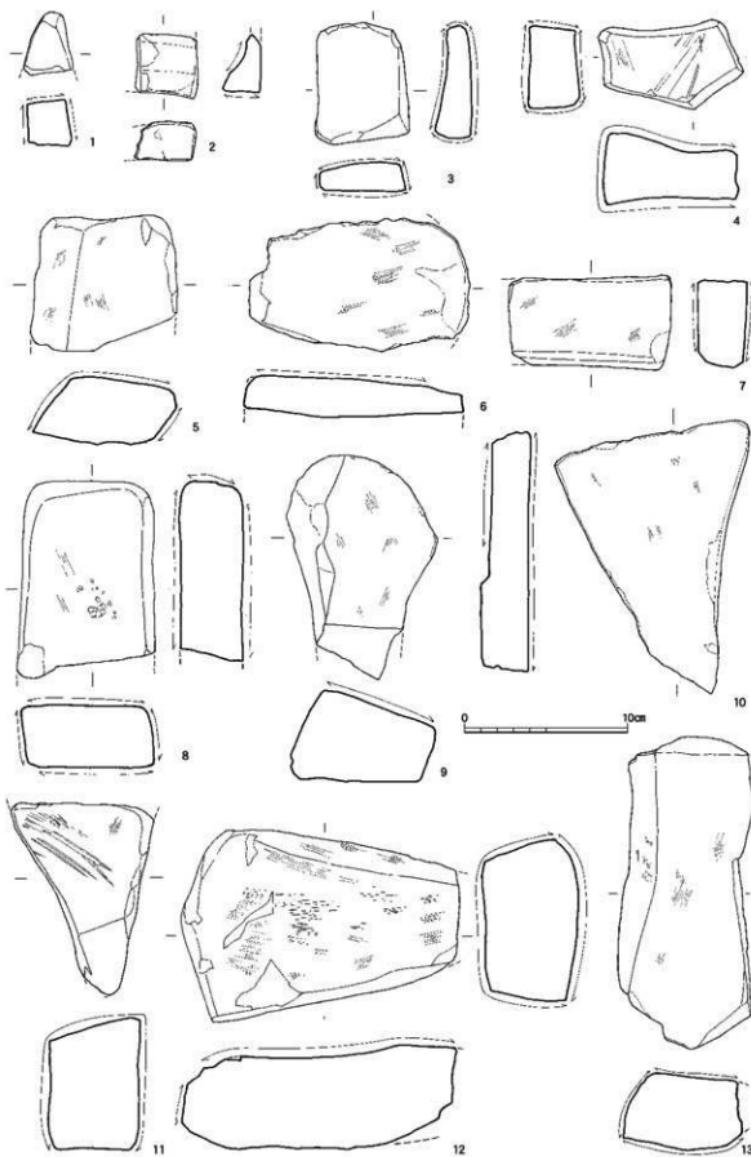
出土土器（第 102 図 20）

20 は、頸基部が太く、口縁部が外反して開くやや大型の広口壺である。頸基部外面は、突帯状にわずかに隆起しており、そこにキザミが施される。

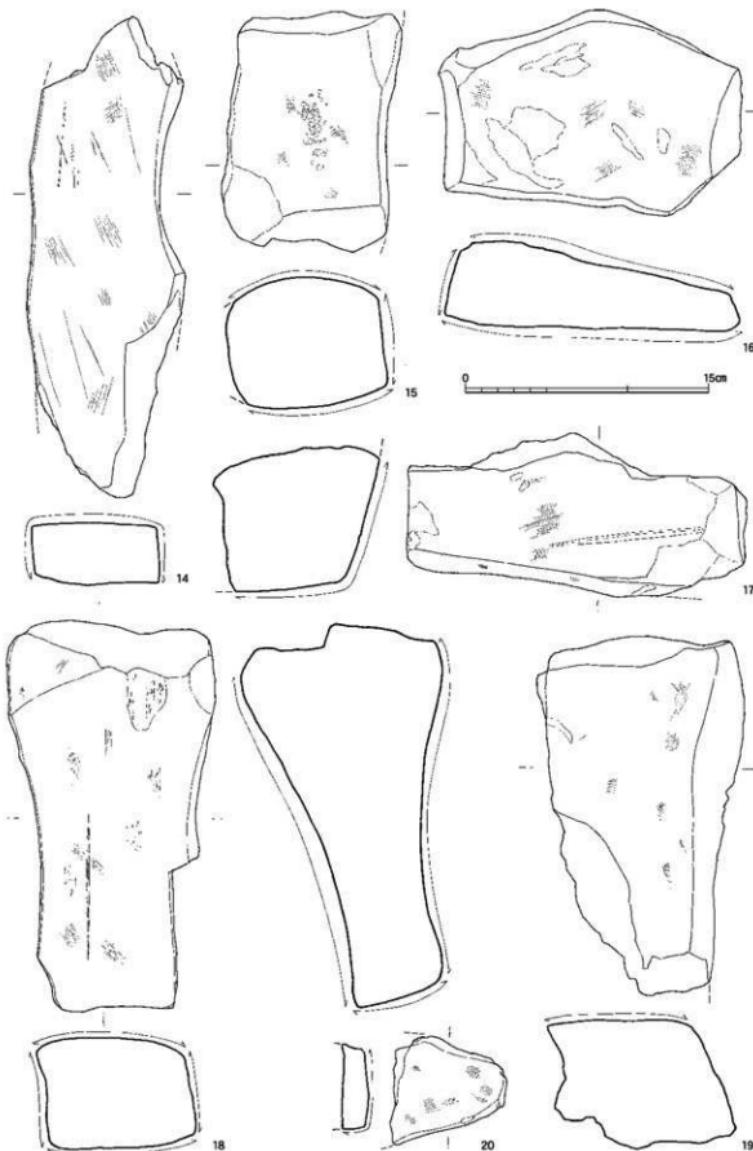
（4）Ⅲ区出土石器（図版 60・61、第 103～109 図 1～65）

Ⅲ区出土の石器を以下にまとめる。出土地点、法量や石材は表 4 を参照されたい。

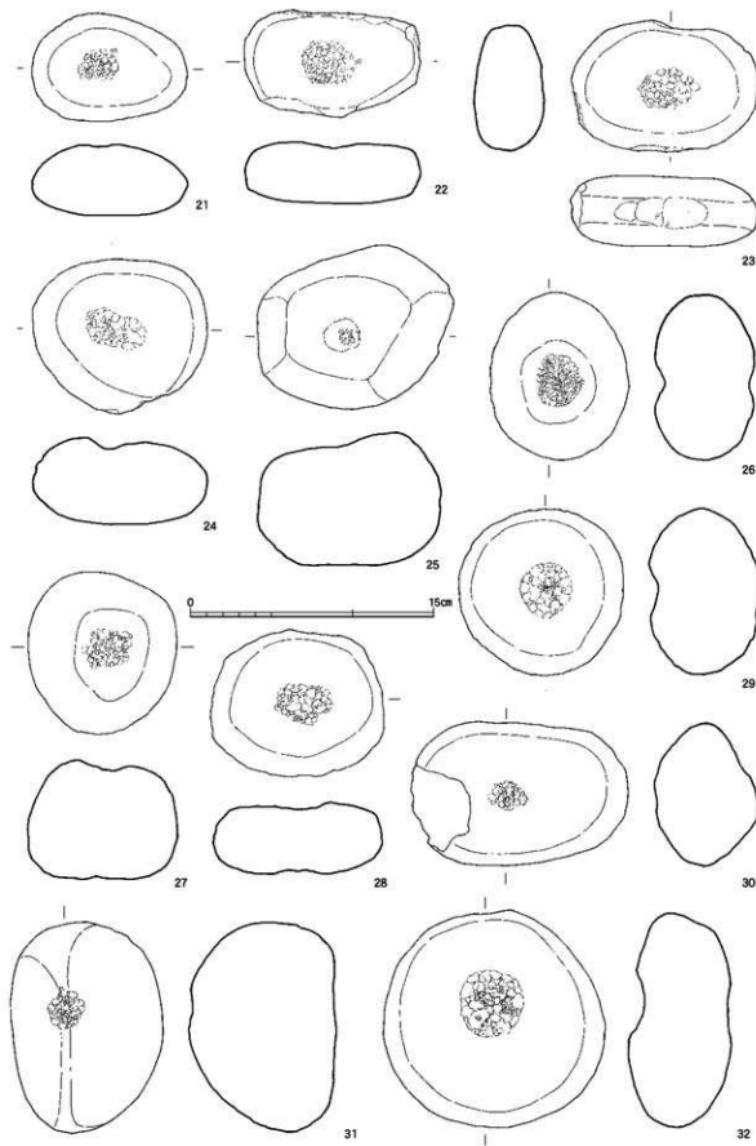
1～20 は砥石である。1 は砥面が 3 面残存し、表面は風化により白色化する。2 の砥面は 3 面残存し平滑であるが、平坦ではなく起伏がある。3 の全ての面が砥面として使用されており、特に表裏面と長軸側面の使用が著しく非常に平滑である。4 の側面の内の 1 面以外は全て砥面として使用され、表面にはやや粗い擦痕により小さな凹凸がやや目立つが、他の砥面は平滑である。5 の表面と 1 側面の使用が顕著で平滑である。6 の砥面は 1 面のみ残存するが、さほど長期間使用されなかつたためか平滑ではあるが細かな起伏が多い。7 の砥面は 3 面残存するが、さほど平滑ではない。8 の表裏面と長軸側面が使用され、非常に平滑である。9 の表面の使用が顕著なため平滑で、側面



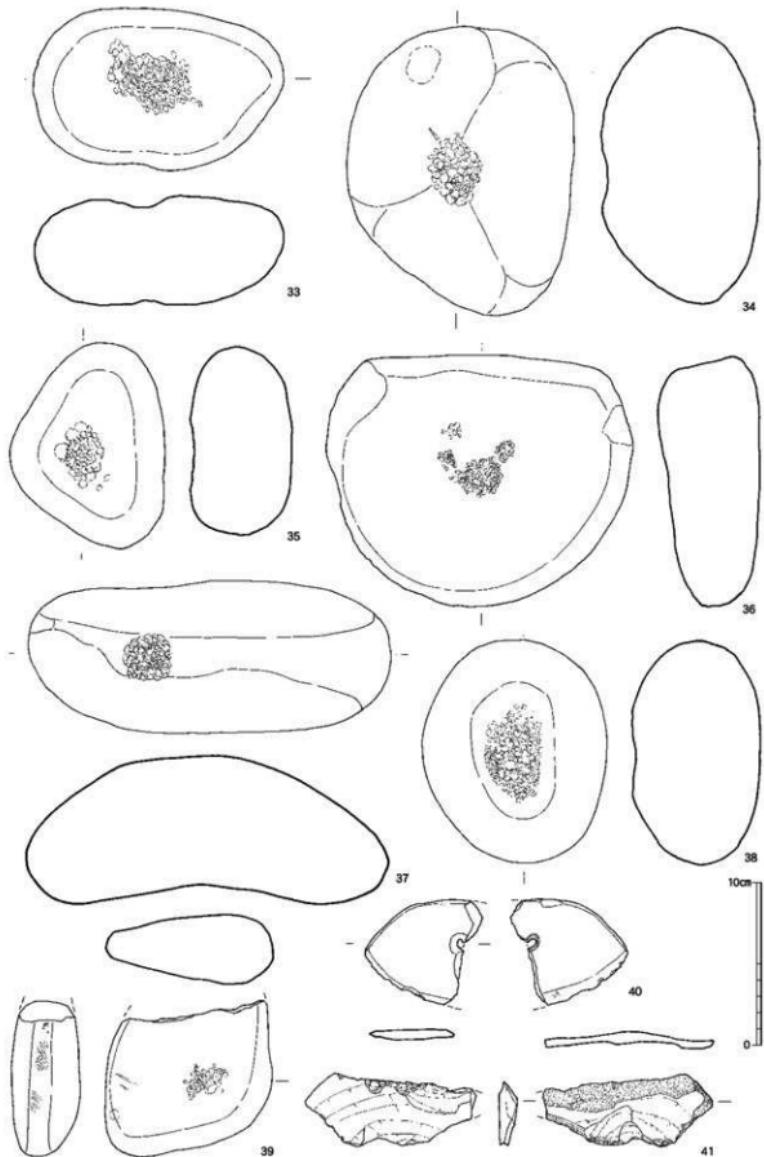
第103図 III区出土石器実測図① (1/3)



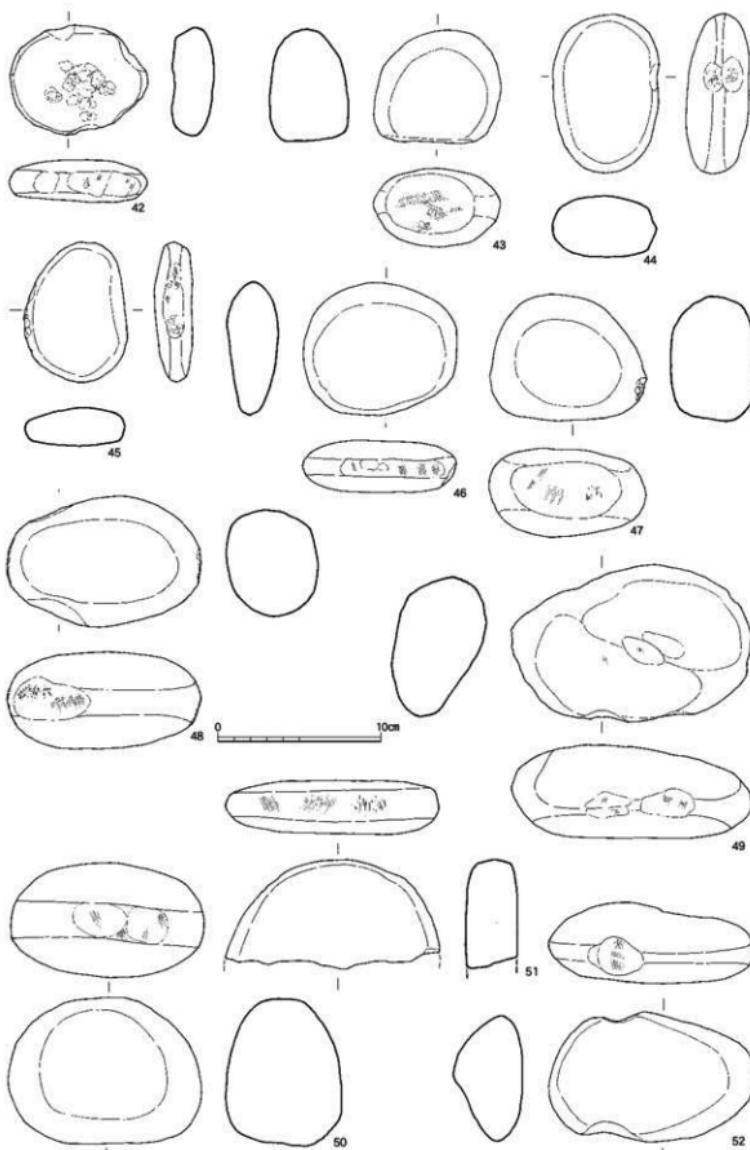
第104図 Ⅲ区出土石器実測図② (1/3)



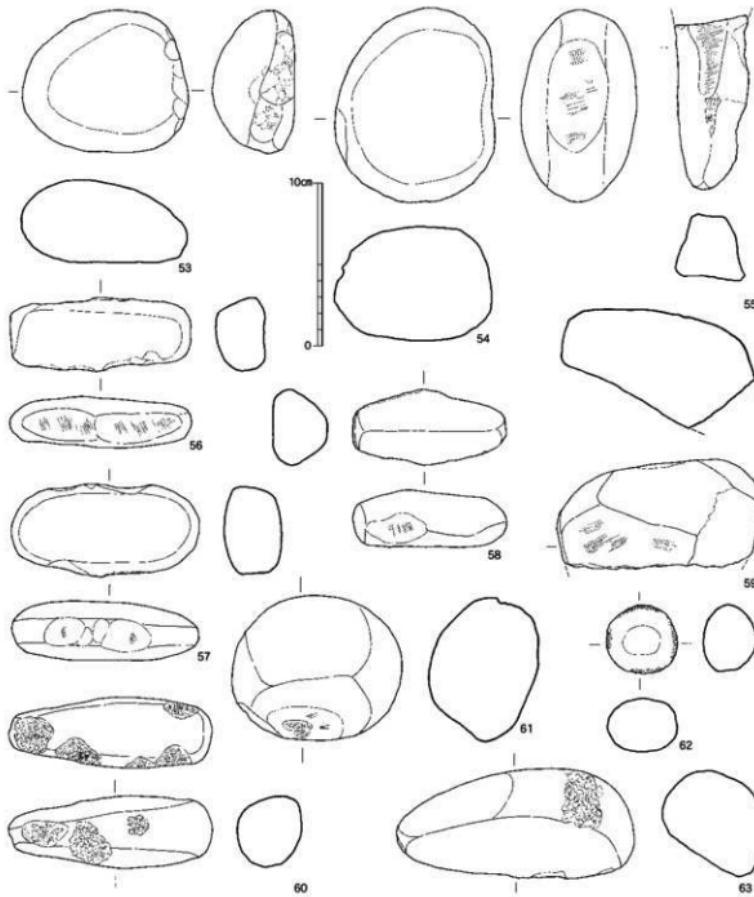
第105図 III区出土石器実測図③ (1/3)



第106図 III区出土石器実測図④(1/3)

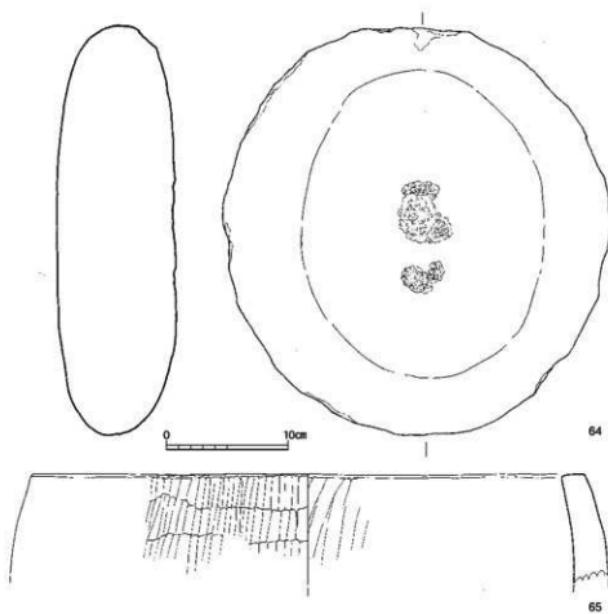


第107図 III区出土石器実測図⑤(1/3)



第108図 Ⅲ区出土石器実測図⑥(1/3)

や裏面にも一部わずかに使用されたと見られる部分がある。10の表裏面と側面の広い範囲が使用され、非常に平滑である。裏面は筋理面で割れて生じた段差の上下面ともに使用される。11の砥面は3面残存し、非常に平滑であるが表面にはやや粗い擦痕が残る部分がある。12は細かく分割して出土したものを探合したものである。裏面の使用はわずかであるが、残る欠損面以外の使用は著しく、非常に平滑であり、細かい擦痕が非常に目立つ。13の2面の砥面は平滑である。14の砥面は4面残存し、表面と長軸方向の両側面に一部は非常によく使用され平滑であり、特に片側の側面は弧状を呈する程著しく使用されている。裏面は部分的に研磨の痕跡が残存する程



第109図 Ⅲ区出土石器実測図⑦(1/4)

度である。15の砥面は表裏面と片側面の3面残存し、側面は弧状を呈するほどよく使用される。欠損面で被熱した痕跡が見られる部分がある。16の表裏面は平滑ながら起伏が目立ち、研磨にやや不向きとも考えられるが、一部の欠損面を除きほぼ全体的に使用される。17の砥面は4面残存し、表面、短軸側の両側面、長軸側の片側面が使用される。表面には浅い溝状の窪みが1条見られる。18は良好に残存しており、表裏面と長軸側の両側面が弧状になるほど使用され、特に表面は光沢を帯びるほど顕著に平滑である。砥面が3面残存し、表面は非常に平滑で、裏面と1側面の使用は部分的である。表面は風化により白色化する。19の残存する砥面は一面のみ。20は大きく欠損し、砥面は非常に平滑で表面以外に側面にも一部砥面が残存する。

21～39は凹石で、他の使用法が併用されているものも含む。21は片面のみ使用される。22は広い範囲で使用され、側縁が広い範囲で叩石としても用いられる。被熱のためか広く黒色化する。23は片面のみ使用され、側縁が部分的に叩石・磨石として使用される。24は片面のみ使用され、窪みはやや大きい。25は一部わずかに窪むが、使用の痕跡が明瞭ではなく、砾元来の形状である可能性もある。26の両面が使用され、表面は大きく窪む。側縁の一部が磨石・叩石として使用される。27は片面のみ使用される。28は両面使用され、側縁が叩石や磨石としてほぼ全局的に使用される。29は片面のみ使用され、大きく窪む。30はわずかに窪む程度に使用され、側縁は叩石や磨石として使用される部分がある。31は幅の狭い稜線部分の1箇所のみが使用される。32の両面が

使用され、表面については窪みが大きく、内部は摩擦の生じる使用がされているため、細かな起伏も非常にわずかである。33の両面が使用され、表面の窪みは大きい。34は片面の張り出した中央部のみ使用され、やや大きく窪む。35は片面のみやや窪む程度でわずかに使用される。36は片面のみわずかに使用され、半円形の弧状および角の部分が叩石として顕著に使用される。37は稜線上の最も張り出した部分の1箇所のみ使用され、摩擦を伴う使用のためか窪みの内部は起伏が少ない。38は片面のみ使用され、その痕跡の範囲はやや広い。39は欠損しており、片面のみわずかに使用される。一辺の側縁が磨石として顕著に使用される。

40は石軸底である。大きく欠損しており、1/3程度が残存するのみである。未成品であるためか、もしくは風化の結果によるためか器表は明瞭な研磨面は認められず、起伏が目立つ。片側には刃部の形成が認められる。

41は安山岩の剥片である。明瞭な調整剥離・使用痕は認められないが、風化による変色の度合いで異なる剥離が一部に集中しており、何らかの使用の痕跡の可能性もある。調査時の欠損である場合も考慮すべきだが、そうでなければ長期間埋没していたものを採集し使用されたこととなる。片面には原礫面がある程度残存する。全調査区中で、唯一取り上げられた安山岩素材の遺物である。

42～61は磨石である。42は側縁を全体的に使用されているが、部位によって使用の強弱あるため、不整な形状である。片面の凹凸がやや激しい部分があり、叩石としても使用された可能性がある。43の使用痕はあまり明瞭ではないが、側縁で一部やや不自然に面となった部分が使用されたと考えられる。44は側縁の一部で集中的に使用され、その使用部位は強い稜が通り2つに分割される。45は長軸方向の両側縁の中央部で集中的に使用される。46は長軸方向の片側縁で使用される。47は1側面で使用された可能性があるが、痕跡は明瞭ではない。側面境界の張り出し部分が叩石として使用される。48は長軸方向の両端部で叩石として使用され、その片側に接する両側縁が磨石として使用される。やや風化気味である。49は側縁の近接2箇所で使用され、その片側は強い稜によって上下に分割される。また、側縁の3箇所で叩石として使用される。50は側縁の近接する2箇所で使用される。51は大きく欠損するが、残存する側縁は全体的に使用される。52は長軸方向の両側縁のやや片側へ偏った対称の位置で使用される。片側の使用部位は、強い稜により上下に分割される。53の側縁は一定の範囲で集中して使用され、同じ部位が叩石としても使用されたと考えられる。54は長軸方向の両側縁で使用され、長軸方向の両側端が叩石として使用された可能性がある。55は欠損しており、稜線部分や一部の面が使用され、長軸端部に近い稜線上の一部が叩石として使用される。56は長軸方向の両側縁で使用され、ともに中央よりも両端部側にずれた2ヶ所ずつに分割して使用の中心部が認められる。中央付近は使用頻度が少ないため、そこがやや張り出した形状となる。57は長軸方向の両側縁で使用され、ともに中央よりも両端部側にずれた2ヶ所ずつに分割して使用の中心部が認められる。中央付近は使用頻度が少ないため、そこがやや張り出した形状となる。58は軸方向の両側縁で使用され、ともに中央よりも両端部側にずれた2ヶ所ずつに分割して使用の中心部が認められる。中央付近は使用頻度が少ないため、そこがやや張り出した形状となる。59は裏面、長軸方向の側縁・端部と複数部位で使用され、端部が最も顕著に使用される。60は長軸方向の両端部付近の2ヶ所で対に使用される他、複数の使用部位が認められる。

61～64は叩石である。61は部分により使用頻度の多寡があるが、側縁の半分程度が使用される。62は側縁ではなく全周的に使用される。63は短軸方向で1ヶ所のみ突出する端部が使用され、また、長軸方向の1側縁が集中的に磨石として使用される。64は大型の叩石で、側縁が全周的に使用される。表面の中央部付近にやや目立つ凹凸があり、明瞭ではないが凹石としても使用された可能性がある。

65は滑石製石鍋で、大きく欠損して一部のみが出土したものであるが、口縁部が残存している。復元口径は45.4cmと、非常に大型に復原される。高さは9.0cm残存しており、外面のケズリによるやや粗い調整痕は、残存部の上下で3分割される。内面は粗いケズリの痕跡が残る部分もあるが、丁寧に研磨され平滑となっている。外面から口唇部にかけて煤が付着する。把手や鍔は残存していない。

3 IV区の検出遺構と遺物

(1) IV区の概要(第110図)

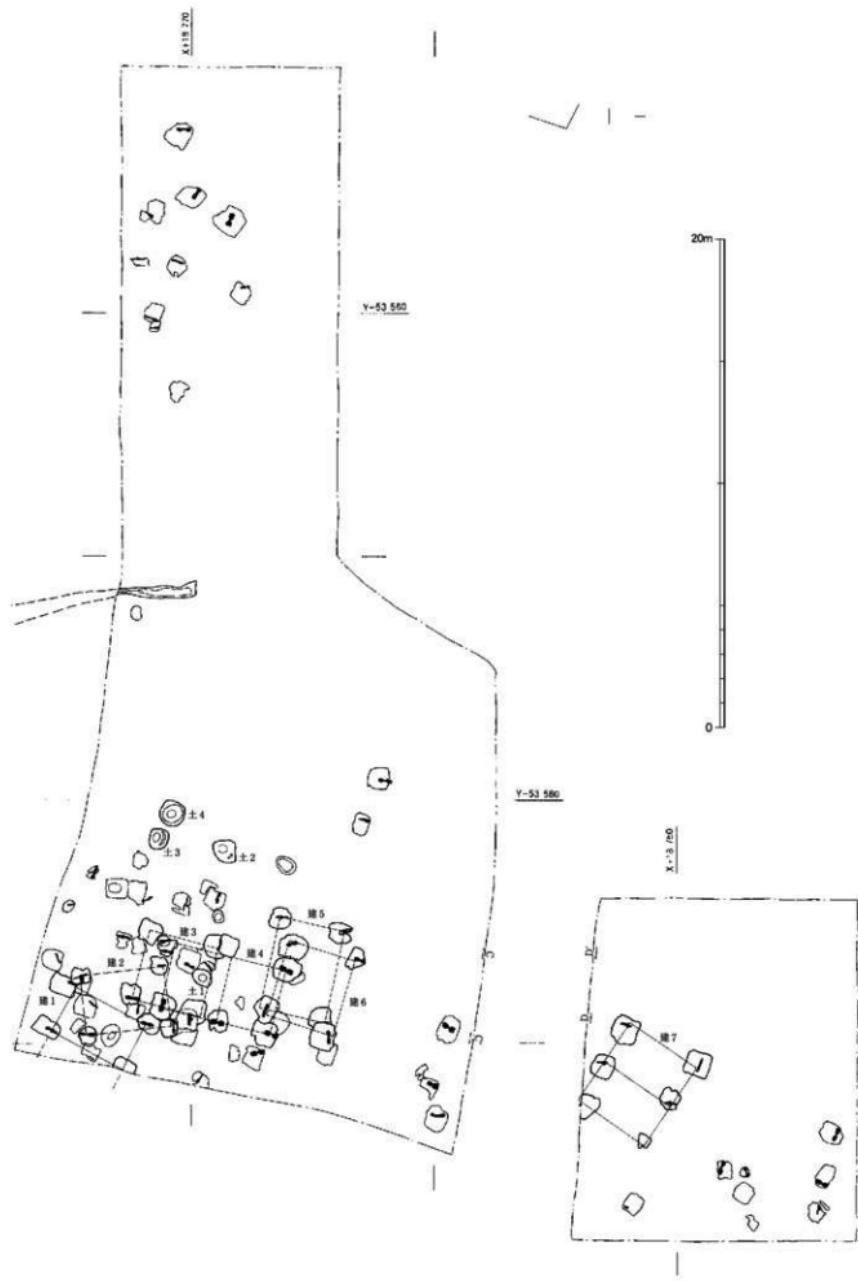
IIIb区より南側は、試掘調査の結果から当初本調査対象外であったが、IIIb区の調査段階で遺構の広がりが連続することが確実となったため平成19年度の第3次調査地点となった。

上層に広く厚く堆積するバラス状の客土に含まれている水が、掘削箇所に大量に流入し、またその堆積土の影響からか、遺構面はグライ化していた。更に宅地として地盤強化のための木杭も複数打ち込まれており、調査を実施するには悪条件が重なっている地点であった。そのため、通常の作業工程で行う遺構面の確認と検出作業を諦め、当初から水をポンプアップしながらバックホーで掘り下げて遺構・礎盤を確認した。その後、埋め戻しと隣接範囲の掘削を繰り返していくという工程をとったため、全景写真等の撮影はできなかった。北側から南側へ礎盤の検出される範囲を追いかけていく形で徐々に調査範囲を広げていった結果、西側では東側以上に遺構の広がりが認められた。なお、その西側部分では電柱とその固定用ワイヤーのアンカーがあったため、掘削範囲が一部途切れている。

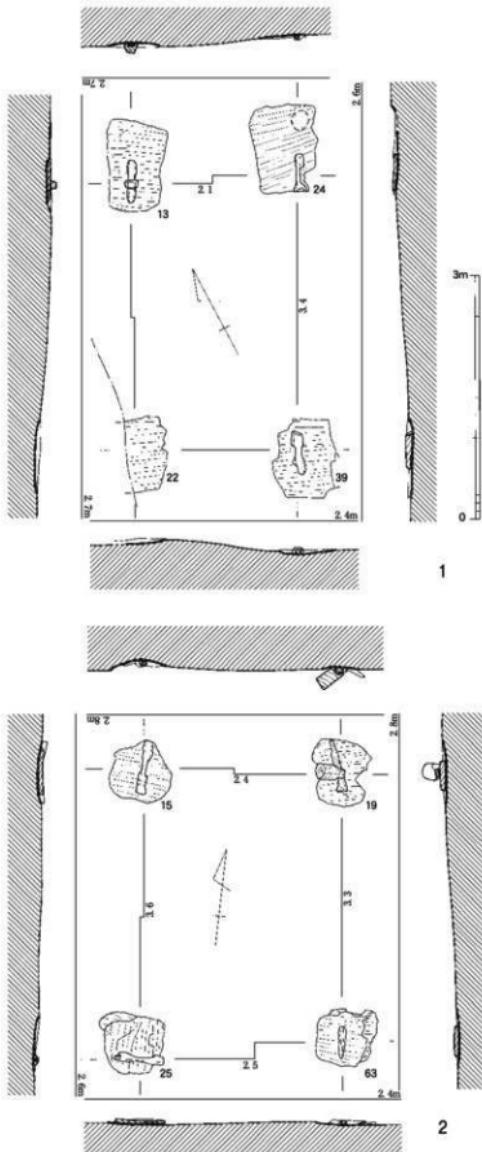
調査区として掘削した範囲は約700m²である。検出した遺構は約80基程度の礎盤から7棟の掘立柱建物跡の組み合わせを抽出し、土坑は4基検出した。また、IIIb区を南北に継続する1号溝から連続し、その南端部にあたると考えられる溝を確認した。調査区壁の土層から礎盤の分布する周辺の遺構面は標高2.7m前後と判断でき、溝の周辺ではその土層から標高2.2m程度まで落ち込むと見られる。出土遺物は弥生土器、土師器がパンケース4箱分で、砥石や石鍋の石製品も含まれる。その他には、土坑の1基から瓢箪の破片と木製横櫛が出土した。

(2) 掘立柱建物跡

IV区の掘立柱建物跡は、検出した約80基程度の礎盤の相対的な位置関係から7棟分の組み合わせを把握した。IV区は検出に悪条件が多く、バックホーで掘削しながら礎盤の分布を確認したため、柱穴の掘形を確認できたものはない。礎盤はIII区から南側に連続して分布していると考えられるが、調査区の東西に分かれて検出され、中央部は空閑地となっている。東側では礎盤の南方への広がりはすぐに途切れで検出数も少なく、建物跡の組み合わせを確認することはできなかった。一方西側では、礎盤は東側よりも検出数が多く、またある程度集中した分布を見せており、南



第110図 IV区遺構配置図 (1/200)



第111図 IV区1・2号掘立柱建物跡実測図(1/60)

方向への広がりもより大きい。建物の規模は 1×1 間もしくは 2×1 間である。

なお、以下で表示する梁行・桁行の数値はそれぞれの建物で確認可能な柱間の平均値とする。

1号掘立柱建物跡 (第111図)

IV区北西隅に位置する建物で、礎盤13・22・24・39からなる。検出されている範囲では 1×1 間の規模であるが、調査区隅にあって桁・梁の柱間の差が大きいため、西の調査区外に延長して桁行が2間以上の規模になる可能性が高い。3基の礎盤から検出された横木の埋置軸が共通するため、上記の礎盤の組み合わせによるこの建物の確実性は高い。 1×1 間の規模とした場合は、梁行2.1m、桁行3.4mを測り、床面積は7.1m²程度となる。2・4号建物跡に切られる。礎盤13ではわずかに柱根が残存する。柱穴の掘形は検出されなかったが、残存する礎盤の形状から隅丸方形に近い平面形と考えられる。礎盤間で南東方向へ低くなる傾向がある。図示できる土器は出土していない。

2号掘立柱建物跡 (第111図)

IV区北西隅に位置し、 1×1 間の建物である。礎盤15・19・25・63からなり、横木の形状は礎盤63がやや異なるものの他は類似しており、埋置軸も桁・梁方向と概ね共通するため、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高

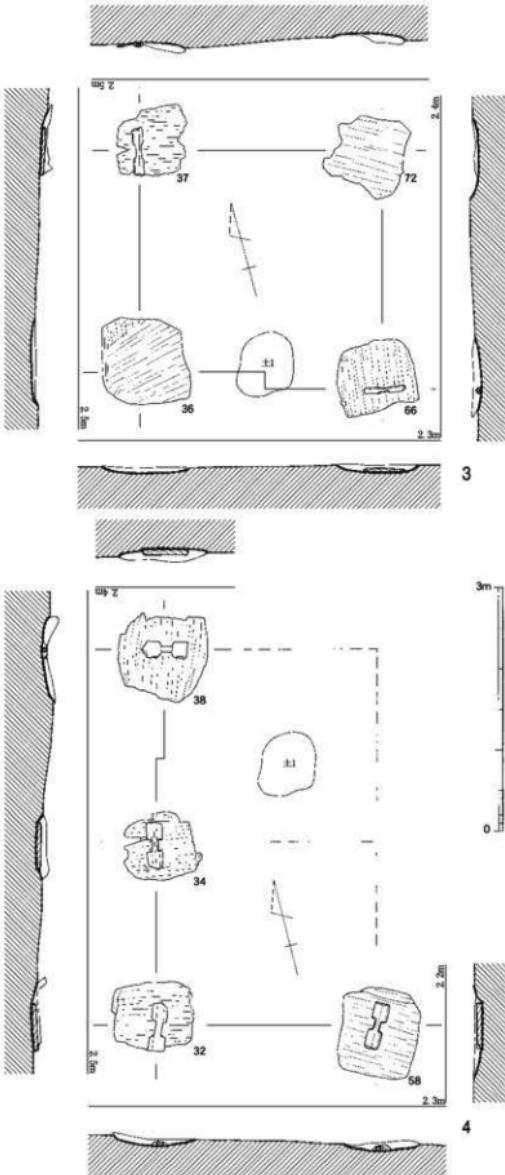
い。梁行 2.45 m、桁行 3.45 m を測り、床面積は 8.5 m² 程度となる。1号建物跡を切り、4号建物跡に切られる。礎盤 19 で残存する柱根は大きく西側へ傾く。柱穴の掘形は検出されなかつたが、残存する礎盤の形状から隅丸方形に近い平面形と考えられる。礎盤間で南方向へやや低くなる傾向がある。図示できる土器は出土していない。

3号掘立柱建物跡（第 112 図）

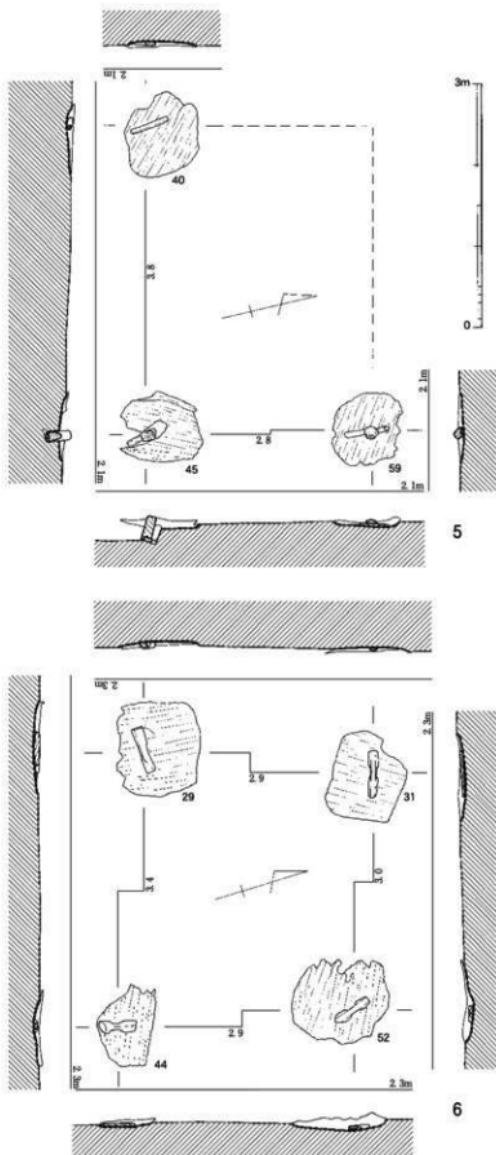
IV 区北西部に位置し、1 × 1 間の建物である。礎盤 36・37・66・72 からなり、その内 2 基しか横木が残存しておらず、またその形状も類似しておらず、埋置軸が桁・梁方向と共通しているものの、これらの組み合わせによるこの建物の確実性には不安がある。横木の検出が限られているため概算であるが、梁行約 2.9 m、桁行約 3.0 m を測り、床面積は約 8.7 m² 程度と想定される。4号建物跡を切る。柱穴の掘形は検出されなかつたが、残存する礎盤の形状から隅丸方形に近い平面形と考えられる。礎盤間で一定の方向性のある高低差はない。図示できる土器は出土していない。

4号掘立柱建物跡（第 112 図）

IV 区北西部に位置し、2 × 1 間の建物である。礎盤 32・34・38・58 からなり、これらは横木の大きさ・形状が類似し、埋置



第 112 図 IV 区 3・4 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



第113図 IV区5・6号掘立柱建物跡実測図(1/60)

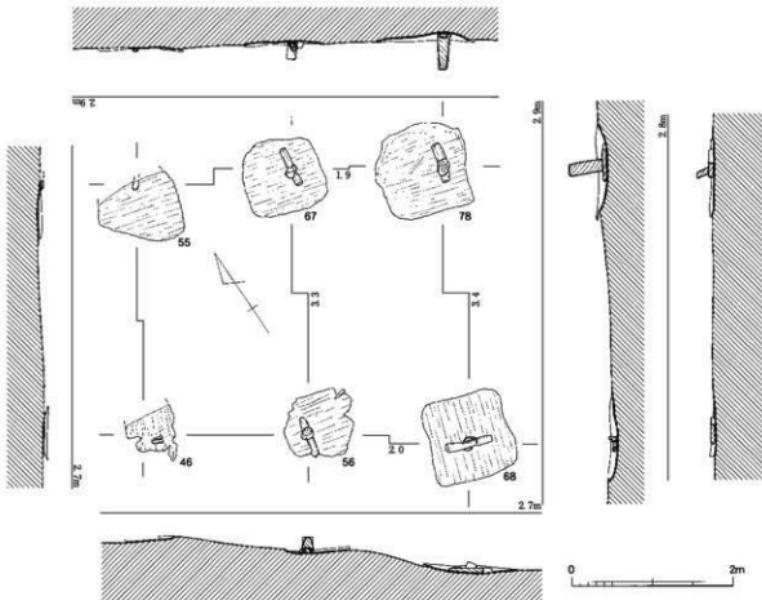
軸が桁・梁方向と共通していることから、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は非常に高い。ただ、残りの2基の礎盤については、対応が見込まれる付近で該当するものが検出できなかった点にこの建物の確実性への不安が残る。対応礎盤の欠落部分では、明瞭に組み合わせから外れる礎盤は検出されており、その切り合いのためにこの建物の礎盤が消失したとすれば、3号建物跡に切られる先後関係となる。また、その他にも2号建物跡を切り、6号建物跡に切られる先後関係が認められる。梁行2.8m、桁行4.6mを測り、床面積は約12.9m²程度である。柱穴の掘形は検出されなかったが、残存する礎盤の形状から隅丸方形に近い平面形と考えられる。消失のため確認できない部分もあるが、礎盤間で南東方向へ低くなる傾向が見られる。

出土土器 (第115図1・2)

1は壺の口縁部から肩部と考えられ、頸基部の屈曲はわずかで、口縁部はやや外側へ延びる。また、非常になじ肩の器形という特徴が見られる。2は高杯の口縁部で、内外面ともに暗文が施される。

5号掘立柱建物跡 (第113図)

IV区西側に位置し、1×1間の建物である。礎盤40・45・59からなり、これらの横木の大きさ・形状が類似し、埋置軸がほぼ共



第114図 IV区7号掘立柱建物跡実測図(1/60)

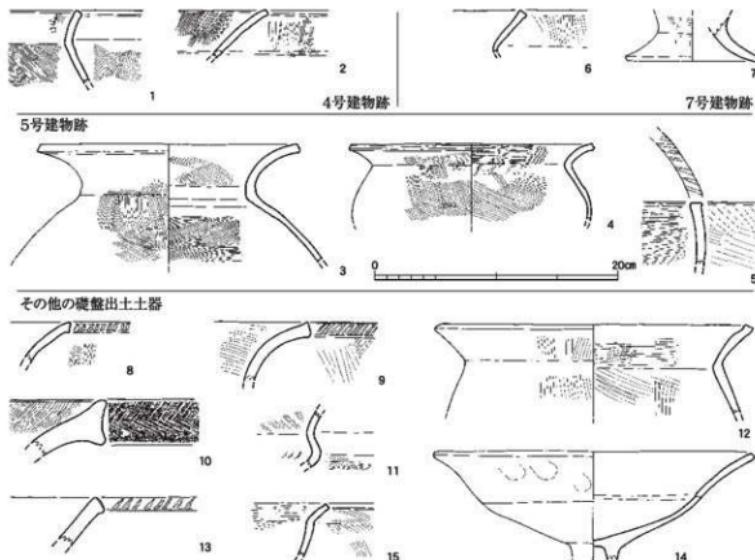
通していることから、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。また、礎盤45・59では、径13cm程度の柱根が残存する共通点も指摘される。北西側の対応する残る1基の礎盤の検出が見込まれる付近において、該当するような礎盤を検出することはできず、6号建物に帰属する礎盤31が所在する。したがって、検出に誤りがなければ、6号建物に切られて欠失したものと判断される。梁行約2.8m、桁行約3.8mを測り、床面積は10.6m²程度である。柱穴の掘形は検出されなかつたが、残存する礎盤の形状から隅丸方形に近い平面形と考えられる。なお、礎盤45では、上方からの負荷で横木が敷設された樹皮よりも下位に沈み込んでいる。礎盤間で一定の方向性のある高低差はない。

出土土器（第115図3～5）

3は、頸基部が強くくびれ、口縁部が外反して開く広口壺である。4は、肩部が張り、口縁部が屈曲して開く鉢である。内外面ともにハケ調整である。5は素口縁の鉢の口縁部で、口唇部にはキザミが施される。

6号掘立柱建物跡（第113図）

IV区西側に位置し、1×1間の建物である。礎盤29・31・44・52からなり、これらの横木の大きさ・形状の類似性や埋置軸の桁・梁方向との共通性については、認められる部分とやや異なる部分



第115図 IV区4・5・7号掘立柱建物跡およびその他の礎盤出土土器実測図(1/4)

があり、この建物の確実性にはやや不安もある。5号建物を切る先後関係が認められる。梁行約29m、桁行約3.2mを測り、床面積は9.0m²程度である。柱穴の掘形は検出されなかったが、残存する礎盤の形状から隅丸方形に近い平面形と考えられる。礎盤間で一定の方向性のある高低差は認められない。図示できる土器は出土していない。

7号掘立柱建物跡（第114図）

IV区南西部に位置し、2×1間の建物である。礎盤46・55・56・67・68・78からなり、4基の礎盤は横木の形状が類似するとともに、柱根が残存する共通性から組み合う確実性が非常に高い。また残る2基の礎盤については、礎盤46では横木が検出することができず、礎盤55では横木の所在部分のほとんどが調査区外に及んでおり、組み合わせに不安もある。ただ、柱根の残存する4基のみでは柱間が短すぎる点があり、東側では礎盤の広がりが途切れるため、西側の対応する位置関係にある残りの2基についても組み合うものと判断した。梁行3.4mで、桁行は正確に把握できないが約3.9m程度と見られ、床面積は約13.3m²程度となる。柱穴の掘形は検出されなかったが、残存する礎盤の形状から隅丸方形に近い平面形と考えられる。礎盤間で、南東方向へ低くなる傾向が見られる。

出土土器（第115図6・7）

6は在地系壺の口縁部である。7は壺の脚部と考えられる。

表3 IV区堀立柱建物跡一覧表

遺構名	伴同 番号	規模	幅長	奥長	床面積	構成柱穴の遺構名	座席色	様式
1号堀立柱建物跡	111	17 × 1 間	(3.4) m	(2.1) m	(7.1) m ²	壁盤13：壁盤22；壁盤24；壁盤39；	○	南東
2号堀立柱建物跡	111	1 × 1 間	3.45 m	2.45 m	8.5 m ²	壁盤15；壁盤19；壁盤25；壁盤63；	○	南
3号堀立柱建物跡	112	1 × 1 間	(3.0) m	(2.9) m	(8.7) m ²	壁盤36；壁盤37；壁盤66；壁盤72；	△	
4号堀立柱建物跡	112	2 × 1 間	4.6 m	2.8 m	12.9 m ²	壁盤32；壁盤34；壁盤38；壁盤58；	△	南東
5号堀立柱建物跡	113	1 × 1 間	3.8 m	2.8 m	10.6 m ²	壁盤40；壁盤45；壁盤59；	○	
6号堀立柱建物跡	113	1 × 1 間	3.2 m	2.9 m	9.0 m ²	壁盤29；壁盤31；壁盤44；壁盤52；	△	
7号堀立柱建物跡	114	2 × 1 間	(3.9) m	(3.4) m	(13.3) m ²	壁盤46；壁盤55；壁盤56；壁盤67；壁盤68；壁盤78	○	南東

その他の礎盤出土の土器（図版64、第115図8～14）

IV区の礎盤について、他の複数の礎盤との組み合わせが確認できず、掘立柱建物跡として認識することができなかつたものから出土した土器について以下で触れる。

8・9はともに外反して開く壺の口縁部である。口唇部にはキザミが施される。10は大型の壺の口縁部で、口唇部には上下に分けて斜行するキザミが施される。11は小型の壺の頸部から胴部にかけてで、胴部がやや強く張る。12は在地系壺の口縁部から肩部にかけてで、内外面ともにハケ調整である。13はやや大型の壺の口縁部で、口唇部にはキザミが施される。14は高杯の杯部で、下半は内湾気味に立ち上がり、上半は外反しながら開く。15は、口縁部がわずかに屈曲して開く鉢である。

(3) 土坑

IV区は検出に悪条件が多く、限られた範囲を順次バックホーで下方へ掘削しながら遺構の確認を繰り返していく形で行っていった。よって、個々の土坑を確認した時点でバックホーの掘削を止めて記録しているため、遺構面を正確に把握して遺構を確認することはできなかった。検出した土坑は4基で、いずれも調査区北西部に位置する。

1号土坑（図版62、第116図）

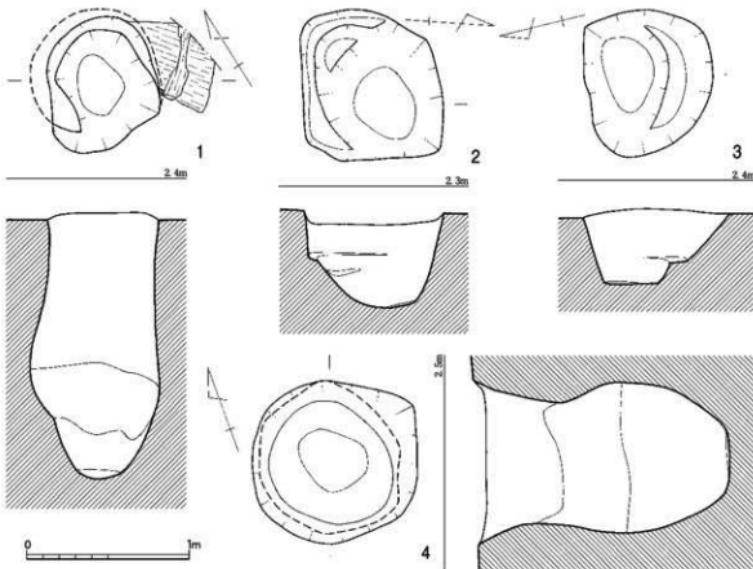
IV区北西部に位置する土坑で、礎盤70を切る形で検出された。長軸83 cm × 短軸68 cmの不整円形で、深さ163 cmである。全体的に壁の立ち上がりは非常に急な傾斜で、北半側はオーバーハングする部分があり、深さ100～110 cm程度の深さにおいて最も外側に広がり、その下位で落ち込む傾斜が強くなり底面へ至る。埋土は黒灰褐色で粘性の強いものが主体である。完形の黒色土器碗や滑石製石鍋片が出土した。

出土土器（図版64 第図1～5）

1は両黒の黒色土器碗で、体部は内湾しながら立ち上がり、内外面ともに密にミガキが施される。低い高台が付される。2は土師器小皿で、口径8.2 cm、器高1.9 cmである。3は須恵器壺の口縁部で、外反して開く。外面にはタタキと見られる痕跡が残る。4は須恵器壺の口縁部と考えられ、直線的に延びる。外面にはタタキと見られる痕跡が残る。5は土玉で、径2.5 cm程度である。

2号土坑（図版63、第116図）

IV区北西部で3・4号土坑の南側に位置する土坑である。不整な部分もあるが、一辺85 cm程度の隅丸方形に近い平面形である。南側の深さ25～30 cm程度および35～40 cm程度の深さにおいてテ

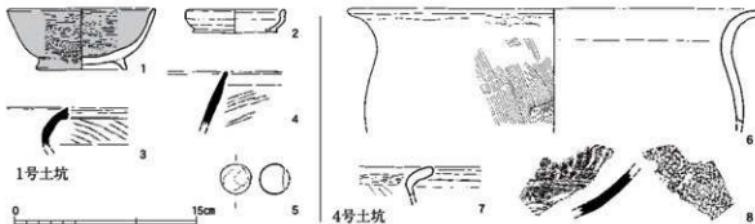


第116図 IV区 1～4号土坑実測図 (1/30)

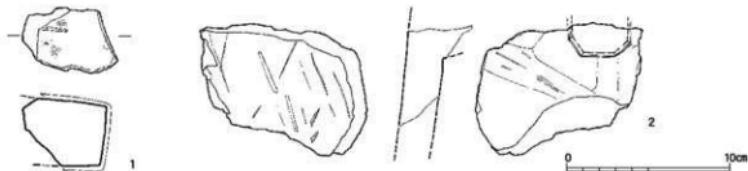
ラス部分が認められる。北側の最深部では深さ60cm程度である。埋土は淡黄灰褐色の地山に近いが、ややにごるものである。図示できる土器は出土せず、砥石片が出土した。

3号土坑（図版63、第116図）

IV区北西部で4号土坑の西側に位置する土坑である。長軸90cm×短軸79cmの隅丸方形から円形の中間的な平面形である。深さ35cm程度でテラス部分が認められ、最深部では深さ46cmである。埋土は淡黄灰褐色で地山に近似するが、ややにごりが認められるものである。図示できる土器は出土していない。



第117図 IV区 1・4号土坑出土土器実測図 (1/4)



第118図 IV区出土石器実測図(1/3)

4号土坑 (図版63、第116図)

IV区北西部で3号土坑の東側に位置する土坑である。平面形は径102cm前後の不整円形で、深さ155cmである。壁の立ち上がりは非常に急な傾斜で、オーバーハングする部分では深さ90cm程度で最も外側へ広がる。埋土はレンズ状の堆積で、40cm程度の深さまでは暗黒灰褐色でやや砂質のものが混ざり、以下では深さ90cm程度まで暗茶褐色の粘性の強いものである。更に下層の埋土はグリアイ化して青灰色となるが、遺構の規模が狭小なために詳細な土層の観察を行うことはできなかった。下層の掘削時に、掘り上げた埋土中に木製横樋が認められたが、狭小な遺構内の掘削作業のため、大きく欠損した状態での出土となった。

出土土器 (第116図6~8)

6は土師器で壺もしくは鉢の上部と考えられる。口縁部は緩やかに屈曲して外反しながら開く。7は土師器壺の口縁部である。内面にはケズリが施される。8は須恵器壺の胴下部と考えられ、外面にタタキ、内面に当て具痕が見られる。

(4) IV区出土石器 (図版64、第118図1~2)

IV区出土の石器を以下にまとめる。出土地点、法量や石材は表4を参照されたい。

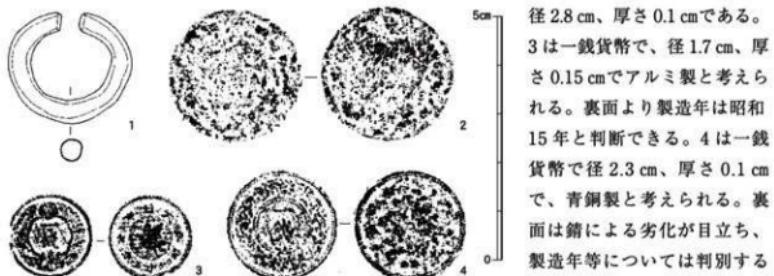
1は砥石で、大きく欠損する。3面残存する砥面はよく使用されており、平滑である。表面は風化により白色化してやや脆い。2は滑石製石鍋で、大きく欠損しており一部が残存するのみで、口縁部も消失する。欠損しているものの把手が残存する。外面は煤が非常に多く付着しており、調整等は確認し難い。内面はやや粗いケズリの痕跡も残るが、丁寧に研磨され平滑となる。

4 金属製品 (図版64、第119図1~4)

金属製品の出土は、全調査区を含めてごくわずかで、I区出土の錢貨について『蒲船津江頭遺跡I』(有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第6集)で報告していないため、本報告で扱うこととする。

1はIIIa区南側検出時出土の耳環で、全調査区で錢貨を除く唯一の出土した金属製品である。銅芯のみで金は全く残存していない。最大径は2.5cm程度で6.2gを測る。環断面は径6mm程度でほぼ円形に近い。

2~4はいずれもIa区で表採された錢貨である。2は青銅製の貨幣と考えられるが、裏表面ともに銹による劣化が著しいため、文様や製造年等の情報を読み取ることはできない。



第119図 金属製品実測図(1/1)

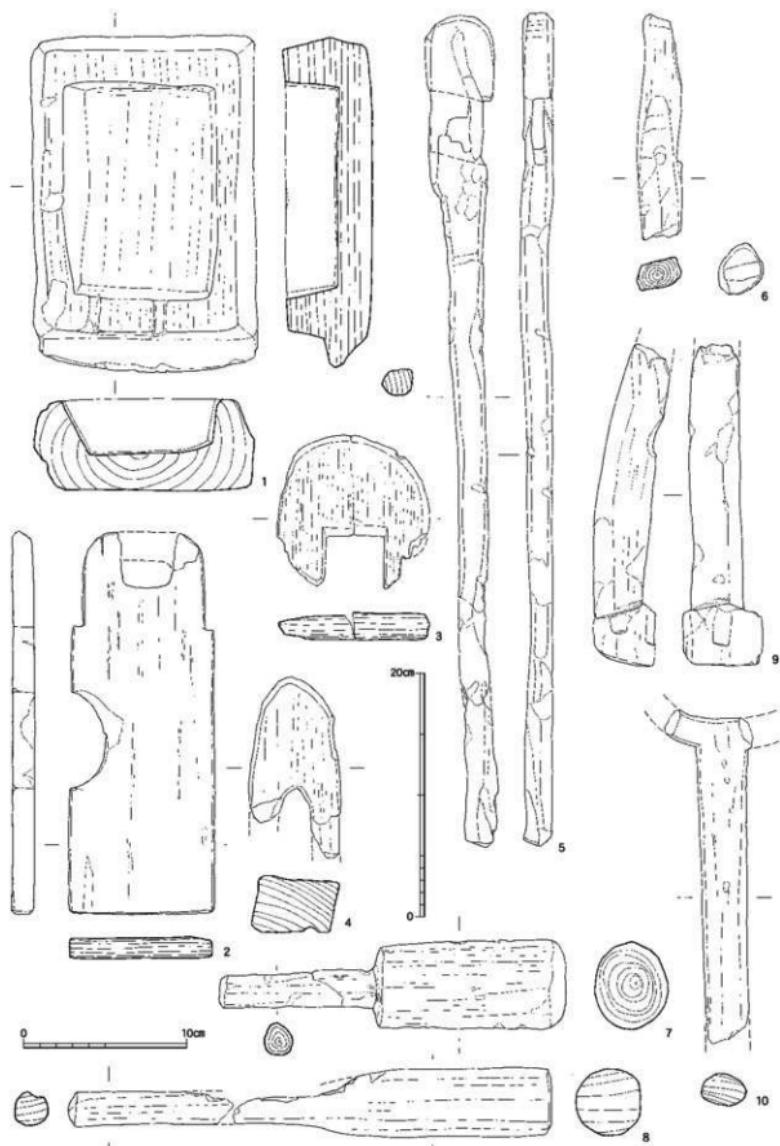
5 木器(図版65~68、第120~122図1~28)

本遺跡では、低湿地の粘質堆積土で覆われていたため多数の木器が出土したが、2009年発行のI・II区の調査内容をまとめた『蒲船津江頭遺跡I』(有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第6集)では、I・II区出土の木器を報告していない。そのため、本報告でIII・IV区出土の木器とともに報告する。

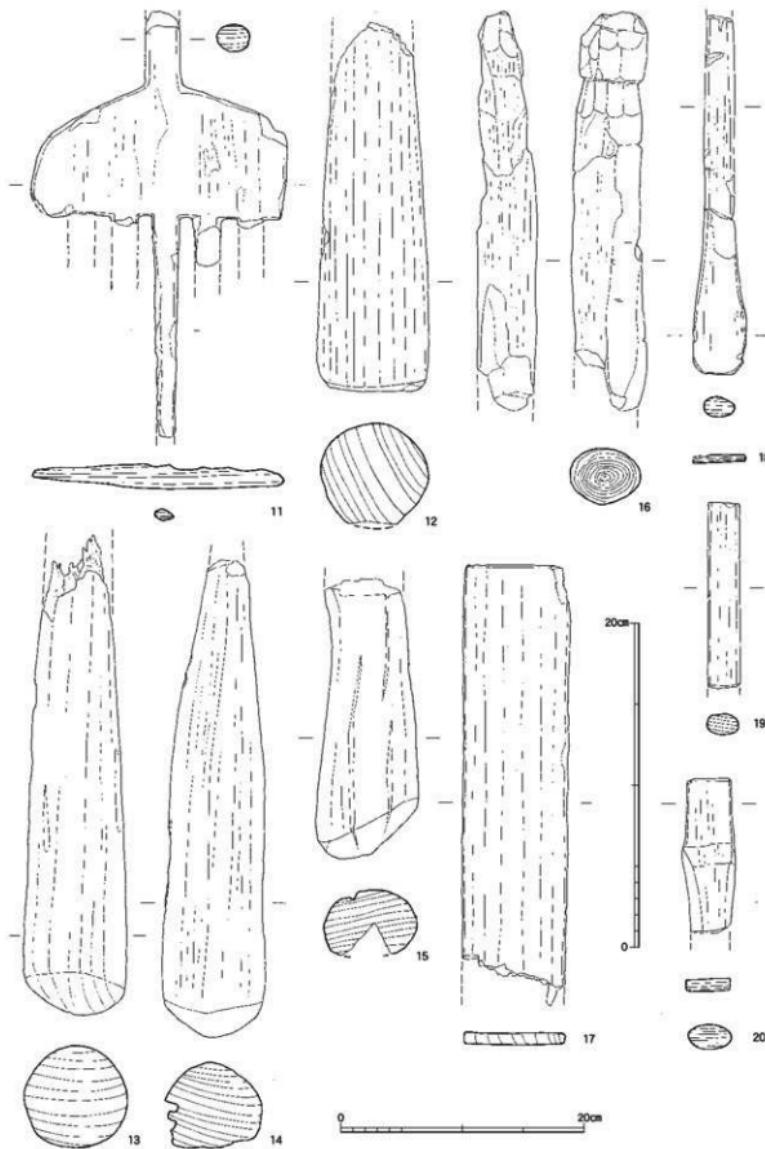
I区出土の木器は1点のみである。1はIc区53号土坑のテラス状の部分から伏せた状態で出土した盤である。長さ27.7cm、幅18.5cm、高さ7.5cmで底部の厚さは2.9cmである。横木取りで、口縁部は短辺が長辺より厚く仕上げられる。短辺側の片方が口縁の外側に張り出し、上側は中位程度の高さで面をなす。

2~17はII区出土である。大半は木質集中部からの出土で、他に8号土坑や包含層から出土のものも含まれる。2はトレーナー4出土の案の脚部である。材の残存状態は非常に良好である。長さ23.5cm、幅8.8cmで厚さ1.3cmである。長辺の片側中央部に弧状の抉りが施される。上部が枠となっており、上端部で欠失部分があるため二叉状となるが、本来天板との結合のために孔となっていた。3はII区8号土坑出土の加工木で、欠損して2片に分離する。平面形は径9.3cm程度の不整円形に大きく方形の欠き込みのある形状で、厚さ1.7cmである。外側縁部はあまり直線的な加工がされていないが、欠き込み部の側縁の加工は直線的かつシャープで、中心部に近い辺では片面から反対方向へ大きく斜行する。4はII区中央部礎盤集中部付近の包含層の出土で、直柄の斧の頭頂部付近と考えられる。頭頂部は丸く收められるが、頭部の上下面や両側面は平行に近く、断面はほぼ長方形である。下端部付近で装着孔の残存部が認められる。現存部で長さ11.0cm、幅5.5cmで厚さ3.6cmである。5はII区木質集中部出土の直柄の斧である。数片に分離しており、特に装着孔付近の欠損が激しい。頭頂部は丸く收められるが、頭部の上下面や両側面は平行に近く、断面はほぼ長方形である。方形の装着孔は頭部下面方向に向かって握り側へ傾斜する。また、装着孔に関して、頭部下面側の頭部両側面に対して抉りが入る。全長68.7cm、握りの長さ50.5cm、握りの厚さ2.7cm程度、頭部の幅5.7cm、頭部の厚さ2.5cmである。また、装着孔の幅は下面側で5.4cm、上面側で4.9cmで幅1.0cmである。6はII区木質集中部出土の楔である。芯持丸木で、頭部側の断面はほぼ円形であるが、中途から表裏両側で先端部側へ細くなるよう削られる。頭部はあまり潰れていないが、先端部は潰れる。長さ14.0cm、幅2.7cm、厚さ3.2cmである。7~8はと

径2.8cm、厚さ0.1cmである。
3は一銭貨幣で、径1.7cm、厚さ0.15cmでアルミ製と考えられる。裏面より製造年は昭和15年と判断できる。4は一銭貨幣で径2.3cm、厚さ0.1cmで、青銅製と考えられる。裏面は錆による劣化が目立ち、製造年等については判別することはできない。



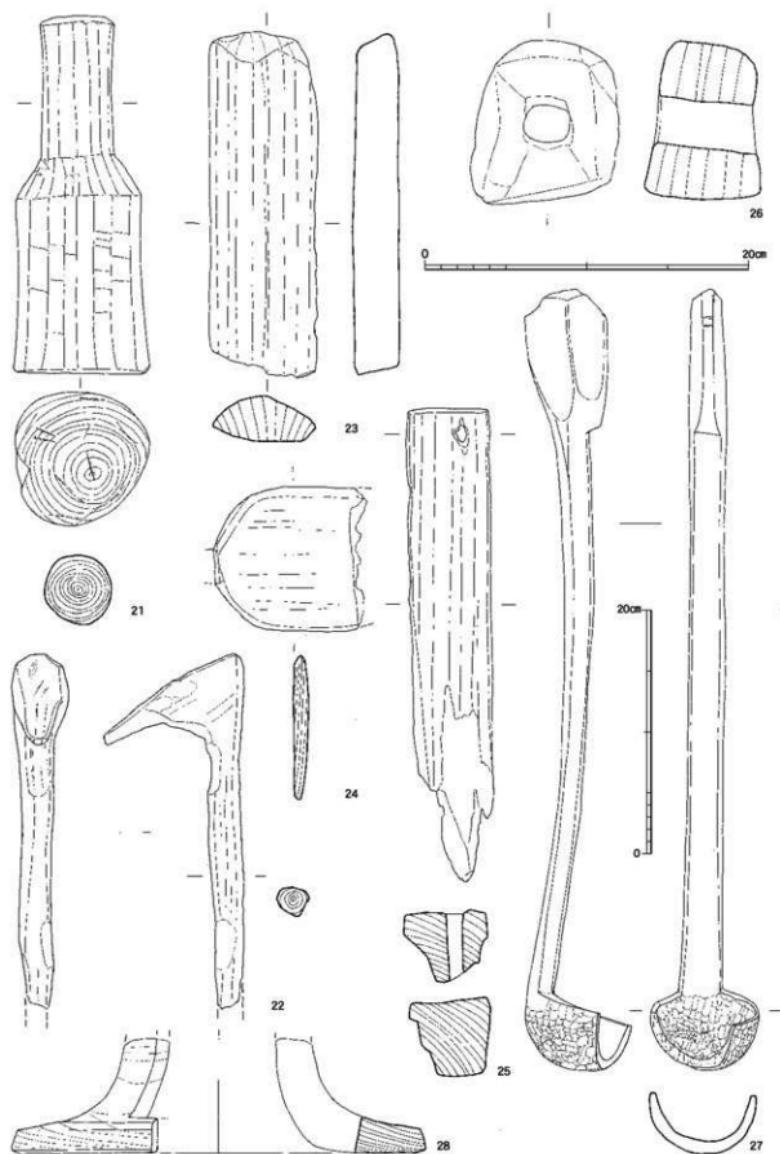
第120図 木器実測図① (1・5・7・8は1/4、他は1/3)



第121図 木器実測図② (11~15・17は1/4、他は1/3)

もに木質集中部出土の横柾である。7はほぼ完形であるが、柄の部分が欠損しており、2片に分かれる。柄と身の境界には段があり、明瞭である。全長28.5cmで、身は幅7.4cm、厚さ6.0cmで、柄は長さ12.7cm、幅3.1cm、厚さ2.5cmを測る。8は大きく欠損して2片に分かれるが、その両者は欠失部が多いため接合しない。柄と身に明瞭な段差は無く、柄から身へは徐々に太くなつて移行する。身は長さ19.3cm、幅5.7cmで、柄は径2.7cm程度である。9はII区木質集中部出土の鎌柄で、大きく欠損して柄基部付近のみ残存したものと考えられる。下面側にわずかに反っており、基部は肥厚して突起状になっているが、上面側へのせり出しある。残存部で長さ19.8cm、幅5.0cm、厚さ3.8cmである。10はII区木質集中部出土で、大きく欠損するが鎌の把手付近と考えられる。把手部分は逆三角形あるいは逆半円形で中央に孔が空くものに復元される。残存部で長さ20.6cm、幅2.9cmである。11は木質集中部出土の一木多刃で、大きく欠損するが五又であることが窺える。残存部で長さ35.1cm、幅20.8cmで厚さ2.0cmである。12～15はいずれもII区木質集中部出土の堅杵の抜き部である。全て端部が残存するが、反対側はあまり残存せず、段や屈曲で変化して握部へ移行するかは不明である。12の端部は面をなし、木質の遺存状態はやや良好で、長さ30.4cm、幅9.2cm、厚さ8.3cmである。13は長さ39.7cm、径8.5cm程度である。14は長さ39.2cm、幅8.4cm、厚さ7.1cmである。15は残存状態が良好ではなく、やや不整形で割れて欠損する部位も認められる。長さ23.2cm、幅8.5cmである。16はII区8号土坑出土で、欠損しており、鎌、掘り棒や自在鉤等の頭部の可能性が考えられる。端部は突起状に形成され、身の断面は梢円形である。残存部で長さ24.6cm、幅4.6cmで厚さ3.6cmである。17は木質集中部出土の板材である。欠損するものの片側の端部が残存しており、長方形であったと考えられる。残存部で長さ36.4cm、幅8.6cm、厚さ1.1cmである。

18～28はIII区出土で、土坑からの出土資料に限られる。18は55号土坑出土の杓子形木器で、欠損して2片に分離しており、更に頭部側は欠失する。側面から見ても直線的で、身は扁平で板状の断面である。断面の稜はあまり角張らず、緩やかである。残存部で長さ22.9cm、柄幅2.0cm、身幅3.4cm、柄の厚さ1.4cm、身の厚さ0.4cmである。19は55号土坑出土で、杓子形木器や匙等の柄と考えられ、18とは側面の幅等で断面がやや異なり、また側面から見てわずかであるが反るため別個体と思われるが、24と同一個体の可能性がある。両端部で欠損し、断面の稜はあまり角張らず、緩やかである。残存部で長さ10.4cm、幅2.0cmで厚さ1.3cmである。20は29号土坑出土で、片側は欠損する。平面形は杓子形木器に類似するが、身があまり扁平ではなく、また断面の稜は非常に角張っているため、袋状鉄斧を装着する斧台の可能性がある。残存部で長さ9.5cm、幅3.3cmで厚さ1.6cmである。21は68号土坑出土の完形の横柾である。全面的に粗い加工痕が見られる。身から柄へは、双方で屈曲して明瞭な稜を伴つて移行する。全長29.6cm、身は長さ18.1cm、径11.1cmで柄は長さ11.5cm、径6.1cmである。22は55号土坑出土の膝柄の横斧で、袋状鉄斧を装着したと考えられる。握りの中途で欠損し、基部は失われる。残存部で長さ21.8cm、幅8.6cm、厚さ2.1cmで、柄は径2.1cm程度である。形状から自在鉤の可能性もある。23は82号土坑出土の加工木で、やや不整であるが全体的に加工・整形されている。断面は不整な蒲鉾状である。用途は不明である。長さ21.4cm、幅6.7cm、厚さ2.8cmである。24は55号土坑出土で匙の身と考えられる。両端で欠損しており、片側は柄への変換部である。断面は、表面で平坦で裏面は中央部でわずかに膨らんで厚くなる。19と同一個体の可能性がある。残存部で長さ9.3cm、幅8.9cm、



第122図 木器実測図③ (21・27・28は1/4、他は1/3)

厚さ 1.3 cm で、欠損部から柄幅は 2.1 cm となる。25 は 30 号土坑出土の角材で、木質の遺存状態が良好ではなく、劣化が激しく不整形となる部分が多い。片方の端部は欠失するが、遺存する端部付近には穿孔が認められる。現存部で長さ 29.1 cm、幅 5.4 cm、厚さ 5.0 cm である。26 は 82 号土坑出土の環状木製品である。穿孔部分には柄等を差し込んだ可能性がある。側縁部はやや丸みの強い部分が多いが、やや平坦で面状となる部位がある。そこでは、わずかながら潰れたような痕跡が見られ、打ち具として用いられた可能性が考えられる。27 は 34 号土坑出土の縦杓子で、木質の遺存状態が良好で、完形に近いが、身が一部欠損する。非常に長い柄を有し、側面から見ると反っており、断面は稜が緩やかな隅丸方形に近い。また、頭部は厚く突起状に造り出され、中央部がやや厚く断面が扁平な六角形状で、わずかであるが装飾的な整形がなされる。長さ 64.5 cm、身幅 8.9 cm、柄幅 2.9 cm で柄の厚さ 2.5 cm である。28 は 83 号土坑出土の高杯脚部である。大きく欠損し、遺存するのは一部のみであるが、透かし孔が認められる。上端部は平滑な面であるが、木目に沿って分離した欠損部であり、本来は上部に連続していたものである。外面の上方への立ち上がり付近において、わずかな段差が形成される。裾径 34.0 cm で残存高 9.4 cm である。

図示していない木器に以下のようなものがある。図版 68 - 29 は II 区木質集中部の出土で、劣化が著しくほとんど原形をとどめないが、全体的に薄く、方形の非常に低い脚部と思われる部位が彫り出されるため、盤と考えられる。図版 68 - 30 は IV 区 4 号土坑出土の櫛である。土坑下層の粘質土の掘削時に、掘り上げた埋土中に認められたもので、狭小な遺構内での掘削作業のため、大きく欠損した状態での出土となった。そのため、歯の多くは分離した状態であるが、原形を残す部位から、残存長 4.3 cm、背までの幅 2.4 cm、歯長 1.7 cm を測る。



Ic区 53号土坑出土盤

表4 蒲船津江頭遺跡III・IV区出土石器一覧表

排列番号	番号	図版	種類	区	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	遺物番号
103	1	60	砾石	IIIa	北端トレンチ	3.9	3.1	2.9	39.9	細粒砂岩	S3-40
103	2	60	砾石	IIIa	南側横出時	3.9	3.8	2.4	39.0	細粒砂岩	S3-64
103	3	60	砾石	IIIa	南西隅包含層	7.5	5.7	2.3	129.3	細粒砂岩	S3-44
103	4	60	砾石	IIIb	土坑30	8.9	5.5	4.2	233.7	砂岩	S3-4
103	5	60	砾石	IIIb	土坑12	9.0	8.3	4.3	441.8	砂岩	S3-13
103	6	60	砾石	IIIb	土坑81	13.5	8.2	2.6	316.4	粘板岩	S3-27
103	7	60	砾石	IIIb	土坑44	10.0	5.8	3.1	320.6	硬質砂岩	S3-52
103	8	60	砾石	IIIa	南西隅包含層	12.1	8.4	4.0	777.7	砂岩	S3-42
103	9	60	砾石	IIIb	土坑15	13.7	9.2	5.6	775.0	粘板岩	S3-34
103	10	60	砾石	IIIb	廣1-2	16.7	11.9	3.1	629.8	砂岩	S3-39
103	11	60	砾石	IIIb	廣1-2	11.8	8.7	8.1	761.9	砂岩	S3-53
103	12	60	砾石	IIIb	北端包含層	17.0	11.8	6.4	1731.4	粘板岩	S3-15
103	13	60	砾石	IIIa	P3	19.1	8.4	4.7	901.3	粘板岩	S3-43
104	14	60	砾石	IIIb	土坑81	29.9	9.7	4.5	1714.0	砂岩	S3-56
104	15	60	砾石	IIIb	廣1-4	14.7	11.0	8.1	1678.7	花崗岩	S3-29
104	16	60	砾石	IIIb	北端包含層	18.5	12.6	5.5	1171.9	砂岩	S3-30
104	17	60	砾石	IIIb	土坑63	35.8	10.1	10.2	2415.1	細粒砂岩	S3-23
104	18	60	砾石	IIIb	試掘トレンチ	24.0	12.7	12.3	3386.5	砂岩	S3-5
104	19	60	砾石	IIIb	土坑72	21.9	12.7	8.1	2708.1	粘板岩	S3-7
104	20	60	砾石	IIIb	北端包含層	7.1	6.6	1.6	99.7	砂岩	S3-12
105	21	60	閉石	IIIb	北端包含層	9.6	6.6	4.4	344.3	玄武岩	S3-45
105	22	60	閉石	IIIb	土坑29	10.8	6.6	3.8	411.6	玄武岩	S3-41
105	23	60	閉石	IIIb	廣ペルト2	11.5	8.1	4.3	577.0	玄武岩	S3-10
105	24	60	閉石	IIIb	北側包含層	10.7	9.5	5.4	732.1	玄武岩	S3-54
105	25	60	閉石	IIIb	北端包含層	12.0	10.0	8.2	1306.9	斑岩	S3-60
105	26	60	閉石	IIIb	北端包含層	10.2	8.5	6.1	670.4	玄武岩	S3-59
105	27	60	閉石	IIIb	廣ペルト4	10.0	9.1	7.3	871.9	砾灰岩	S3-20
105	28	60	閉石	IIIb	廣1-4	10.6	9.1	4.4	534.5	砾灰岩	S3-16
105	29	60	閉石	IIIb	北側横出時	10.2	8.5	6.1	846.7	玄武岩	S3-55
105	30	60	閉石	IIIb	溝2	13.3	8.8	6.4	956.4	玄武岩	S3-17
105	31	60	閉石	IIIb	廣1-5	12.9	9.3	9.1	1484.1	玄武岩	S3-11
105	32	60	閉石	IIIb	廣17層	13.6	13.3	6.3	1425.2	玄武岩	S3-18
106	33	61	閉石	IIIa	包含層	15.2	10.0	6.7	1411.4	玄武岩	S3-35
106	34	61	閉石	IIIb	北端包含層	17.7	13.8	9.6	2842.8	玄武岩	S3-6
106	35	61	閉石	IIIa	南西隅包含層	12.6	9.5	6.2	1039.9	砾灰岩	S3-37
106	36	61	閉石	IIIb	土坑75	18.8	15.3	6.2	2739.2	玄武岩	S3-2
106	37	61	閉石	IIIb	北端包含層	22.2	9.5	9.2	2422.6	玄武岩	S3-24
106	38	61	閉石	IIIb	包含層	13.7	11.3	7.9	1564.0	玄武岩	S3-38
106	39	61	閉石	IIIa	廣1-3	10.2	9.6	4.2	556.2	玄武岩	S3-37
106	40	61	石庖丁	IIIa	南西隅包含層	7.1	6.4	0.7	38.9	片岩	S3-47
106	41	61	剥片	IIIb	南端横出時	10.4	4.5	1.2	38.3	安山岩	S3-46
107	42	61	磨石	IIIb	土坑30-3層一括	8.3	6.8	2.7	198.6	玄武岩	S3-50
107	43	61	磨石	IIIb	北端包含層中央部	7.8	6.9	4.8	381.6	玄武岩	S3-21
107	44	61	磨石	IIIb	廣1-4	9.7	6.4	3.9	374.7	玄武岩	S3-33
107	45	61	磨石	IIIb	土坑76	8.6	6.3	2.4	183.5	玄武岩	S3-31
107	46	61	磨石	IIIb	土坑57	9.4	8.0	3.2	347.8	玄武岩	S3-57
107	47	61	磨石	IIIb	廣17層	7.8	9.6	5.4	571.1	玄武岩	S3-22①
107	48	61	磨石	IIIb	土坑81	11.7	8.0	6.0	701.1	玄武岩	S3-19
107	49	61	磨石	IIIb	廣1-5	14.7	9.6	5.7	962.0	玄武岩	S3-8
107	50	61	磨石	IIIb	溝2	11.8	9.0	7.1	1099.6	玄武岩	S3-58
107	51	61	磨石	IIIb	北端包含層	12.1	6.7	3.3	407.8	玄武岩	S3-61
107	52	61	磨石	IIIb	土坑34	12.6	8.0	5.0	592.1	玄武岩	S3-28
108	53	61	磨石	IIIb	土坑75	10.1	8.7	5.1	622.5	玄武岩	S3-32
108	54	61	磨石	IIIb	土坑75	11.8	9.7	7.1	1062.1	玄武岩	S3-3
108	55	61	磨石	IIIb	土坑35	10.6	4.6	4.4	216.8	硬質砂岩	S3-49
108	56	61	磨石	IIIb	土坑68	11.0	4.5	3.2	239.7	玄武岩	S3-1
108	57	61	磨石	IIIb	廣1-1	11.5	5.7	3.7	330.6	玄武岩	S3-51
108	58	61	磨石	IIIb	廣1-4	9.4	4.6	3.5	197.0	玄武岩	S3-25
108	59	61	磨石	IIIb	北端包含層中央部	12.2	6.8	7.3	776.4	玄武岩	S3-22②
108	60	61	磨石	IIIb	北包含層	12.5	4.4	4	296.2	玄武岩	S3-48
108	61	61	叩石	IIIb	土坑77	10.5	8.9	6.7	837.2	玄武岩	S3-36
108	62	61	叩石	IIIa	中央部横出時	4.3	4.2	3.3	81.5	玄武岩	S3-63
108	63	61	叩石	IIIb	土坑25	14.5	6.7	6	745.8	玄武岩	S3-9
109	64	61	叩石	IIIb	北端包含層中央部	33.6	32	9.8	161600	玄武岩	S3-65
109	65	61	石錐	IIIb	土坑53	高9.0	口徑45.4	2.8	876.2	沸石	S3-66
118	1	64	砾石	IV	土坑2	5.8	4	4.2	92.4	細粒砂岩	S4-1
118	2	64	石錐	IV	土坑1	高7.1		1.9	301.9	滑石	S4-2

表5 蒲船津江頭遺跡III・IV区出土土器一覧表(1)

遺跡	番号	番号	区	出土遺構	その他の 出土地	種類	基準	登録 番号	種類	番号	番号	区	出土遺構	その他の 出土地	種類	基準	登録 番号
20 1	■	■	■	建物1	ビット-119	弥生・土器部	甕	459	55	5	41	■	土坑14	■	土器部	甕	13
20 2	■	■	■	建物1	ビット-119	弥生・土器部	高杯	458	55	6	41	■	土坑14	■	土器部	甕	12
20 3	■	■	■	建物2	建物2-1	弥生・土器部	甕	457	55	6	41	■	土坑14	■	土器部	甕	14
20 4	■	■	■	建物2	建物2-2	弥生・土器部	甕	462	55	8	41	■	土坑14	■	土器部	甕	15
20 5	■	■	■	建物2	建物2-2	弥生・土器部	甕	461	55	9	42	■	土坑20	■	土器部	甕	36
20 6	■	■	■	建物3	建物3-1	弥生・土器部	甕	460	55	10	42	■	土坑20	■	土器部	甕	35
20 7	■	■	■	建物4	建物4-1	弥生・土器部	甕	464	55	11	42	■	土坑20	■	土器部	甕	37
20 8	■	■	■	建物5	建物5-4	弥生・土器部	高杯	466	55	12	42	■	土坑20	■	土器部	甕	34
20 9	40	■	■	建物5	建物5-4	弥生・土器部	株	465	57	1	■	■	土坑21	■	土器部	甕	41
20 10	■	■	■	建物6	建物6-3	弥生・土器部	甕	467	57	2	■	■	土坑21	■	土器部	甕	42
20 11	■	■	■	建物6	建物6-3	弥生・土器部	株	473	57	3	■	■	土坑21	■	土器部	甕	38
20 12	■	■	■	建物7	建物7-1	弥生・土器部	甕	474	57	4	■	■	土坑21	■	土器部	甕	39
20 13	■	■	■	建物7	建物7-4	弥生・土器部	株	479	57	5	■	■	土坑21	■	土器部	甕	40
20 14	■	■	■	建物8	建物8-4	弥生・土器部	株	469	57	6	42	■	土坑21	■	土器部	甕	53
20 15	■	■	■	建物8	土坑21	弥生・土器部	甕	471	57	7	42	■	土坑21	■	土器部	甕	52
20 16	■	■	■	建物8	建物8-4	弥生・土器部	甕	468	57	8	42	■	土坑21	■	土器部	高杯	61
20 17	■	■	■	建物9	土坑23	弥生・土器部	甕	474	57	9	42	■	土坑21	■	土器部	株	70
20 18	■	■	■	建物9	土坑23	弥生・土器部	株	475	59	1	■	■	土坑22	■	土器部	株	44
20 19	■	■	■	建物9	土坑23	弥生・土器部	高杯	482	59	2	43	■	土坑23	■	土器部	甕	68
20 20	■	■	■	建物10	土坑23	弥生・土器部	株	483	59	3	43	■	土坑23	■	土器部	株	56
20 21	40	■	■	建物10	土坑23	手くわね	手くわね	291	59	4	■	■	土坑23	■	土器部	甕	45
20 22	■	■	■	建物9	建物9-4	弥生・土器部	土瓦	589	55	5	43	■	土坑23	■	土器部	甕	56
20 23	■	■	■	建物16	ビット-10	弥生・土器部	甕	509	55	6	43	■	土坑23	■	土器部	高杯	57
20 24	■	■	■	建物16	ビット-67	弥生・土器部	甕	510	55	7	42	■	土坑23	■	土器部	株	48
20 25	40	■	■	建物19	北中古墳群2号	弥生・土器部	手くわね	502	55	8	■	■	土坑23	■	土器部	株	47
20 26	■	■	■	建物29	建物27	弥生・土器部	甕	481	55	9	■	■	土坑23	■	土器部	甕	49
20 27	■	■	■	建物35	建物10	弥生・土器部	土瓦	482	55	10	■	■	土坑23	■	土器部	株	66
20 28	■	■	■	建物35	建物10	弥生・土器部	高杯	483	55	11	43	■	土坑23	■	土器部	手合	54
20 29	■	■	■	建物41	建物26	弥生・土器部	甕	484	55	12	■	■	土坑23-24	■	土器部	甕	71
20 30	■	■	■	建物41	建物256	弥生・土器部	甕	486	60	1	43	■	土坑24	■	土器部	甕	55
20 31	■	■	■	建物41	建物29	弥生・土器部	手合	485	60	2	■	■	土坑24	■	土器部	北半	73
20 32	■	■	■	建物44	建物277	弥生・土器部	株	487	60	3	43	■	土坑24	■	土器部	北半	68
44 1	■	■	■	建物28	建物28	弥生・土器部	甕	488	60	4	43	■	土坑24	■	土器部	下部	59
44 2	■	■	■	建物46	建物214	弥生・土器部	株	489	60	5	43	■	土坑24	■	土器部	手合	61
44 3	■	■	■	建物46	建物103	弥生・土器部	高杯	490	60	6	43	■	土坑24	■	土器部	手合	62
44 4	■	■	■	建物46	建物101	弥生・土器部	甕	491	60	7	43	■	土坑24	■	土器部	手合	63
44 5	■	■	■	建物46	建物101	弥生・土器部	株	492	60	8	■	■	土坑24	■	土器部	手合	64
44 6	■	■	■	建物46	建物101	弥生・土器部	甕	493	60	9	■	■	土坑24	■	土器部	下部	65
44 7	■	■	■	建物46	建物101	弥生・土器部	株	496	60	10	44	■	土坑24	■	土器部	手合	67
44 8	■	■	■	建物46	建物118	弥生・土器部	甕	493	60	11	44	■	土坑24	■	土器部	手合	66
44 9	■	■	■	建物46	建物118	弥生・土器部	株	491	60	12	■	■	土坑24	■	土器部	金	80
44 10	■	■	■	建物46	建物118	弥生・土器部	甕	490	60	13	44	■	土坑24	■	土器部	金	69
44 11	■	■	■	建物46	建物118	弥生・土器部	手合	492	60	14	■	■	土坑24	■	土器部	手合	76
44 12	■	■	■	建物47	建物153	弥生・土器部	高杯	493	60	15	44	■	土坑24	■	土器部	手合	65
44 13	■	■	■	建物47	建物153	弥生・土器部	甕	494	60	16	44	■	土坑24	■	土器部	手合	66
44 14	■	■	■	建物12-56	建物131-132	弥生・土器部	手合	500	60	17	■	■	土坑24	■	土器部	手合	79
44 15	■	■	■	建物12-56	建物131-132	弥生・土器部	手合	499	60	18	■	■	土坑24	■	土器部	手合	77
44 16	■	■	■	建物67	建物160-161	弥生・土器部	手合	501	60	19	44	■	土坑24	■	土器部	手合	64
44 17	■	■	■	建物18	建物18	弥生・土器部	甕	503	62	1	■	■	土坑25	■	土器部	甕	89
44 18	■	■	■	建物18	北中古墳群4号	弥生・土器部	高杯	532	62	2	■	■	土坑25	■	土器部	手合	84
44 19	■	■	■	建物18	ビット-117	弥生・土器部	手合	519	62	3	44	■	土坑25	■	土器部	手合	98
44 20	■	■	■	建物18	ビット-117	弥生・土器部	高杯	519	62	4	44	■	土坑25	■	土器部	手合	91
44 21	■	■	■	建物18	北中古墳群4号	弥生・土器部	手合	480	62	5	■	■	土坑25	■	土器部	手合	92
44 22	40	■	■	建物18	ビット-88	弥生・土器部	手合	508	62	6	■	■	土坑25	■	土器部	手合	83
44 23	40	■	■	建物18	ビット-88	弥生・土器部	株	526	62	7	44	■	土坑25	■	土器部	高杯	97
44 24	■	■	■	建物18	ビット-88	弥生・土器部	甕	525	62	8	■	■	土坑25	■	土器部	株	85
44 25	40	■	■	建物18	ビット-88	弥生・土器部	株	527	62	9	44	■	土坑25	■	土器部	株	95
44 26	■	■	■	建物18	ビット-88	弥生・土器部	株	524	62	10	44	■	土坑25	■	土器部	株	96
44 27	■	■	■	建物18	ビット-116	弥生・土器部	株	531	62	11	■	■	土坑25	■	土器部	株	82
50 1	■	■	■	土坑11	土坑11	土器部	甕	5	63	3	45	■	土坑28	■	土器部	甕	87
50 2	■	■	■	土坑11	土坑11	土器部	手合	6	63	4	45	■	土坑28	■	土器部	手合	94
50 3	■	■	■	土坑11	土坑11	土器部	手合	7	63	5	45	■	土坑28	■	土器部	手合	102
50 4	■	■	■	土坑11	土坑11	土器部	手合	24	63	6	■	■	土坑28	■	土器部	手合	93
50 5	■	■	■	土坑12	土坑12	土器部	手合	27	63	7	45	■	土坑29	■	土器部	手合	119
50 6	■	■	■	土坑12	土坑12	土器部	手合	28	63	8	■	■	土坑29	■	土器部	手合	103
50 7	■	■	■	土坑12	土坑12	土器部	手合	26	63	9	■	■	土坑29	■	土器部	手合	108
50 8	■	■	■	土坑12	土坑12	土器部	手合	29	63	10	■	■	土坑29	■	土器部	手合	114
50 9	■	■	■	土坑12	土坑12	土器部	手合	25	63	11	■	■	土坑29	■	土器部	手合	107
50 10	■	■	■	土坑12	土坑12	土器部	手合	20	63	12	45	■	土坑29	■	土器部	手合	104
50 11	■	■	■	土坑12	土坑12	土器部	手合	8	63	13	■	■	土坑29	■	土器部	手合	112
53 11	■	■	■	土坑12	土坑12	土器部	手合	10	64	14	■	■	土坑29-30	■	土器部	手合	72-75
53 12	■	■	■	土坑12	土坑12	土器部	手合	23	64	15	■	■	土坑29	■	土器部	手合	106
53 13	■	■	■	土坑12	土坑12	土器部	手合	43	64	16	■	■	土坑29	■	土器部	手合	105
53 14	■	■	■	土坑12	土坑12	土器部	手合	19	64	17	■	■	土坑29	■	土器部	手合	109
53 15	■	■	■	土坑12	土坑12	土器部	手合	18	64	18	■	■	土坑29	■	土器部	手合	104
53 16	■	■	■	土坑12	土坑12	土器部	手合	16	64	19	■	■	土坑29	■	土器部	高杯	116
53 17	■	■	■	土坑12	土坑12	土器部	手合	15	64	20	■	■	土坑29	■	土器部	手合	110
53 18	■	■	■	土坑12	土坑12	土器部	手合	20	64	21	■	■	土坑29	■	土器部	手合	103
53 19	■	■	■	土坑12	土坑12	土器部	手合	17	64	22	■	■	土坑29	■	土器部	手合	111
55 1	■	■	■	土坑13	土坑13	土器部	手合	31	64	23	45	■	土坑29	■	土器部	手合	122
55 2	■	■	■	土坑13	土坑13	土器部	手合	32	64	24	■	■	土坑29	■	土器部	手合	115
55 3	■	■	■	土坑13	土坑13	土器部	手合	30	64	25	■	■	土坑29	■	土器部	手合	112
55 4	41	■	■	土坑14	Nu.3	土器部	手合	11	64	26	45	■	土坑29	■	土器部	手合	120

表5 蒲船津江頭遺跡III・IV区出土土器一覧表(2)

図面番号	部品番号	区	出土遺構	その他の出土遺物	種類	基盤	身幅	肩幅	口幅	高さ	回収番号	区	出土遺構	その他の出土遺物	種類	基盤	身幅	身幅	
64	27	■	土坑29	赤生土・土器群	支脚	117	74	6	47	■	土坑38	下層	赤生土・土器群	壺	215				
					土器	120	75	6	48	■	土坑38	下層	赤生土・土器群	高杯	209				
66	2	■	土坑30		土器	153	74	8	■	土坑38	下層	赤生土・土器群	壺	213					
66	3	■	土坑30		土器	131	74	9	■	土坑38	下層	赤生土・土器群	壺	214					
66	4	■	土坑30		土器	127	74	10	■	土坑38	下層	赤生土・土器群	高杯	214					
66	5	■	土坑30		土器	132	75	1	48	■	土坑40	中層・下層	赤生土・土器群	壺	217				
66	6	■	土坑30	中層一括	土器	135	75	2	48	■	土坑40	中層・下層	赤生土・土器群	壺	222				
66	7	■	土坑30		土器	136	75	3	48	■	土坑40	上層	赤生土・土器群	壺	214				
66	8	65	■	土坑30	中層一括	土器	138	75	4	48	■	土坑40	上層	赤生土・土器群	壺	237			
66	9	65	■	土坑30	底面	157	75	5	48	■	土坑40	中層・下層	赤生土・土器群	壺	220				
66	10	■	土坑30		土器	141	75	6	48	■	土坑40	中層・下層	赤生土・土器群	壺	222				
66	11	■	土坑30		土器	140	75	7	■	土坑40	下層	赤生土・土器群	壺	235					
66	12	■	土坑30	中層一括	土器	149	75	8	■	土坑40	上層	赤生土・土器群	高杯	233					
66	13	66	■	土坑30	中層一括	土器	159	75	9	48	■	土坑40	上層	赤生土・土器群	高杯	219			
66	14	66	■	土坑30		土器	163	75	10	48	■	土坑40	上層	赤生土・土器群	壺	215			
66	15	66	■	土坑30	中層一括	土器	170	75	11	48	■	土坑40	上層	赤生土・土器群	壺	221			
66	16	■	土坑30		土器	142	75	12	■	土坑41	下層	赤生土・土器群	壺	238					
66	17	■	土坑30	中層一括	土器	133	75	13	■	土坑41	下層	赤生土・土器群	壺	239					
67	18	■	土坑30		土器	146	77	1	■	土坑43	下層	赤生土・土器群	壺	242					
67	19	46	■	土坑30	底面	161	77	2	■	土坑43	下層	赤生土・土器群	壺	243					
67	20	46	■	土坑30		土器	151	77	3	■	土坑43	下層	赤生土・土器群	壺	244				
67	21	46	■	土坑30		土器	156	77	4	■	土坑43	下層	赤生土・土器群	壺	244				
67	22	46	■	土坑30		土器	152	77	5	■	土坑43	下層	赤生土・土器群	壺	244				
67	23	46	■	土坑30		土器	159	77	6	■	土坑44	中層	赤生土・土器群	壺	230				
67	24	46	■	土坑30	中層一括	土器	162	77	7	48	■	土坑44	中層・下層	赤生土・土器群	壺	226			
67	25	46	■	土坑30		土器	164	77	8	49	■	土坑44	中層・下層	赤生土・土器群	壺	228			
67	26	■	土坑30	中層一括	土器	125	77	9	49	■	土坑44	中層・下層	赤生土・土器群	壺	227				
67	27	■	土坑30	中層一括	土器	127	77	10	49	■	土坑44	中層・下層	土器群	壺	229				
67	28	■	土坑30	中層一括	土器	139	77	11	49	■	土坑44	中層・下層	土器群	壺	230				
67	29	■	土坑30		土器	128	77	12	49	■	土坑44	中層・下層	土器群	壺	235				
67	30	■	土坑30		土器	129	77	13	■	土坑44	中層・下層	赤生土・土器群	壺	249					
67	31	■	土坑30		土器	126	77	14	■	土坑46	下層	赤生土・土器群	壺	247					
67	32	■	土坑30		土器	134	77	15	■	土坑46	下層	赤生土・土器群	壺	246					
67	33	■	土坑30		土器	137	77	16	■	土坑46	下層	赤生土・土器群	壺	248					
67	34	■	土坑30		土器	138	77	17	■	土坑46	下層	赤生土・土器群	壺	246					
67	35	■	土坑30		土器	136	77	18	■	土坑46	下層	赤生土・土器群	壺	246					
67	36	■	土坑30		土器	130	77	19	49	■	土坑46	下層	赤生土・土器群	壺	251				
68	37	■	土坑30		土器	123	79	20	■	土坑46	下層	赤生土・土器群	壺	252					
68	38	■	土坑30		土器	150	79	21	■	土坑46	下層	赤生土・土器群	壺	249					
68	39	46	■	土坑30	中層一括	土器	168	79	4	49	■	土坑50	下層	赤生土・土器群	壺	250			
68	40	■	土坑30		土器	143	79	5	■	土坑50	下層	赤生土・土器群	壺	265					
68	41	47	■	土坑30	中層一括	土器	166	79	6	■	土坑51	下層	赤生土・土器群	壺	266				
68	42	47	■	土坑30		土器	167	79	7	49	■	土坑51	下層	赤生土・土器群	壺	267			
68	43	47	■	土坑30		土器	165	81	1	50	■	土坑52	下層	赤生土・土器群	壺	253			
68	44	47	■	土坑30		土器	169	81	2	■	土坑52	下層	赤生土・土器群	壺	268				
68	45	■	土坑30		土器	147	81	3	50	■	土坑52	下層	赤生土・土器群	壺	257				
68	46	■	土坑30		土器	148	81	4	■	土坑52	下層	赤生土・土器群	壺	269					
68	47	■	土坑30		土器	145	81	5	50	■	土坑52	下層	赤生土・土器群	壺	256				
69	48	47	■	土坑30		土器	160	81	6	50	■	土坑52	下層	赤生土・土器群	壺	254			
70	1	■	土坑32-33		手づくね付	144	81	7	50	■	土坑52	下層	赤生土・土器群	壺	268				
70	2	■	土坑32		手づくね付	173	81	8	50	■	土坑52	下層	赤生土・土器群	壺	255				
70	3	■	土坑32		ペルト内・裏	174	81	9	■	土坑52	下層	赤生土・土器群	壺	267					
70	4	■	土坑32		裏	172	81	10	50	■	土坑52	下層	赤生土・土器群	壺	259				
70	5	■	土坑33		手づくね付	176	81	11	50	■	土坑52	下層	赤生土・土器群	壺	258				
70	6	■	土坑34		手づくね付	175	81	12	50	■	土坑53	下層	赤生土・土器群	壺	264				
70	7	■	土坑34		手づくね付	190	81	13	50	■	土坑53	下層	赤生土・土器群	壺	271				
70	8	47	■	土坑34		手づくね付	175	82	1	51	■	土坑55	下層	赤生土・土器群	壺	262			
70	9	■	土坑34		手づくね付	178	82	3	51	■	土坑55	下層	赤生土・土器群	壺	272				
70	10	■	土坑34		手づくね付	177	82	4	■	土坑55	中層	赤生土・土器群	壺	277					
70	11	47	■	土坑34		手づくね付	183	82	5	51	■	土坑55	下層	赤生土・土器群	壺	285			
70	12	47	■	土坑34		手づくね付	181	82	6	51	■	土坑55	下層	赤生土・土器群	壺	284			
70	13	47	■	土坑34		手づくね付	182	82	7	51	■	土坑55	下層	赤生土・土器群	壺	293			
72	1	■	土坑35		手づくね付	198	82	8	51	■	土坑55	上層	赤生土・土器群	壺	273				
72	2	■	土坑35		手づくね付	196	82	9	51	■	土坑55	下層	赤生土・土器群	壺	271				
72	3	■	土坑35		手づくね付	203	82	10	51	■	土坑55	中層	赤生土・土器群	壺	261				
72	4	■	土坑35		手づくね付	206	82	11	51	■	土坑55	中層	赤生土・土器群	壺	263				
72	5	■	土坑35		手づくね付	193	82	12	51	■	土坑55	下層	赤生土・土器群	壺	281				
72	6	■	土坑35		手づくね付	188	82	13	51	■	土坑55	上層	赤生土・土器群	壺	280				
72	7	■	土坑35		手づくね付	195	82	14	52	■	土坑55	中層	赤生土・土器群	壺	287				
72	8	■	土坑35		手づくね付	192	82	15	52	■	土坑57	上層	赤生土・土器群	壺	274				
72	9	■	土坑35		手づくね付	189	83	3	53	■	土坑57	上層	赤生土・土器群	壺	275				
72	10	■	土坑35		手づくね付	204	83	4	52	■	土坑57	上層	赤生土・土器群	壺	288				
72	11	■	土坑35		手づくね付	206	83	5	52	■	土坑57	中層	赤生土・土器群	壺	276				
72	12	■	土坑35		手づくね付	187	84	6	52	■	土坑58	中層	赤生土・土器群	壺	279				
72	13	■	土坑35		手づくね付	191	84	7	■	土坑58	中層	赤生土・土器群	壺	278					
72	14	■	土坑35		手づくね付	192	84	8	■	土坑58	中層	赤生土・土器群	壺	279					
72	15	■	土坑35		手づくね付	199	84	9	52	■	土坑58	中層	赤生土・土器群	壺	290				
72	16	■	土坑35		手づくね付	207	84	10	52	■	土坑59	中層	赤生土・土器群	壺	289				
72	17	■	土坑35		手づくね付	201	85	1	52	■	土坑60	下層	赤生土・土器群	壺	294				
72	18	■	土坑35		手づくね付	195	85	2	52	■	土坑60	下層	赤生土・土器群	壺	293				
72	19	■	土坑35		手づくね付	205	85	3	52	■	土坑60	下層	赤生土・土器群	壺	312				
72	20	■	土坑35	上層テラス上	手づくね付	197	85	4	■	土坑60	下層	赤生土・土器群	壺	295					
72	21	47	■	土坑35	手づくね付	184	85	5	■	土坑60	下層	赤生土・土器群	壺	313					
72	22	47	■	土坑35	手づくね付	199	85	6	53	■	土坑60	下層	赤生土・土器群	壺	309				
72	23	47	■	土坑35	手づくね付	208	85	7	52	■	土坑60	下層	赤生土・土器群	壺	307				
72	24	1	■	土坑37	■	手づくね付	208	85	8	52	■	土坑60	下層	赤生土・土器群	壺	311			
72	25	2	47	■	土坑38	下層一括	216	85	9	52	■	土坑60	下層	赤生土・土器群	壺	308			
72	26	3	■	土坑38	下層一括	212	85	9	52	■									

表5 蒲船津江頭遺跡III・IV区出土土器一覧表(3)

層位	番号	遺物番号	区	出土遺構	その他の出土情報	種類	器形	器形番号	埋置	番号	調査番号	区	出土遺構	その他の出土情報	種類	器形	器形番号
85 12				土坑60	Nel1	土師器	壺	297	97 3			土坑77		陶生・土師器	壺	370	
85 13				土坑61		土師器	壺	301	97 4			土坑77		陶生・土師器	壺	487	
85 14				土坑61		陶器	壺	302	97 5			土坑77		陶生・土師器	壺	377	
85 15	53			土坑62	中層	土師器	壺	313	97 6			土坑77		陶生・土師器	壺	381	
85 16	53			土坑62	中層	土師器	壺	314	97 7			土坑77		陶生・土師器	壺	382	
87 1	53			土坑64		土師器	壺	317	97 8			土坑77		陶生・土師器	壺	410	
87 2	53			土坑64		土師器	壺	316	97 9	58		土坑77		陶生・土師器	壺	396	
87 3	53			土坑64		土師器	壺	305	97 10	58		土坑77		陶生・土師器	壺	384	
87 5	53			土坑64		土師器	壺	318	97 11			土坑77		陶生・土師器	壺	406	
87 6	53			土坑64		土師器	壺	298	97 12			土坑77		陶生・土師器	壺	380	
87 6	53			土坑64		土師器	壺	318	97 13			土坑77		陶生・土師器	壺	388	
87 7	53			土坑64		陶器	壺	315	97 14			土坑77		陶生・土師器	壺	397	
87 8	53			土坑64		陶器	壺	321	97 15	58		土坑77		陶生・土師器	壺	395	
87 9	53			土坑64		陶器	壺	322	97 16	58		土坑77		陶生・土師器	壺	386	
87 10	53			土坑64		陶器	壺	323	97 17	58		土坑77		陶生・土師器	壺	385	
87 11				土坑64		陶器	壺	306	97 18			土坑77		陶生・土師器	壺	409	
87 12				土坑66		陶生・土師器	壺	299	97 19			土坑77		陶生・土師器	壺	390	
87 13	54			土坑66		陶生・土師器	高杯	323	97 20			土坑77		陶生・土師器	鉢	376	
87 14				土坑66		陶生・土師器	鉢	292	97 21			土坑77		陶生・土師器	鉢	389	
89 1				土坑68		土師器	壺	302	98 1	58		土坑78		陶生・土師器	壺	414	
89 2				土坑68		土師器	壺	303	98 2	58		土坑78		陶生・土師器	壺	392	
89 3	54			土坑68		土師器	壺	304	98 3	58		土坑78		陶生・土師器	壺	393	
89 4	54			土坑68		土師器	壺	305	98 4	58		土坑78		陶生・土師器	壺	384	
89 5	54			土坑68		土師器	壺	339	98 5	58		土坑78		陶生・土師器	鉢	412	
89 6	54			土坑68		土師器	壺	330	98 6	58		土坑78		陶生・土師器	鉢	383	
89 7	54			土坑68		土師器	壺	335	98 7	58		土坑79	下層一級	陶生・土師器	壺	415	
89 8	54			土坑68		土師器	壺	337	98 8	58		土坑79	下層一級	陶生・土師器	壺	422	
89 9	54			土坑68		土師器	壺	334	98 9	58		土坑79	下層一級	陶生・土師器	壺	417	
89 10				土坑68		土師器	壺	305	98 10	58		土坑79	下層一級	陶生・土師器	壺	425	
89 11				土坑68		土師器	壺	304	98 11			土坑79	下層一級	陶生・土師器	壺	393	
89 12				土坑68		土師器	壺	306	98 12			土坑79	下層一級	陶生・土師器	壺	416	
89 13	54			土坑68		土師器	高杯	329	98 13	58		土坑79	下層一級	陶生・土師器	壺	418	
89 14	54			土坑68		土師器	高杯	325	98 14	58		土坑79	下層一級	陶生・土師器	壺	394	
89 15	55			土坑68		土師器	高杯	327	98 15	58		土坑79	下層一級	陶生・土師器	壺	421	
89 16	55			土坑68		土師器	高杯	326	98 16	58		土坑79	下層一級	陶生・土師器	壺	420	
89 17	55			土坑68		土師器	高杯	328	98 17	58		土坑79	下層一級	陶生・土師器	壺	425	
89 18				土坑68		土師器	高杯	333	98 18	58		土坑80		陶生・土師器	壺	423	
89 19				土坑68		土師器	鉢	301	100 3			土坑81		陶生・土師器	鉢	440	
89 20	55			土坑68		土師器	鉢	332	100 4	58		土坑81		陶生・土師器	鉢	447	
89 21	55			土坑68		土師器	漁	331	100 5	58		土坑81	下層一級	陶生・土師器	壺	444	
90 1	55			土坑69		土師器	漁	340	100 6	58		土坑82		陶生・土師器	壺	448	
90 2	55			土坑69		土師器	漁	341	100 7	58		土坑82		陶生・土師器	壺	420	
90 3	55			土坑69		土師器	漁	342	100 8	58		土坑82		陶生・土師器	壺	421	
90 4	55			土坑69		土師器	漁	343	100 9	58		土坑82		陶生・土師器	壺	442	
90 5	55			土坑70		土師器	漁	344	100 10	58		土坑82		陶生・土師器	壺	450	
90 6	55			土坑70		土師器	漁	452	100 11	58		土坑82		陶生・土師器	鉢	449	
92 1				土坑71		陶生・土師器	壺	359	102 1	59		土坑83		陶生・土師器	壺	451	
92 2	56			土坑71		陶生・土師器	壺	347	102 2	59		土坑84		陶生・土師器	壺	446	
92 3				土坑71	中層一級	陶生・土師器	壺	401	102 3	59		土坑84		陶生・土師器	壺	430	
92 4	56			土坑71	中層一級	陶生・土師器	壺	345	102 5	59		土坑85		陶生・土師器	壺	437	
92 5	56			土坑71	中層一級	陶生・土師器	鉢	360	102 6	59		土坑85		陶生・土師器	鉢	430	
92 7				土坑71		陶生・土師器	壺	368	102 7	59		土坑85		陶生・土師器	壺	433	
93 1	56			土坑72	Nel1	陶生・土師器	壺	354	102 8	59		土坑85		陶生・土師器	壺	426	
93 2				土坑72		陶生・土師器	壺	365	102 9	59		土坑85		陶生・土師器	壺	428	
93 3				土坑72		陶生・土師器	壺	363	102 10	59		土坑85		陶生・土師器	壺	451	
93 5				土坑72		陶生・土師器	壺	367	102 11	59		土坑85		陶生・土師器	壺	454	
93 6				土坑72		陶生・土師器	壺	368	102 12	59		土坑85		陶生・土師器	壺	455	
93 6	56			土坑72		陶生・土師器	壺	361	102 13	59		土坑85		陶生・土師器	壺	434	
93 7				土坑72		陶生・土師器	鉢	362	102 14	59		土坑85		陶生・土師器	鉢	431	
93 8	56			土坑72	Nel2	陶生・土師器	壺	355	102 15	59		土坑85		陶生・土師器	鉢	432	
93 9	56			土坑72	Nel2	陶生・土師器	壺	356	102 16	59		土坑85		陶生・土師器	鉢	427	
93 10				土坑72	Nel2	陶生・土師器	壺	364	102 17	59		土坑85		陶生・土師器	鉢	445	
94 1	57			土坑73	Nel1	陶生・土師器	壺	353	102 18	59		土坑85		陶生・土師器	壺	445	
94 2	57			土坑73	Nel1	陶生・土師器	壺	357	102 19	59		土坑85		陶生・土師器	壺	436	
94 3	57			土坑73	Nel2	陶生・土師器	壺	373	102 20	59		土坑86		陶生・土師器	壺	441	
94 4	57			土坑73	Nel2	陶生・土師器	壺	348	115 1	59		土坑86		陶生・土師器	壺	10	
94 4	57			土坑73		陶生・土師器	壺	455	115 2	59		建物4	建物34	陶生・土師器	壺	441	
94 5	57			土坑73		陶生・土師器	壺	349	115 3	59		建物4	建物35	陶生・土師器	壺	15	
94 6	57			土坑73		陶生・土師器	壺	456	115 4	59		建物4	建物36	陶生・土師器	壺	12	
94 7				土坑73		陶生・土師器	壺	457	115 5	59		建物4	建物37	陶生・土師器	壺	11	
94 8				土坑73		陶生・土師器	壺	368	115 6	59		建物7	建物78	陶生・土師器	壺	22	
94 9				土坑73		陶生・土師器	壺	404	115 7	59		建物7	建物79	陶生・土師器	壺	17	
94 10				土坑73		陶生・土師器	壺	369	115 8	59		建物7	建物80	陶生・土師器	壺	16	
94 11				土坑73		陶生・土師器	壺	371	115 9	59		建物1	建物81	陶生・土師器	壺	9	
94 12	57			土坑74	Nel1	陶生・土師器	壺	351	115 10	59		建物1	建物82	陶生・土師器	壺	20	
94 13				土坑74		陶生・土師器	壺	405	115 11	59		建物1	建物83	陶生・土師器	壺	14	
94 14				土坑74		陶生・土師器	壺	403	115 12	59		建物1	建物84	陶生・土師器	壺	21	
94 15	57			土坑74		陶生・土師器	壺	356	115 13	59		建物1	建物85	陶生・土師器	壺	1	
94 16	57			土坑74		陶生・土師器	壺	370	115 14	64		建物1	建物86	陶生・土師器	壺	19	
94 17				土坑74		陶生・土師器	高杯	372	115 15	59		建物1	建物87	陶生・土師器	壺	8	
94 18				土坑74		陶生・土師器	鉢	402	117 1	64		土坑1		黒土土器	鉢	4	
94 19				土坑75		陶器	壺	374	117 2	59		土坑1		黒土土器	壺	3	
94 20	57			土坑75		陶器	壺	375	117 3	59		土坑1		黒土土器	壺	1	
94 21	57			土坑75		陶器	壺	399	117 4	59		土坑1		黒土土器	壺	2	
94 22	57			土坑75		陶器	壺	360	117 5	59		土坑1		黒土土器	壺	1	
94 23	57			土坑76		陶器	壺	355	117 6	59		土坑1		黒土土器	壺	1	
94 24	57			土坑76		陶器	壺	370	117 7	59		土坑1		黒土土器	壺	1	
94 25	57			土坑76		陶器	壺	400	117 8	59		土坑1		黒土土器	壺	1	
94 26	57			土坑77		陶器	壺	378	117 9	59		土坑4		黒土土器	壺	6	
94 27	57			土坑77		陶器	壺	387	117 10	59		土坑4		黒土土器	壺	6	

IV まとめ

1 遺跡の時期

今回報告した蒲船津江頭遺跡Ⅲ・Ⅳ区から多量の土器が出土し、その多くが弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけてのものと考えられる。しかしながら、庄内系や布留系、特に小型精製器種といった外来系土器の出土は多くではなく、乏しい土器組成の構成によっては、在地系土器の乏しい型式変化のみで弥生土器か土師器か、古墳時代の開始後か否かの判断の困難な場合がある。よって、現段階ではその区分の不明瞭なものは、「弥生時代終末から古墳時代初頭」と留めるにしておきたい。その上で、検出した遺構の時期について概観する。ただ、Ⅲ・Ⅳ区の調査では、Ⅰ・Ⅱ区よりも外来系を含めた構成内容の豊富な土坑の一括資料が多く、最終刊で出土土器を全て報告した段階で、改めて全体的な土器様相の整理が必要であると考える。

《掘立柱建物跡》

Ⅲ・Ⅳ区とともに掘立柱建物跡の礎盤から出土した土器はほとんどが小片であり、また出土土器が伴わない建物も多数ある。よって、個別的に詳細な時期を判断することは困難なため、建物跡の出土土器を全体的に概観する。まず、Ⅲ区ピット116で出土した楕の把手（第43図27）は、特に他との時期の相違が明瞭で、少なくとも古墳時代中期以降に下ることになるが、Ⅰ～Ⅳ区の建物跡出土土器で他に同様の例は無く、混入品であると考えておきたい。それ以外で、明瞭に古墳時代の土師器と判断されるものはない。小型丸底壺と判断した第20図20についても、庄内並行期か布留並行期かは、判別し難いものである。

建物跡と切り合う土坑の出土土器も、建物跡の時期の判断材料となる。Ⅲ区で土坑と切り合い関係のある建物跡は、9号掘立柱建物跡（8・46・77・79号土坑に切られる）、10号掘立柱建物跡（19・23・24・30号土坑を切る）、15号掘立柱建物跡（19号土坑を切る）、26・28号掘立柱建物跡（70号土坑に切られる）である。関連する土坑の出土土器も、土師器と明確に判断できるものは少ない。30号土坑の第66図9の直口壺の内面ケズリは、ほとんど見られないもので、新しい要素と判断する。また、同じ30号土坑出土の第67図35は、布留系壺である。70号土坑出土の第90図6の壺の内面ケズリも新しい要素と判断し、これらの土器は古墳時代初頭の土師器と考える。そうすると、10号掘立柱建物跡は古墳時代の所産と判断される。一方で、建物同士の先後関係を含め（第124図参照）、26～28号建物跡は全て古墳時代初頭より下ることはない。

よって、掘立柱建物跡の時期について、明確に古墳時代への帰属が認められるのはごくわずかで、全体的には弥生時代終末から古墳時代初頭の範疇の遺構として捉えておきたい。古墳時代前期まで下るもののが含まれる可能性は十分にあるが、現段階ではその証左は認められない。

《土坑》

出土土器と遺構の切り合い等から土坑の時期を整理すると以下のようになる。

【弥生時代終末】：51・66・72号土坑

【弥生時代終末から古墳時代初頭】：Ⅲ区4・13・19・20～23・25・26・28・29・33～35・38・39～41・43・46・48・50・58・66・71・73・74・77～80・82～84・86号土坑

【古墳時代初頭】：Ⅲ区11・14・30・52・55・57・59・60・62・70・76・81・85号土坑

【古墳時代前期】：Ⅲ区3・69号土坑

〔古墳時代中期～後期〕：Ⅲ区2（5c末～6c初）・64（7c初）・68（5c中頃）号土坑

〔奈良時代〕：75号土坑

〔平安時代〕：Ⅲ区12（9世紀）・44（10世紀）・49（10世紀）・53（11世紀）号土坑、Ⅳ区1（10世紀）・4（9～10世紀）号土坑

〔近世〕：Ⅲ区7・37・61号土坑

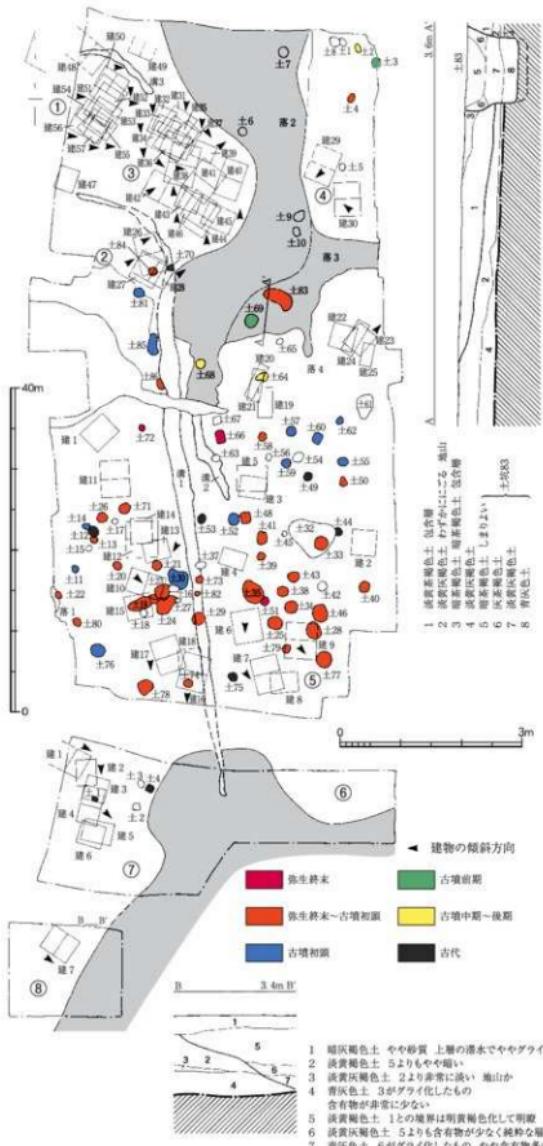
出土土器が伴わないので時期不詳の土坑については、Ⅲ区の5・6・9・10号土坑の埋土は、7号土坑のものと非常に類似しているため、近世の所産と考えられる。Ⅲ区32号土坑の埋土は灰褐色土主体の特徴的なもので、Ⅲ区61号土坑と類似する。32号土坑については、その出土土器が遺構の時期を反映せず、61号土坑と同様の近世の所産と考えられる。また、Ⅳ区の2・3号土坑は、埋土の特徴から弥生時代終末から古墳時代にかけてのものである可能性が高い。

まとめると、遺構や出土土器の量から、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての時期に、集落は出現するとともに最盛期に達している。古墳時代前期には、急激に集落の規模が縮小しており、その後は断続的な土地利用の痕跡がわずかに認められる程度である。以上は、既報告のⅠ・Ⅱ区とともに共通する様相である。

2 旧地形の復原

本調査区内の土壤は低湿地の粘質土の特性のためか、遺構の検出作業をはじめ層位の認識が困難となる面が多分にあった。特に地山と包含層を色調や土質的な相違では区分しづらく、好条件が伴わないとその境界も厳密には判別し難かった。また、建物跡の柱穴については、重機によって調査面より下方へ掘削していく段階で礎盤を検出したが、柱穴の堀形自体はほとんど確認できなかつた。埋土を明瞭に認識でき、時期の近い土坑等の検出面も参考となるが、特に包含層が堆積する範囲等では、建物跡の遺構面を総体的に把握することができなかつた。そこで、建物の存続期間における遺跡の旧地形は、主に遺構の平面的な分布、礎盤の検出標高等をもとに復元を試みたい。多数の掘立柱建物跡の礎盤は検出された標高に幅があるが、個々の礎盤間の標高差は各建物での柱穴の掘削深度の相違など多面的な要素が含まれて有意性を見だしにくい場合がある。しかし、地点間での平均的な検出標高の推移や、同一の建物に組み合う礎盤間で一定の方向性のある高低差がある場合は、建物が造られた際の地形が反映されている可能性が考えられる。第123図では、組み合う礎盤が一定の方向性で高低差のある建物について、低く傾斜する方向を矢印で示している。地形の変化を特徴的に表す土層は、わずかであるが、Ⅳ区の西側で基本土層を確認する際に認められた（B-B'）。西側から東側へと急激に落ち込む状況が確認でき、またその周辺から東側へは礎盤の分布が途切れる点と対応していることがわかる。これを参考とすると、ある程度低位では、基本的に土坑や柱穴等の遺構の分布は途切れると想定できる。

Ⅲ区北側の包含層が広く堆積するⅢa区の建物跡の傾斜方向、礎盤等の遺構の検出状況は次のようなになる。西側で礎盤が著しく集中する。50～57号建物の集中する部分（①）では、多くが東側へ低くなる傾斜を見せており、礎盤の標高は1.8～2.4mである。26～28号建物の重複する部分（②）では、建物はとともに南東方向への傾斜を見せ、礎盤の標高は2.0～2.7mである。31～46号建物の周辺（③）では北側の建物は南側へ低く傾斜し、南側の建物は北側へ低く傾斜する。また、その間の中央部分では東へ低く傾斜するものがある。礎盤の標高は1.1～1.8mである。①～③



第123図 III・IV区遺構配置図及び地形復元想定図
(1/600・土層は1/80)

では、全体的な礎盤の標高の傾向は、建物の低く傾斜する方向と概ね一致して低く変化していることもあり、③の方向へ低くなると考えられる。また、①～③それぞれでは、緩斜面であるため礎盤が集中するのに対し、①と③、②と③の間が空閑地となるのは、ある程度傾斜が強かったという可能性が考えられる。IIIa区の東側(④)では、29・30号建物がそれぞれ南西、北西方向へ低く傾斜しており、礎盤の標高は1.6～2.4mで全体的に東から西側へ低くなる傾向がある。その北側では、複数の土坑が分布し、包含層の堆積が途切れる部分が認められる。以上のようなIIIa区の状況をまとめると、③と④との間の遺構の空閑地となる周辺が最も低位の谷部分となると想定できる。なお、④の礎盤の分布が、③程標高が低くならずに途切れるのは、④側の落ち込みの傾斜が③側よりも急なためと考えられる。

III区南側であるIIIb区の建物跡の傾斜方向、礎盤等の遺構の検出状況は次のようになる。IIIb区では検出面のほとんどで基

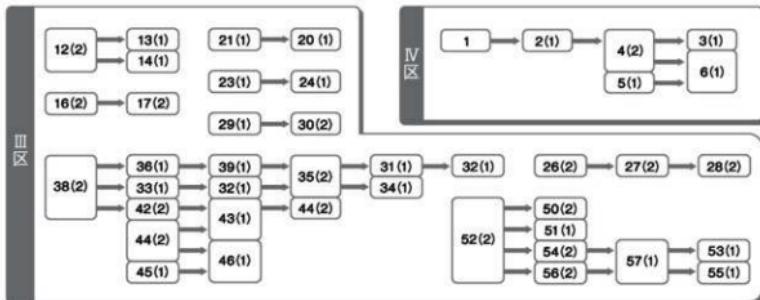
盤層が認められる。北側へ広がりⅢa区へと続く包含層の堆積範囲では、南側の縁辺付近で包含層を切り込む土坑や下層の礎盤が検出されたが、わずかである。その付近の堆積土層(A-A')では、軸が地形の変化と直交していない可能性もあるが、落ち込みは緩やかと見られる。また、各建物跡で組み合う礎盤間の高低差によって一定の方向性で傾斜する例は少なく、その傾斜の方向の近似する建物跡が近接して集まる例もⅢa区に比べ限られている。その中で、南端部付近では概ね南方向へ低く傾斜する建物跡がまとまって見られ、特に南東隅付近(⑤)では、建物の傾斜だけでなく、遺構面自体の急激な下降が確認できている。礎盤の検出標高については、Ⅲb区の南北の中央部付近の1・5・11・12~14号建物で2.3~2.9m、南端部西側の16~18号建物で、2.6~2.8m程度で、南端東側(⑤)の最深部で1.8~2.1m程度である。以上のようなⅢb区の状況をまとめると、中央部付近を中心に、傾斜のあまりない地点と見られるが、北端周辺は北へ緩やかに低くなり、南端周辺は東西で程度の差はありながら南側に低くなり始める。なお、北側の包含層は、それを明瞭に切る67・68・81号土坑に先行する時期に、堆積が始まっていたことが分かる。

IV区では、多数の礎盤の検出にもかかわらず、その中から建物跡の組み合わせを認識できたものは少なく、調査区の西側においてのみである。その建物跡の傾斜方向は、南から南東の方向へ低くなっている。また、礎盤等の遺構の分布は東西に分かれ、中央部分を空閑地となっている。礎盤の標高は、東側(⑥)では1.7~2.4m程度で中央に向かって東から西へと低くなっていく。また、西側の北(⑦)で標高1.8~2.3m程度、西側の南で(⑧)で標高2.0~2.4m程度で、ともに中央寄りに低くなる傾向がある。よって以上から、IV区では中央周辺が低位の谷部分で、そこに向かい東西から緩やかに下降する地形と捉えられる。なお、⑥の北側にあたるⅢb区の⑤で地形の急激な下降が認められているが、⑤と⑥のそれぞれ最も低位となる礎盤の標高に大きな差はないため、⑤の最深部から⑥へはさほど地形が下降していないと考えられる。

上記のような状況を総合して、Ⅲ・IV区の全体的な地形の状況をまとめると、最も標高が高いと見られるのはⅢ区南側、Ⅲb区周辺で、傾斜の少なく平坦な地点と考えられる。そこから南北に向け地形が下降する。北側のⅢa区では南北に谷状の低位部分が通ると考えられ、東西から地形が下がるが、その傾斜は西側が緩やかで東側は急と見られる。南側へは、Ⅲb区内の南東隅やIV区で低位となっていき、谷部がIV区の北端中央部付近から南側になるにつれて広がっていくと見られる。よって、IV区では谷部に向かって、東西に分かれて中央部および南側へ落ち込んでいくと考えられる。なお、このIV区で南側に向かって、西側よりも東側で先に遺構が途切れるため、東側で先に低位の谷部に至ると考えられる。

3 掘立柱建物跡

検出した多数の礎盤には、建物跡としての相互の組み合わせを捉えられなかったものも多いが、Ⅲ区では57棟、IV区では7棟分の建物跡としての礎盤の組み合わせを抽出した。Ⅲ・IV区で確認できたその規模は、ともに2×1間もしくは1×1間である。建物跡は同一場所で重複する場合がほとんどで、繰り返し建物が建て直されている様相が見える。それらの建物群には、遺構同士の切り合いがないため先後関係の不明なものもあるが、直接礎盤同士が切り合って先後関係の判明するものを整理すると第124図のようになる。遺構配置図からは、建物の規模と分布状況との相



第123図 III・IV区建物跡変遷図

関性が基本的には認められず、第124図で整理した先後関係から規模と築造順序にも相関性が認められない。また、その中の建物の軸の変遷にも法則性等を見出すことはできない。。同様な状況が、I・II区の建物跡でも認められ（福岡県教育委員会 2009『蒲船津江頭遺跡 I』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋文化財調査報告第6集）、築造場所と時間的な変遷を反映していない 2×1 間と 1×1 間という建物の規模の差は、やはり建物の機能・性格と関連付けて捉えるのは困難である。ただ、IIIb区の東礎盤集中部や中央礎盤集中部の19～25号掘立柱建物跡等で見られるように、特定の場所において小型の礎盤が集中したり、桁・梁間の差が極端な建物の建て替えが行われたりしていると考えられる状況が注目される。特定の性格を有する可能性のあるの建物（床を持った建物ではない可能性もある）が存在するとともに、それが一定の位置に配置され続けるならば、集落内の空間利用に一部の法則性があったと考えることができる。

以上のように本書では、主にIII・IV区の掘立柱建物跡および土坑とその出土土器について、またIII・IV区の出土石器についても報告した。I・II区の報告では触れていなかった出土金属製品および出土木器については、I～IV区をまとめる形で報告した。

III・IV区の溝、落ち込みとその出土土器とピット、包含層や検出時等の出土土器は未報告であり、最終刊で報告を行う。特に1号溝はやや大型で、IIIb区を縱貫する特徴のあるものとして、集落の変遷等を捉える上で重要な要素である。また、出土土器をすべて報告した段階で、特に弥生時代終末から古墳時代前期にかけての遺跡内の出土土器の変遷を整理し、掘立柱建物跡や土坑といった遺構についても、I～IV区をまとめて、改めて整理をする必要がある。土坑については、湧水する深い土坑は井戸と想定される等するが、個々にその性格には言及してこなかったので、類型の整理を通して性格・機能で言及できる点には触れていきたい。木器や石器などについても、集落の生産活動を読み解く要素として、総体的な様相について検討したい。

最終刊では、以上のような内容を整理した上で総括し、有明海沿岸地域の低地に立地する集落として、総合して遺跡の評価を行いたい。なお、木器の樹種分析をはじめとした科学分析の結果についても最終刊でまとめて提示する。

報告書抄録

福岡県行政資料

分類番号 J H	所属コード 2114107
登録年度 21	登録番号 7

有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第8集

蒲船津江頭遺跡Ⅱ

平成22年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

印刷 コミヤ印刷

みやま市瀬高町太神1359-2